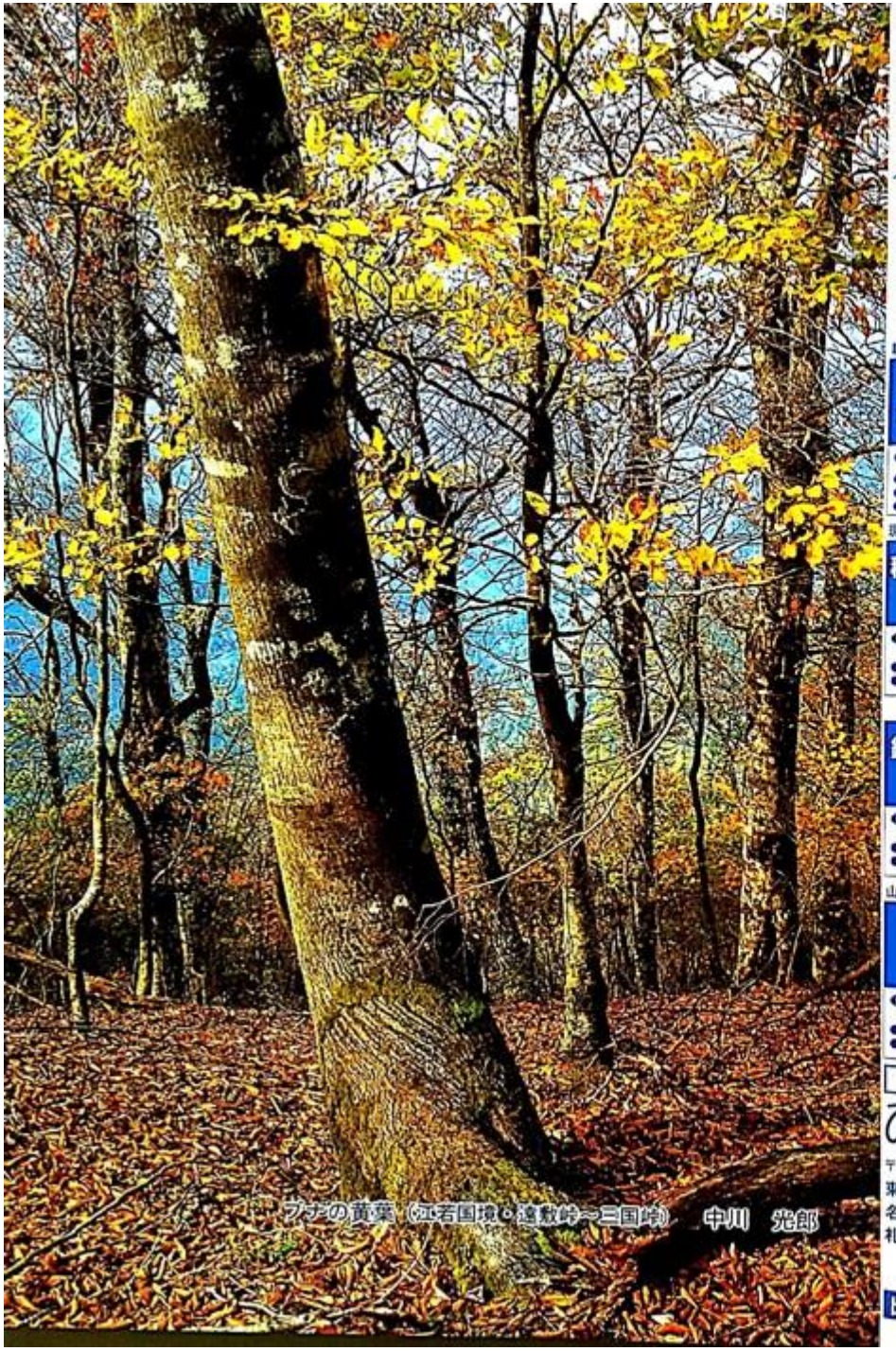


ブナの黄葉（辺若国境●遠敷峠→三国峠）　中川　光郎

世界の山旅®
辺境の旅

「一人では行けない、でも、行きたい。」
それにお応えするのが
実体験に基づいた
アルパインツアーの旅づくりです。

総合ツアーカタログをご請求ください。

紅葉絵のような風景、連なる大岩峰、東部アルプスを満喫

秋のドロミテと オーストリア・ハイキング 9日間

出発 大阪・名古屋・東京
- ●9/20発……¥518,000
- ●10/4発……¥462,000
- ●10/12発……¥456,000

黄金に輝くドイツのHerbst(秋)を楽しむ旅

秋のドイツ バイエルン・アルプス ハイキング 9日間

出発 大阪・名古屋・東京
- ●10/10発……¥468,000

夜空に輝く神秘のカーテン。秋のカナダの魅力に迫る旅

秋のイエローナイフ・オーロラ ウォッチングとロッキー縦断 8日間

出発 大阪・東京
- ●9/15●9/22●9/29発……¥488,000

現地在住ツアーリーダー同行・ロッキーのハイライト

秋のカナディアン・ロッキー・ 満喫ハイキング 8日間

出発 大阪・東京
- ●9/13●9/20●9/27発……¥416,000
- ●9/16発……¥428,000

黄葉に輝く名スポットを巡り、山小屋滞在と登頂プラン

ロッキーの聖地「レイクオハラ」と カナナスキス・ハイキング 9日間

出発 大阪・東京
- ●9/28発……¥460,000

湖畔の静かなロッジで深い感動を味わう

アシニボイン・ロッジと レイクルイズ 8日間

出発 大阪・東京
- ●9/11●9/16発……¥482,000

秋色に染まる乾期のベストシーズンに

錦秋の四姑娘山ハイキングと 九寨溝、黄龍 9日間

出発 大阪・名古屋・東京・福岡
- ●10/6発……¥326,000
- ●10/15発……¥326,000

黄葉に輝く名峰、秀峰の山々へ

梅里雪山、ミニヤコンカ氷河展望と コンガ雪山トレッキング 13日間

出発 大阪・名古屋・東京・福岡
- ●10/11●10/24発……¥418,000

中国の辺境、雲南最北の山麓

聖山・梅里雪山アイスフォール展望 ハイキング 7日間

出発 大阪・名古屋・東京・福岡
- ●10/14●10/21発……¥298,000

山小屋2泊のゆったり登山とビーチリゾート満喫

Mt. キナバル ゆったり登頂 8日間

出発 大阪・名古屋・東京
- ●9/8発……¥216,000
- ●10/13発……¥196,000

韓国最高峰登頂と済州島を満喫

韓国最高峰・漢拏山登頂と 済州島満喫 4日間

出発 大阪・名古屋・東京
- ●10/28発……¥148,000
- ●11/4発……¥132,000

美しい紅葉に彩られた雪岳山とソウル近郊の北漢山へ

錦秋の雪岳山登頂と 北漢山ハイキング 4日間

出発 大阪・東京
- ●10/8発……¥168,000
- ●10/15発……¥176,000

アルパインツアーのホームページをご覧ください。　http://www.alpine-tour.com

国土交通大阪登録旅行業第490号／(社)日本旅行業協会正会員 ボンド保証会員
CATS アルパインツアーサービス株式会社
〒550-0003　大阪市西区京町堀1-4-3 TCF肥後橋ビル2F
東　京／☎03(3503)1911　大　阪／☎06(6444)3033
名古屋／☎052(581)3211　福　岡／☎092(715)1557
札　幌／☎011(711)7106　仙　台／☎022(265)4611(転送)
(㈱)りんゆう観光)　広　島／☎082(542)1660(転送)
e-mail:osaka@alpine-tour.com

山仲間でオリジナルツアーを企画してみませんか。

山岳会、ハイキングクラブで企画
ツアーリーダーも同行し、安心の山旅

山岳会、ハイキングクラブなどで海外トレッキングやハイキングを企画したい。いつもの山仲間で海外の山歩きをしてみたい、というような場合には、アルパインツアーからツアーリーダーが同行し、ご案内をいたします。旅行プランについては、経験豊富なスタッフにご相談下さい。

出張説明会　山の仲間がお集まりのときに、当社社員が海外トレッキングのスライドを上映します。

Photo essay

布袋葵

題字　中田蘭石
撮影　由井　収
文　松永恵一

彼岸花（稲渕）

本薬師寺跡に布袋葵が咲きました
布袋葵は９月１日の誕生花
英名はウォーター・ヒアシンス
花言葉　揺れる心　温かい心
葉の根元に七福神の布袋さまの
お腹のような浮袋を持っている
１週間で倍に増えていくので
青い悪魔と恐れられています
爽やかに咲く儚い花です
淡紫色の花は一日で全部開花し
翌日には茎が折れて水中に沈む
トンボが飛び交っています
ずいぶん涼しくなってきました
隣の明日香の稲渕では彼岸花が…
もうすっかり秋です

萩（白毫寺）

ホテイアオイ（畝傍山遠望）

季節の実景

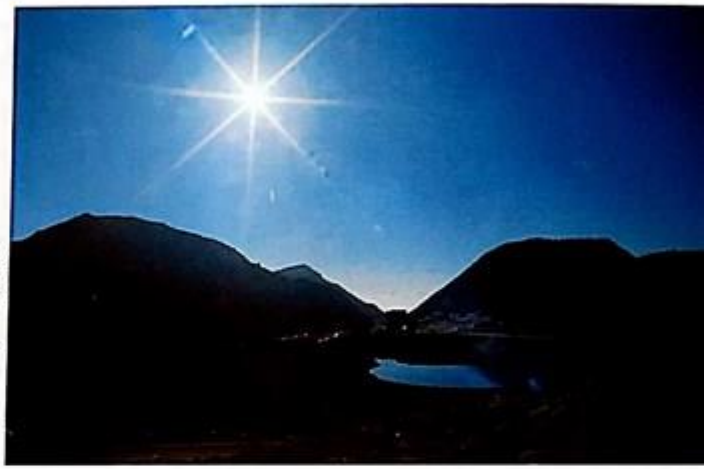
秋の高原

初秋

撮影　武市通治

ひと休み（ひるがの）

斜陽（ノリクラ）



秋晴れ（ノリクラ）

鰯雲（ひるがの）

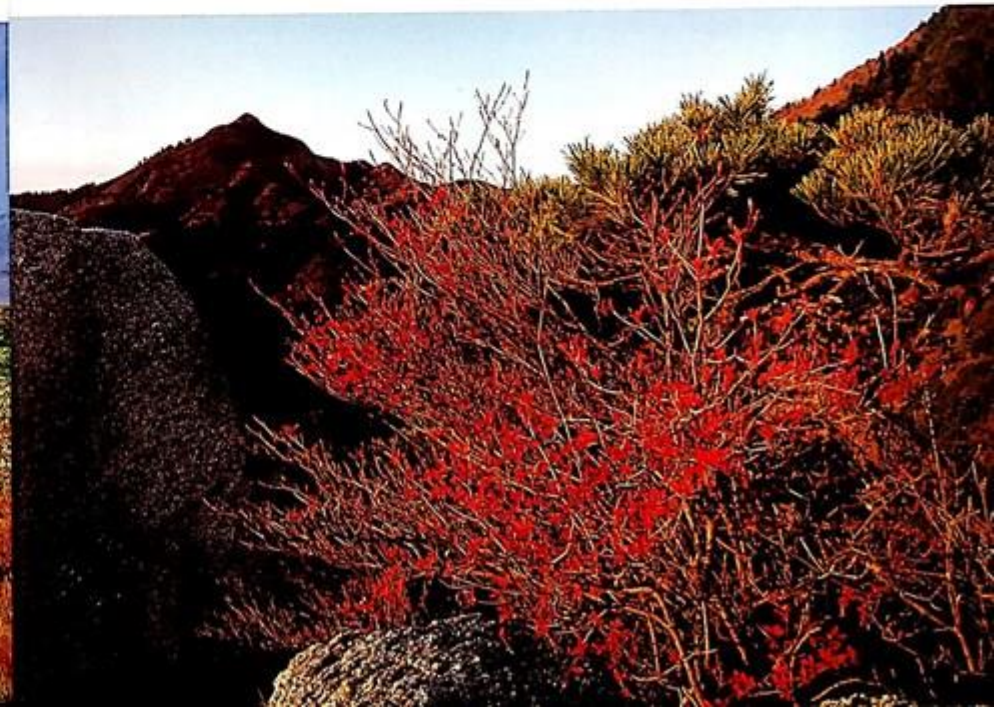
水面煌めく（ノリクラ）

朝の山稜を行く（北アルプス・猫又山ブナクラ峠） 一芝　義雄

秋彩（北アルプス・岩小屋岳） 稲垣　勝義

秋の弥陀ヶ原高原（北アルプス・立山） 高岡　富美子

秋朝に彩る（鈴鹿・御在所岳） 武田　誠司

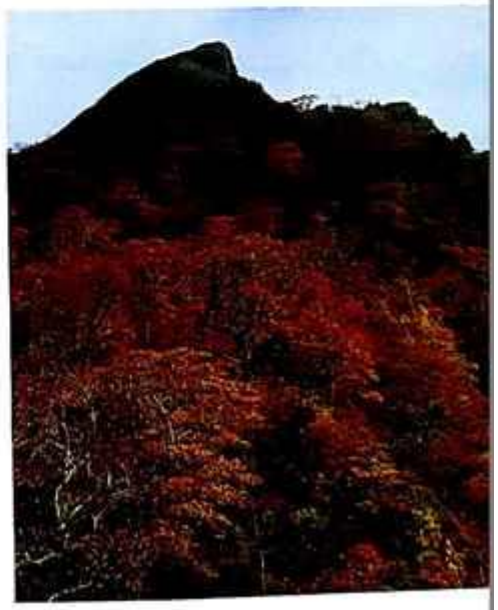


越美国境の秋 －冠山－

奥田 英一郎

狼いの台地（冠平）

黄葉の自然林が続く



セピア色の山頂

新ハイキング 別冊 関西の山
'07年9・10月 初秋 第96号

●目次

表紙：松田敏男「湖国大谷山山頂満月の図」（湖北）

●作者プロフィール●1949年、京都市生まれ。京都市立芸術大学卒。1997年より山岳版画、山岳画の個展多数開催。（京都下安曇路、南アルプス山小屋、東京ギャラリー百号、他）山の版画集「光る山山」刊行（東京銀座北辰堂）。京都山と野に親しむ会代表、日本山岳会会員

●グラビア
布袋葵……撮影 由井 収
季節の実景（初秋）「秋の高原」……文 松永 恵一
（口絵）中川光郎 稲垣勝義 武田誠司 一芝義雄 高岡富美子 奥田英一郎 4 2
随想（山のエッセイ）
尾瀬の木道に危惧する……綱本 逸雄 11
星とアカヤシオとSL……鷲見 守康 10

紀行
雲取山と飛龍山（奥多摩）……田中 明 14
雨飾山と霧訪山（北信・中信）……木村 太郎 18
越百山・摺古木山から大平峠（中央アルプス）……中澤與司博 22
連載 標高による山の紹介シリーズ 36 △△96mの山……松田 敏男 26
池木屋山・白木峰・経ヶ岳・桟敷ヶ岳……鷲見 守康 28
経ヶ岳から法恩寺山（越前）……小山 誠次 32
薬木田谷から釣瓶岳ナガオ尾根（北良）……長谷川雅俊 37
ガラン谷のオマキヤシキへ（鈴鹿）……山形 明 42
吉野川・四万十川・球磨川、そして淀川……
連載 三角点を訪ねて㊷
大白木山（関東）……礒部 純 58

●エリヤ別探鉱研究 京都北山を歩く・ミニガイド（第5回）
①寒谷峠から鷹頭崩山 ②小野郷から半国高山
③祖父谷峠から城丹国境尾根 ④旧花折峠から天ヶ森（ナッチョ）
⑤知見八原から知井坂・八ヶ峰……村田 智俊 46
●旗振り通信の新研究⑤
生駒山系・萬願・時計・旗振り山……柴田 昭彦 52
●文学歴史探訪ハイク㊷
堺に与謝野晶子を訪ねて……松永 恵一
●〈山のレポート〉山の地名を歩く㊾「由良ヶ岳」……西尾 寿一 62 66

コースガイド
1 白王山から笠縫山縦走（湖東）……長宗 清司
2 戸倉山（南信）……金谷 昭
3 船木浅間山・猫ノ尾（南勢）……藪木 伸人
4 高尾山・平治川・鳴谷・相須（南紀）……山形 歳之 70 72 74 76

沿線ハイキングガイド……80
せせらぎ……83
新ハイサービスチェーン……87
新ハイ関西山行計画……92
新ハイ関西山行報告……103
入会の案内・新入会員紹介……111
編集後記・広告案内……112

巻頭言

学者の研究成果が次々と報告され、地球温暖化による恐ろしい将来予測がなされている。二酸化炭素の排出量を減らし、それを吸収してくれる森林の伐採を食い止めなければ、気温は上昇し続け、そのために起こる地球の変化をあらゆる面から予測し、危機感をもって警鐘を鳴らすものである。

グローバルな視点に立てば、消費エネルギーや生産をどうするかだろうが、一登山者として邪推してみると、まず気温が山中で30度以上になれば体力的に山には登れない。関西の低山で言えば当面、6月頃から9月までは山に登ろうにも暑さで登れなくなる。冬に雪山は楽しめない。また、いままで見なかったいろいろな虫が異常発生して山中に入ることもできない。やがて谷筋の水が涸れ、草花・樹木も大半が枯れる。林道や登山道はちょっとした集中豪雨でズタズタに崩壊する。

このようになれば、いまの花や自然に親しむ登山などは昔の夢物語である。しかし現在、このような兆候が一切無いとはいえない。これらを予見する変化を、山を歩いていていろいろ感じるのである。

新ハイキング関西（代表）村田 智俊

尾瀬の木道に危惧する

網本　逸雄

ミズバショウシーズンの6月4日、二十数年来念願だった尾瀬へ妻と行った。沼山峠からくだって大江湿原に入ると、はるか長蔵小屋まで枯れ草に覆われた広大な湿原と尾瀬沼が臨まれた。だが、ひと目見てかなり陸化が進んでいると感じた。三十年程前に訪れたことのある妻は「以前は、もっと湿地が広がっていた」とびっくりしている。

ミズバショウは木道沿いの小川に群生。木道近く所どころにリュウキンカの小群落、ショウジョウバカマ一本がぽつんぽつんと咲いている。"登山客"は、大半が中高年のグループで、JTB・阪急トラビックスなどの旅行会社企画ツアーの参加者。木道から間近に見る小川のミズバショウに歓声を上げている。

小川は、木道敷設によって周辺の集水域からの土砂や水の流れが変化し、形成されたものとみた。なぜ木道沿いにミズバショウなどの群落が生育するのか。木道の腐食・劣化により生じたバクテリアが有機物を分解し、植物の栄養源を供給しているからだろう。

このごろ各地で使われだした「木道」は、「広辞苑」にも記載がない尾瀬独特の用語で、PR写真などに「尾瀬のシンボル的存在」と喧伝されている。もともと、登山者から湿原を保護するため、七割の土地所有者の東京電力、三割の国有林を管理する群馬・福島・新潟三県が五十数年前から総延長57㌔敷設した。木道の寿命は七～十年で架け替える。工事費は木道1㍍の現単価が約12万円という。

私も旅行会社の企画ツアーの参加でコースが制約され、沼尻休憩小屋までの往復だったが、長蔵小屋から湖畔沿いの木道は延々と地面に埋め込まれ、山腹の集水域と尾瀬沼を遮断している。これでは、年間30万人といわれる登山者の靴泥、食べかす、細菌、微小な都会のごみなどが、降雨や雪解け時期に沼へ流入してしまう。沼の浄化や浅瀬の動植物の産卵・生息場所はじめ、生態系のサイクルの破壊につながりかねない。

関西では、琵琶湖の湖周道路の強引な建設で、湖水浄化の役割を果たす貴重なアシの群落が大部分消失した（急近、遅まきながら復活の取り組みがある）。

また、二十数年前、国の天然記念物・深泥池（京都市北区）保護の名目で、京都市建設局（当時）による公園計画が持ち上がった。池を取り囲む山腹の集水域に、雨水排水路・ベンチ付きの遊歩道をめぐらす計画だった。これでは、自然水の遮断と生態系サイクル破壊で、氷河期生き残りのミツガシワやミズゴケなど貴重な水生植物群落と池そのものが死滅すると、在京の学者・市民達が訴え、中止させた。

今年3月、日本生態学会第54回大会は「湿原における植物群落への木道設置の影響」（小林祥子・宇都宮大ほか）を発表した。「尾瀬の木道付近の植生や土壌調査の結果、木道敷設により周辺から流れ込む土砂や表層水がせき止められて微地形が変化し、湿原と異なる群落が形成された。今後その点を考慮した湿原生態系の保全を行う必要がある」と指摘している。帰化植物侵入や温暖化によるミズバショウの巨大化などの報告などもある。

尾瀬はラムサール条約登録湿地であるが、6月5日環境省は、日光国立公園から分離独立させて8月より尾瀬国立公園とすることを決めた。この間、国民の意見を募集すると言っているが、木道のマイナス面の改善も留意してほしい。

また、東電や三県が参加する「尾瀬保護財団が調査・研究、清掃活動しているが、木道の科学的関心は薄いようだ。東電は、木道の廃材利用としてエコペーパーを製品化し、環境保護をしきりに宣伝しているが、的が外れている感は否めない。

加えて、大量の観光客を毎年送り込む旅行関係企業も利益追求ばかりでなく、国や地元と協力して尾瀬保全の社会責任の一端を担ってほしい。

関西では、近江商人が昔から、「売りよし」「買い手よし」「世間よし（社会的責任を果たす、世間の評判がよい）」という「三方よし」の理念を現代まで受け継いでいる。見習ってほしい。

随想（山のエッセイ）

星とアカヤシオとSL

鷲見　守康

昔、単独行が主だった頃は、ガツガツと山に登っていた。

仕事を終えて、夜マイカーを飛ばし、登山口付近で仮眠。未明に起き出し、握り飯を口に放り込んで歩き始め、下山すると一直線に帰った。

温泉に立ち寄るということもない。ましてや、観光を楽しむなどというのは論外だった。山に登るとか、山の自然に対するというのはそういうものだ。そんなストイックな想いがあったのかもしれない。

そのような山行スタイルもいつしか変化してきた。加齢が理由なのかもしれないし、グループ登山の影響なのかもしれない。「山登り」から「山旅」へと変化してきたといえるのかもしれ

ない。

春のゴールデンウィークの前半に、地元のハイキングクラブで静岡の山を歩いた。

当初、南アルプス深南部の喬麦粒山と高塚山の予定であったが、荒天予報に急きょ静岡市の竜爪山へ変更した。

静岡県の山では比較的豊かな植相の竜爪山はミツバテンナンショウの群落が圧巻で、気味悪い姿が敬遠されるテンナンショウ類の中でもどこか愛嬌があり、不思議と楽しい気分にさせてくれるのだ。

竜爪山を後に、その日は大井川流域の川根本町に移動し、南赤石林道沿いの公共宿泊施設「ウッドハウスおろくぼ」(旧中川根町)に泊まった。「おろくぼ」はこうした公共施設では珍しく、知る人ぞ知る懐石料理の宿である。料理を楽しみにしていたメンバーも、期待にたがわぬもてなしに満足していた。

夕食後、敷地内にある天文台で天体観測。この天文台には口径400㎜の反射望遠鏡と128㎜の屈折望遠鏡、そして78㎜の太陽観測望遠鏡が備えられており、ボランティアの解説員が詰めていた。

「観測にいちばん適した季節はいつだと思いますか?」と解説員に問われ、私は「冬です」と得意げに答えたが、それは素人の浅はかで、最も適した季節は、大気の安定する春のこの時期なのだと言う。星座を眺めるにはオリオン座などポピュラーな星座が多く、大気が澄んだ冬がいいが、冬は決して大気が安定しているわけではないと言う。冬の星空がキラキラと輝くのは、大気がそれだけ安定していないという証左なのだ。

「今夜は月が明るいものの大気は特に安定していますから、観測には絶好だと思います」との説明に期待が高まる。

まず金星、そして環をもった土星を観測。土星の環が鮮明に確認でき、メンバーから歓声があがる。これまで私設天文台や天体望遠鏡を備えたペンションなどに宿泊しても、いつも観測条件が悪く、土星など見たこともなかったというAさんは、とりわけ感慨深いものがあったようだ。

光眩しい月面は20倍の屈折望遠鏡で覗き、それから外に出て、女性解説員と星空を仰いだ。

観測の指導をしてくれた30歳から40歳代の2人の男性ボランティアは、天体観測をこよなく愛し、そのおもしろさを伝えることが楽しくてしょうがない、といった風情で、特に、比較的若いほうの1人は、さわやかで親切な雰囲気をもち、自然観察インストラクターの典型のような人であった。

随想 (山のエッセイ)

翌日、おいしい朝食後、車で15分の大札山登山口まで走った。大札山には北尾根・肩・南尾根の三ヶ所の登り口がある。肩の登り口には駐車場とトイレがあり、所要時間も短く体力的にも楽である。しかし、本日の目当てはアカヤシオであり、岩場を好むアカヤシオを見るなら尾根歩きが必要だ。そこで、肩の駐車場から北尾根登山口まで林道を歩き、北尾根を登って、山頂から山腹につくられた肩ルートをくだる、周遊コースを歩くことにした。

このコースどりは大正解であった。北尾根には、咲き始めや満開のアカヤシオが点々と続いていた。ツツジの中の名花といわれるアカヤシオが、澄み渡った青空を背景にふっくらと淡いピンクの花を付けていた。そして、展望ポイントに至ると、アカヤシオの花々に囲まれて富士山が浮かんでいた。

地元でも人気の高い大札山の頂上にはハイカーが群れ、山頂から肩コースをくだると、続々とハイカーが登ってきた。「アカヤシオは咲いていますか?」と何度も聞かれた。子供を交えたいちだんと長い列の集団の先頭の男性は、昨日の天体観測のボランティアだった。「きょうは生涯学習のグループです」とさわやかな笑顔を見せた。

大札山からの帰路、川根町の日帰り温泉に寄った。

露天風呂からは、大井川鉄道の鉄橋が眺められ、運よく、汽笛を鳴らし、白煙をなびかせて走るSLを見て、みんな童心に返って大喜びであった。

星とアカヤシオとSL、心に深く残る山旅となった。

田中澄江さんを偲んで

雲取山と飛龍山

田中　明

奥多摩

山行予定であった大阪府の雄、金剛山の秋花巡りは雨天予報で中止した。窓辺の雨音が賑やかだ。さぁ、これ幸いに埒もない伴を綴ることとしよう。

初秋に『花の百名山』で名高い田中澄江さんが踏まれた雲取山を歩くことにした。その『新花の百名山』で、「雲取山は2018m、その山裾は東京、埼玉、山梨にひろがり、東京都で一番高い山である。私の娘の頃に亡兄も亡弟も登っていてその五万分の一の地図が残っている。亡兄も亡弟も将監峠から飛龍を越え、北天ノタルを過ぎていったらしく、何日かの重い天幕をかついでの旅であり、女の私などつれていってもらえなかった。（中略）とにかく自分の足でたしかめなければと思いたったのは、兄や弟が登った頃より四十年以上も経過してからである。」と書いている。田中澄江さんのルートと同じにはいかないが、この度は私も飛龍山を踏んでみよう。

飛龍山の項では、「北天ノタルという名にあこがれていた。北天、北斗七星、北辰、北峰、北陸、北という文字がつくとすぐそれだけで気が引き締まるような気がする。」とも書き、この北天ノタルの響きが私の頭にも残っていたのだ。

取付口は、奥多摩からさらに山深い御祭といういかにも楽しそうな名の地。後山林道を三条の湯へ向けて10キロの長いダート道を歩く。林道にも期待どおりに植物が多く、仲間の顔も心なしか嬉しそうに見える。

9月というのにヤマアジサイが咲いていると思ったが、蕾を見てアジサイの仲間でノリウツギと同じように、初秋まで咲いているタマアジサイであった。林道沿いはもとより、三条の湯あたりまでタマアジサイが見られた。

シオジ

林道にはそれだけではない。クサボタン・モミジハグマ・ミヤマイラクサ・クサコアカソ・フジウツギ・アキノキリンソウなどがあり、それにもまして樹木の種類も豊富で、山峡での植物観察の醍醐味が味わえそうだ。林道歩きの苦労など微塵も感じられない。

中間をやや過ぎた頃、カツラやサワグルミの古木が立ち並ぶ樹下での昼食。あたりの爽やかな空気に、何ともいえない至福のひとときをもった。

塩沢橋あたりからは、傾斜はあるのだろうかと思うほどに平坦、マイカーが走るくらいだから足元もそんなに悪くない。

そんな山深い谷間の植物たちに、「これは、あれは」とワイワイの観察歩きだ。

とりわけ私の期待していたシオジには大感激であった。若干ふれてみよう。モクセイ科トネリコ属で、その仲間のマルバアオダモは関西では普通に見られるのだが、トネリコやシオジは図鑑での知識しか持ち合わせていない。まず出会ったトネリコは、居並ぶツガ・イヌブナ・ミズナラ・ミズメ・イタヤカエデ・アカシデ・サワシバ・アオハダなどの大木に混じっていて、山地の沢筋に生育するようだ。道理でカツラやサワグルミも多いはずだ。

これら大木以外に、中低木のアワブキ・ウラジロノキ・オオウラジロノキ・ナツツバキ・リョウブなども多数見られた。

この時期、トネリコも葉しか見られなかったが、その葉も独特の姿が感じられた。ふちの鋸歯浅く、2～3対の奇数羽状複葉でほとんど無毛なのがわかった。

しばらく歩くと今度は念願のシオジが登場した。こちらはトネリコ以上に特徴が顕著である。カツラやサワグルミと同じ落葉高木で、高さ30メートル、直径1・5メートルにもなるという。葉の基部はゆがんだくさび型、ふちには細かい鋸歯があり、緑色の葉柄基部は著しく膨らんだ鞘を抱き、その独特な姿が目に留まった。そして若い果実も見せてくれた。この実がトネリコ属内で一番大きいようで、長さ5センチもあろうかという大型の細長い実が鈴なりであった。

普段の山歩きでは樹木の葉を集めているのだが、この時はいささか興奮気味で、収集を忘れてしまったのが悔やまれてならない。

崖崩れの補修工事も進んでいる。岩には小さなイワタバコが名残を惜しむかのように赤紫色の花弁を振り絞って精一杯のおめかしで出迎えてくれ、近くにはタニタデ・イワアカバナ、背丈の低いキツネノボタンがわずかに咲いている。

以前は単独行が好きだったが、1人では小さな少しだけ咲く花は見逃してしまうことが多かった。同行者がいればこのようにいろいろと探し出してもらえる。花好きな人達といっしょに歩こうと思う原因なのかもしれない。

山梨の森林百選というのも頷け、三条

の手つかずの森を楽しみながら、のんびりと植物歩きをしていると、沢音が聞こえてきた。見下ろすと三条大滝らしい。すぐ上には茶色の三条小屋が私達を見下ろしている。

どうやら三条の湯に着いたようだ。ヒトリシズカの葉が九十九折の道沿いに見られ、ヤマボウシも突っ立っている。小屋前にはヤマユリの青い果実が上を向いて見られ、タマアジサイも花ガラが多く残っている。

山のいで湯でまずは汗を流す。18時からの夕食後、小屋番から雲取・飛龍山の植物の話を聞いた。この山域は最近特に鹿が増え過ぎていろいろな面で困っていて、植物の中には絶滅の危機にあるものがあると言う。私の期待していたヤナギランはもとより、フシグロセンノウ・シモツケソウなども食害に遭っていると言う。今では、なぜか鹿が食べないマルバダケブキが雲取山頂一帯に大群落となり、それが花景色となっているのだが、この頃ではもうほとんど終わりだろうとの説明であった。

そうは言われても、他に何かきっと見られるに違いないと、期待しながら心地よい一夜が更けていった。

明けて2日目、いよいよ今日は憧れの北天ノタルから飛龍山だ。だが、空は今にも泣きだしそうな雲行きである。小屋前から中ノ尾根の急登を何とかこなし、1600㍍から1900㍍まで標高を稼ぐと、水場が二ヶ所ある。一本立てながら、北天ノタルを目指す間、ヤマトリカブト・ヤマジノホトトギス・キツリフネ・カメバヒキオコシなどがちらほらと咲いていた。そぼ降る雨のなか、それでもほぼ時間通りで待望の北天ノタルに押し上げた。

主稜線上の北天ノタルには、三本の道と道標があるだけで何も無い。いや、何も無いのが山の道なのだ。ここが田中澄江さんが踏まれた北天ノタルだと周りのみんなに語るように、独り言で「ここが北天ノタルか……」と嬉しそうに繰り返した。奥の方にはヤハズヒゴタイもわずかに雨に濡れながら咲いている。

今朝から誰にも会わなかったが、この場所で初めて2人連れが休憩していた。聞けば、山歩きでは誰もがお世話になる地形図の国土地理院の方で、この一帯の等高線の苦情があったので再調査をしているとのこと。雨中に大変な体力のいる地味な仕事で、この人達のご苦労がしのばれる。

縦走路を西へ。飛龍山へのガレや岩場に架かる平均台のような濡れた橋に注意しながら行く。岩ガレ付近には、ミヤマダイモンジソウ・アキノキリンソウが何株か咲き、ハコネギクだろうか背丈もそんなに大きくなかったがほんのりと紫色が妖艶だ。斜面の草原には、茎の比較的長い白花の野菊はシロヨメナであろう。ハコネギクより多数見られたが降りしきる雨にデジカメも無理。思い出のみで証拠のないのが残念である。

今回の最高峰の飛龍山は針葉樹林帯のピークでもちろん展望は無いが、田中澄江さんもここに立ったんだなあと感慨深く深呼吸する。

記念写真後はアズマシャクナゲ群生地の稜線を行き、小さな祠のある飛龍権現に下りたが、ここは昔からの交通の要衝だったらしく、笠取山への道、サオラ峠への道、北天ノタルへの道、今下りてきた道の四差路である。

中でも前飛龍からサオラ峠への道は幅

5㍍程もあり、いかに多くの人達が通過したのかわかろうというもの。その方向に展望のすばらしいハゲ岩があると事前に調査していたが、きょうは雨でパスし、北天ノタルへ引き返した。ああ、次はいつにこの地を踏めるのだろうか。写真もきっちり撮って想い出の地となった北天ノタルに別れを告げた。タルとは鞍部であることを確認した田中澄江さんは三条の湯にくだったが、我らは雲取山へ長い雨中の稜線歩きとなった。

カラマツ林が続く尾根もどんどん歩を進め、三ツ山の山頂を右に捲き、ササ原の狼平手前で立ったままで昼食をとった。ゆるやかな尾根道をたどると、木立の途切れた明るい三条ダルミに飛び出した。

ミヤマダイモンジソウ

こんなお天気だからと、捲き道を雲取山荘へ急ぐがよほど人が入っていないのだろう、荒れ放題の道にけっこう時間をとられた。それでも14時頃、びしょ濡れで小屋に飛び込んだ。

若い小屋番は石油ストーブ二台に火を入れ、乾燥室にも火を入れてくれ手際よく遠来の客を迎えてくれた。

ストーブを囲んで山談義をしていると、岡山から来たという、70歳を超えたおばあさん3人が到着した。鴨沢から8時間もかかって登って来たと、満足げに笑顔で話してくれた。この雨の中をそれも遠方からだ、よくも登れたものだ。

翌朝は予報と違い、小屋前から日の出が拝めた。午後から雨とのことで予定より早立ちして雲取山頂に到着したが、残念ながら期待した富士山は薄っすらとしか拝めなかった。

でも、少しだけでも見られたのだからとお互い納得した。あたりのマルバダケブキの咲き残りの大群落を眺め、少し来るのが遅かったと嘆く。まあ仕方ない、この花が満開の頃には他所の山歩きで花を楽しんでいたのだからと、これまた慰め合った。

ノコギリソウ・オトギリソウ・ハナイカリ・ウメバチソウがちらほら咲いているのを楽しみながら、小雲取山からブナ坂、堂所を経て所畑の近道に来る。ミヤマウズラ・ヤブマメ・フシグロセンノウ・キバナアキギリ・オトコエシ・ソバナ・ツリガネニンジン・シラヤマギク・キンミズヒキなどの山野草を最後に鴨沢に下り立った。運良く来たバスで奥多摩駅までゆったり。近くの「もえぎの湯」にてありあまる時間を反省会で楽しんだ。

（平成18年9月5日～7日歩く）

《コースタイム》

〔1日目〕JR奥多摩駅（バス35分）鴨沢西バス停（25分）御祭（2時間20分）後山林道終点（40分）三条の湯（泊）

〔2日目〕三条の湯（2時間40分）北天ノタル（40分）飛龍山（30分）飛龍権現（30分）北天ノタル（1時間30分）狼平手前（30分）三条ダルミ（45分）雲取山荘（泊）

〔3日目〕雲取山荘（30分）雲取山（1時間15分）雲取奥多摩小屋（1時間40分）堂所（1時間50分）鴨沢バス停（バス45分）奥多摩駅

《地図》

昭文社＝「奥秩父—雲取山・両神山」

雨乞い信仰の山を歩く

雨飾山と霧訪山

木村太郎

北信・中信

「雨飾山に行ってみたい」と言う山仲間の希望で、例会山行を10月初旬に計画した。私は会社勤めをしていた平成12年に、雨飾山に登っているが、時が経っているため下見に出かけた。

長雨で道が崩れ通れなかった小谷温泉からの林道も走れるようなり、雨飾高原キャンプ場へ車を乗り入れた。休憩舎に水場があるので、ドライフーズの山菜飯と袋ラーメンで、山に入る前に腹ごしらえをする。

私が雨飾山を知ったのは平成10年、白馬三山を歩いて鑓温泉から下りる日に、東の彼方に印象的なピラミット形の姿を見た時である。心に残った麗しい名の雨飾山に初めて登ったのは、それから2年後の夏の終わり、会社の「山の会」で訪れている。

阪急イングスで編集した「山の会」のビデオを見直すと、登山口から笹平までが撮影され、山頂での場面が撮られていない。仲間と霧の山頂で昼飯を食べたことを微かに覚えているが、こまやかな記憶がなくなっている。

ふたたび雨飾山に立てば、薄らいだ記憶を取り戻せるだろう。春にはミズバショウが開く湿原地を通り、雪解け時にえぐられた木の根道を登る。青緑色から黄緑色に移るブナ、変色しはじめたウルシやモミジ、色彩美を広げて木々が道沿いに続く。

ブナの森に刻々と秋本番が忍び寄り、清々しい大気の道に、樹木が香しい呼吸をしている。森のなかで最も遅く落葉し、耐え忍ぶ役を演じてきたブナ群。山の劇場でブナの俳優たちが、黄葉のクライマックスを熱演する時が近づいている。

ブナ平でひと息ついて、石が累積した荒菅沢の清流へ下り立つ。荒菅沢から主稜線を見上げ、荒々しい布団菱の大岩壁に目が釘付けになる。尖った岩塊頭部と斜めに切れる草つきとが、菱形を描いている。布団を干した形に見えるので、布団菱という呼び名がうなづける眺めである。

雨飾山南峰

残雪期なら荒菅沢を直登できるが、対岸の尾根に取り付いて灌木帯を進む。急坂のバテレン峠とガレ場を登れば、西に雨飾山、東に天狗原山が視界に迫る。夏には青葉、秋には紅葉、冬には白銀色の衣装を身にまとう。あとわずかの時で錦の晴れ着を着飾るのだろう。

夏ならばお花畑が広がる笹平に登り着く。金山から後方には焼山、その先は火打山や妙高山へ連なり、妙高連峰の大尾根に続く主稜線だ。上品そうなお椀を伏せた姿をした雨飾山の頂を前に見すえて、ササ原の水平道を急ぐ。気のせいか、上空は青空なのに、山頂辺りが暗くなりはじめている。

北方に並行する鎧岳や鬼ヶ面山、糸魚川市側のパノラマに目を配る。途切れていた記憶を呼び覚ますように、DVDの映像のような日本海の水面が目に飛び込んでくる。同行者と喚声を上げた、昔の記憶が忽然とよみがえる。足下に濃紫色のリンドウが咲き誇り、雨飾山を名前通りに美しくしている。

梶山新湯への分岐を通り、雪渓が残るガスが湧き立つ荒菅沢源頭に出る。ガスに包まれた雨飾山ピークは、白と黒の幽玄の世界で隠されている。霧のただなかに突入していく道から、見上げる山頂もコルの池も消え失せている。

前回と今回だけでなく、例会の山行当日（10月4日）も快晴だったのに、雨飾山に登り着いた時、山頂は霧のなかで白馬連峰の姿は望めなかった。長野側の荒菅沢と新潟側の神難所沢を裾にして、雨飾山は沢から吹き上がるガスで、眺め良い日が少ないのだろうか。

もう決して忘れないという思いで、雨飾山（1963・2㍍）の2等三角点をデジカメで撮影した。三角点の角が丸みを帯びている。今日まで数え切れない登山者達、信仰で登ってきた人達が触れたせいであろう。

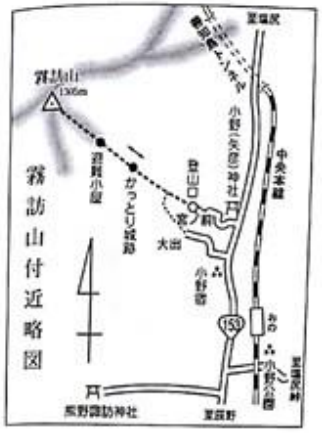
雨飾山は双耳峰の山であり、三省堂の「日本山名事典」によれば、雨または天をまつる山だと記されている。信仰の山の証しのように、三角点と標柱のある雨飾山南峰には地蔵菩薩・薬師如来がまつられている。

すぐそばの雨飾山北峰には、阿弥陀尊・大日如来・薬師如来・不動明王がおかれている。北峰の石仏群は、越後の羅漢上人が自らの手で彫り運び上げたと伝えら

れ、こちらの石仏は越後の方を向いている。

小谷温泉の山田旅館に、「雨飾山古絵図」が資料として伝わる。古人が山に向き合った原点は、天のそばに近づき天の声を聞き、農耕の豊穣を祈る行為からきていたようだ。

雨飾山が雨乞いに霊験ある山というのは、真実なのかも知れない。いくたび私が雨飾山に登っても、山頂が晴れてくれなかったことは、雨乞いの山の性質上、当然至極のこととして受け止めざるをえないのである。



2日目は大町市の里山、鷹狩山の展望台に上がり、北アルプス後立山連峰を眺めることにした。雨飾高原キャンプ場で一夜を過ごし、小谷村から八坂村廻りで鷹狩山へ車で登り、雑木林の遊歩道を散策した。

下見を済ませ、時間も早いので、塩尻市と辰野町境の里山、霧訪山を目指した。「雨を飾れる山」と同じように「霧が訪れる山」は、ロマンチックで響きの良い名前である。機会があれば登りたかった。

霧訪山への道は、中央本線小野駅そばの信濃国二ノ宮小野神社から入る。神社は塩尻市北小野の地籍に立つが、辰野町小野を氏子とする矢彦神社が隣に座る。その昔に豊臣秀吉の裁決で、村落もろとも神社が二つに分かれた歴史がある。

社叢「憑の森」の脇道を車で通り、田畑を抜けて、開拓記念の石碑がある宮ノ前登山口まで入る。広い畑はレタスなどの夏野菜の収穫が済んで、野沢菜が植えられていた。

霧訪山登山口と書かれた垂れ幕の下をくぐり、よく踏み込まれた登山道に取り付く。山道沿いの山林はマツタケ山で、立ち入らないようロープが張られている。急坂の途中で、御嶽山大権現の石碑が目に留まる。

傾斜がゆるんで「かっとり城跡」にたどり着く。このあたりでは春先、フデリンドウが一面に咲くという。植生保護の札にまじり、雷注意の札をあちこちで目にした。中腹の広場には避難小屋と休憩地がある。

尾根の片側はアカマツの美林、反対側は自然林で色分けされている。主だった樹木に名札が付けてあり、令法・瓜楓・捩木・冬青（モチノキ）・バラ科の牛殺、雨飾山とは規模に大きな違いがあるがブナの木も見られる。

山頂に近づくにつれ急坂となり、クサリとロープの助けで、ススキが揺れる霧訪山（1305㍍）の頂に立った。春頃ならオキナグサが頭をもたげ、里の子供が遠足で遊びにくる頂で、私はナデシコの花を見つけた。

霧訪山の頂には旗が立ち、山名方位盤が据えられている。北アルプス、南アルプス、中央アルプス、八ヶ岳、御嶽山、ぐるりと360度の大展望。方位盤に名があるのに、雨飾山が見通せないことだけが心残りであった。

甲斐の武田信玄が信濃攻めの時、霧訪山をのろし台に使ったという。武田勝頼

が戦勝祈願に寄進した竜頭を飾りつけた梵鐘は、小野神社の社宝になっている。また、信濃国一ノ宮諏訪大社との結びつきも考えられる。

アルプスに囲まれた独立峰ゆえ、近くの里山や周りの風景を眺めるに、霧訪山からはさえぎるものがない。諏訪大社ゆかりの旧御射山祭の遺跡がある霧ヶ峰の右方、神体山磐座がある守屋山の左方に

霧訪山山頂

諏訪湖が光り、その北岸に諏訪大社の森が見えている。

諏訪大社の御柱祭の木落しの奇祭はよく知られている。諏訪山ふもとの小野神社の社前にも御柱が立ててあり、諏訪地方より一年遅れの七年に一回祭がある。諏訪山頂には小野神社の境外社がまつられ、伊邪那岐命と伊邪那美命の祠にしめ縄を掛けている。

『日本書紀』の持統天皇の条に、信濃須波神と水内神の記載がある。五穀豊穣を祈り都から使者が遣わされ、風の神・水の神として諏訪大社は信仰されてきた。小野神社の諏訪山でも昔、日照りが続いた旱魃時には、水の神を呼ぶ雨乞いの祈りが行われていた。

塩尻市の文化財に指定の武田勝頼ゆかりの梵鐘は、表面に鋳込まれた銘文が損傷していて読みづらい。小野神社の氏子衆が雨乞いに、鐘を霧訪山へ運び上げて打ち鳴らし、山頂から転がり落としたという。梵鐘の表面の痛みは、里人達の祈りによるものだ。

霧訪山頂のかたすみに、小さな青銅製の鐘が吊るされている。「心しずかにうち一礼をおこないます」と書かれた古び

た木札が付けてある。雨乞いを祈願する鐘かもしれないが、山歩きの幸運をひそやかに祈り、霧訪山の思い出に鐘を鳴らしてみた。

塩尻市洗馬の砂嵐は春の風物詩で、雪の解けた田畑から土が舞い上がり、そのため山の展望が悪くなる。田畑の穀物が実り、山の木々が色づく頃、霧訪山の眺めが最良になる。

山上に一瞬の風が吹き通ったが、眺め良い風景に変化はない。信州の里山には旅情を誘う、去りがたい感情にさせる何かがある。なぜだか懐しい気持ちになり、霧訪山に佇んでいた。

（平成18年9月23日～24日歩く）

≪雨飾山コースタイム≫

雨飾高原登山口（1時間）ブナ平（40分）荒菅沢（1時間20分）笹平（30分）雨飾山（1時間40分）荒菅沢（1時間30分）登山口

＜地形図＞2万5千＝雨飾山

≪霧訪山コースタイム≫

霧訪山登山口（40分）避難小屋（40分）霧訪山（1時間10分）登山口

＜地形図＞2万5千＝北小野

中央アルプス南部縦走

越百山・摺古木山から大平峠

中央アルプス

中澤　與司博

越百山、何と響きのよい山名であろうか。厳冬期に上松より木曽駒、千畳敷を歩いた時、6月の千畳敷でスキー滑降に興じた時、紅葉を求め木曽駒から空木岳を縦走した時、その都度いつか訪ねてみたいと秘かに思い描いていた山域である。

8月末、新ハイの三井氏よりお誘いを受け、今回の山行となった。その後、新ハイの山形氏に声を掛けたら「おもしろそうだ、行くよ」と二つ返事、武藤女史も行きたいと、都合4人のパーティで登高することとなった。

出発日の11月2日夜、待ち合わせのJR能登川駅前に行くと、すでに三井氏は到着されている。いつも早い御人である。挨拶もそこそこにリュックを積み込み、彦根インターから名神道へ車を走らせた。一宮に近づくに従い交通量は多くなりだしてイライラ、しかし中央道は不気味なくらい車が少ない。

空には、月が輝いて明日の好天を約束している。山形氏との待ち合わせ場所は中津川の道の駅である。山形・武藤両氏はすでに到着後で就寝のご様子、その脇に駐車し我々も寝ることにした。

11月3日　晴れのちくもり

ケサ沢橋～越百山避難小屋

事前に山形氏と打ち合わせしたとおり、4時ちょうどに摺古木自然公園に向けて出発した。国道19号～256号～県道8号を大平宿に、ここから東沢林道を終点まで走る。

県道8号はまっ暗なうえ、道幅も狭くカーブは深く、路上には落ち葉がびっしり、まるで絨毯を敷き詰めたような道が大平峠へ続いた。

最高点1380㍍を越えて大平宿を左折、東沢林道に進入する。道はすぐに地道となり、二度ばかり腹を擦りながらも、花崗岩砂混じりの道を摺古木自然休憩舎へ乗り入れた。

いつの間にか夜が明け、周りの様子が見えだした。秋まっ盛りの世界が広がっている。林道終点に置き車し、もう一台でJR須原駅へと戻る。途中、武藤女史が携帯でタクシーの手配をしてくれた。

須原駅から、タクシーで越百山登山口の伊奈川ダム上流へ。終点の駐車場には多くの車があり、人気の程がうかがえる。女性パーティ6名（厳冬期の下見とか）と相前後し林道歩きが始まった。秋色の落ち葉を踏みしめ福栃平の分岐地点に到着、ひと息入れる。ここからは山道となり、遠見尾根を下のコル、上のコル（五合目）と順調に高度を上げ、六合目付近で昼食を兼ねて休憩とする。

展望台の七合目へ、残念なことに今日は、御嶽の雄姿は雲に遮られ見ることはできない。次第に傾斜が増し、早くも足が悲鳴を上げかけている、いつ以来だろうか、こんな重いリュックを担いでの山行きは。小屋に水は無いということで、ここの水場で補給する。各自重いリュックに、なお水の重量が加わり辛い登りである。周囲を見ればシラビソ林の明るい樹林帯となり、登山道もやがてトラバース気味の登りへと続く。

やがて樹間から今夜の宿である越百小屋の赤い屋根が見えてきた。小屋は10月末で今期の営業を終了しているが、素泊まりはできるそうである、小屋番に挨拶し、隣の避難小屋に入る。二階に寝間を確保し、まだ早いが酒宴、そして夕食が始まる。小屋はいつしか満員になった。今朝は3時半起きであるし、車移動でほとんど寝ていない。まだまだ寝る時刻ではないが、17時前には床に就いた。寝たもの勝ちの世界である、なかなか寝つかれずにいたが、酒も手伝っていつしか鼾の一員となった。

11月4日　晴れ

越百山避難小屋～奥念丈岳～安平路山～安平路避難小屋

越百山山頂より南アルプス（中央は甲斐駒ヶ岳）

越百山・摺古木山付近略図

4時に起床する。他の登山者も行動を始め、急に小屋内が慌ただしくなりだした。ヘッドライト頼りに、寝間の撤収、朝食とけっこう忙しい。

5時半過ぎ、小屋を後にした。ヘッドライトを点灯、足元を確認しながら、越百山へと高度を上げてゆく。足元にはツマトリソウ、そして初雪を踏みしめての登高、やがて左側に雲海を従えた御嶽の雄姿が見られる地点に到達。撮影タイムと展望を楽しむ。山形氏、武藤女史は撮影にはあまり興味がないようである。この地点より冷たい北風を感じるようになり、程なく越百山山頂に到着するも風が冷たい。伊那側より南アルプスの峰々を心ゆくまで眺めた。右方向には雲海を従えた荒川、赤石、聖、茶臼が、最奥には富士山が、そして左方向には塩見から甲斐駒と超一流の展望である。

南越百山へは、滑りやすい花崗岩砂の下りから始まる。花崗岩の露出した南越百を過ぎ奥念丈岳へ。噂通り深いササやぶのなかを踏み跡、案内板・マーキングを頼りに、ササや木の根っこにつかまりながらの苦しい登りが続く。ところかまわずリュックを投げ出したい、そんな思いがよぎる。奥念丈岳山頂で記念撮影、水分の補給をし、鞍部を越えて登ると袴腰山の頂。ササとシラビソ・シャクナゲが混生している明るい林だ。空気が乾燥しているからだろうか、喉の渇きを覚える。松川乗越への下りにさしかかると、一段とササやぶが深く感じられる。鞍部のササの無い部分で昼食休憩とするが、一面は霜で覆われていた。なおもササやぶの登りが続き、両手でかき分け、ルートを確認しながらのアルバイトにはうんざりする。ササやぶが無ければ快適な稜線歩きである。

京都のパーティと抜きつ抜かれつしながら安平路山へ、「後二つのピークを越せば安平路だ」と三井氏。まだこんな状態の登路が続くのかと半ば諦めの心境で歩を前へ前へ、いきなり安平路の山頂に出た。ここまで来れば、もう着いたのと同じである。皆の顔にも余裕が感じられる。展望は与田切乗越側が見られるのみだ。

ここから先の下りは、地図上では実線になっている。やがて左下に水場のある所へ。今夜の水を確保し、安平路の避難小屋へとくだって行った。小屋には先着の2名がストーブを囲み食事中であった。我々も居場所を決め、酒宴と夕食である。残りのアルコールと食物が並ぶ。外で野営している若者の声がいつまでも聞こえていた。

飯田の街が宝石を散りばめたように輝いている。20時前に厨の大合唱となり、夜は更けてゆく。トイレは、伊那側にあるが実に開放的である。目隠しは樹林が大役を果たしている。木曾側に向かって、それとも伊那側に向かって用を足すかが問題である。気に入られた御人もお出でになるとか!!

11月5日　晴れ時々くもり

安平路避難小屋～白ビソ山～摺古木山～摺古木自然休憩舎

安平路避難小屋の出発は遅くなってしまった。昨日のやぶ漕ぎの疲れか、それとも酒が災いしているのか定かでない。小屋を出ると霜で白く化粧したササやぶの歓迎で一日が始まった。ササに、その下に潜む倒木に何度も何度も足を取られ転倒しながらの登高、白ビソ山に出た。ここより、摺古木山へは1時間足らずである。鞍部より先はササが刈り払われ、

登山道にササが敷き詰められた状態、霜とササで滑りやすい道を慎重に歩を進める。やがて、1等三角点、御陵点のある摺古木山頂に到着した。

御陵点には初対面で感激もひとしおだ。樹間から越百山方向のみ展望がきく。道は二手に分かれ、右手の展望コースを行くことにした。

摺古木展望台からは中央アルプスの木曾駒・三ノ沢岳をはじめ、越えてきた山々が一望できる。時間の許す限り展望を楽しみ、林道終点の摺古木自然園休憩舎への道をくだる。

二、三度沢を渡り、アザミ岳を右手に見て、シラビソ林からカラマツの黄葉が目立つようになり、高度が下がっていると教えられる。突然、山形氏が忘れ物に気づき、展望台へと戻られた。3名は休憩舎でゆっくりと昼食を楽しみつつ待つことにする。

12時過ぎ、休憩舎を後に車中の人となり、行く秋を満喫しながら太平宿への悪路をくだってゆく。国道256号線沿いの馬籠宿は多くの観光客が押し寄せ人の波だ。そんな光景を尻目に須原へと急ぐ。国道19号線より真正面に迫力のある三ノ沢岳などが大きく見える。

「フォレスパ木曾」の露天風呂から、中央アルプスの眺望を楽しみながら、仲間に山に家族に天候に感謝しながら汗を流した。次回の山行きを約し解散。途中道路渋滞もあり、米原駅には19時過ぎに着いた。（平成18年11月2日～5日歩く）

摺古木展望台より空木岳（中央）

≪参考タイム≫

（11月2日）JR能登川駅21・30（車）中津川道の駅23・40（泊）

（11月3日）道の駅4・00（車）摺古木自然休憩舎駐車場5・50～6・10（車）須原駅7・50～8・15（タクシー）伊奈川林道終点8・50～9・00—福栃平9・40～55—下のコル10・35～45—五合目11・10—六合目11・40（昼食）12・10—展望台12・25—八合目12・45—水場12・55～13・10—越百山避難小屋14・20（泊）

（11月4日）越百山避難小屋5・30—越百山6・45～7・05—南越百山7・25—奥念丈山9・20～30—袴腰山10・50—松川乗越11・50（昼食）12・20—浦川山12・50—小茂古沢の頭13・30—安平路山14・00～15—水場14・40～50—安平路避難小屋15・05（泊）

（11月5日）安平路避難小屋6・45—白ビソ山7・20—摺古木山8・35～50—展望台9・05～15—分岐9・55—自然休憩舎10・30（昼食）12・05（車）須原駅14・10（車）フォレスパ木曾14・30（入浴）15・10（車）中津川インター16・20（車）JR米原駅19・05（車）

≪地形図≫

2万5千＝空木岳・安平路山・南木曾岳

標高による山の紹介シリーズ 36

松田敏男

新ハイ関西96号

標高△△96mの山

池木屋山（1396メートル 台高山脈）
白木峰（1596メートル 飛騨高地）
経ヶ岳（2296メートル 中央アルプス）
桟敷ヶ岳（896メートル 京都北山）

池木屋山

池木屋山には宮の谷からの往復で一度登っていたが、今回は馬ノ鞍峰から池木屋山を経て明神平へ北上するコースを会山行の5人で歩いた。

馬ノ鞍峰を北へ下りた、水場が近くにあるテント場では、コノハズクが一定の間隔で鳴き通した神秘的な夜を味わった。翌日、大木が亭々と育つ森、丈の低いササを踏みしめての登りは爽快だった。

それに比べて池木屋山を越えたのち、奥ノ迷峰手前のテント場に至る道は細い木が多くなり、またチェーンソーの音が遠くから聞こえ、深山を里山的な雰囲気に変えてしまった。

（平成11年5月3日歩く）

⋀コースタイム⋁

馬ノ鞍峰の北のテント場（3時間）池木屋山（5時間）奥の迷峰の南のテント場

⋀地図⋁昭文社＝「大台ヶ原」

白木峰

二回行った。一回目は三宅さん、田邊さんと3人で白木峰林道を車で終点まで行こうとした。終点に無線中継所があり、そこは頂上の一角だ。そのような軟弱な私達を御天道様が一喝した。道路が陥没していて標高1100㍍から歩くことになった。1160㍍まで林道を歩いて昔ながらの登山道に入る。登山道にはネマガリダケがたくさん芽を出していた。

山頂一帯は広大な草原、ニッコウキスゲ群落が緑の海原のなかに美しかった。

山頂直下の白木峰山荘へくだり、車の来ない林道をしばらく歩いた。すると入山者のいない林道沿いにタラが新芽をいっぱい広げて私達を待ってくれているではないか。タラの芽とネマガリダケを今夜の3人分採って下山し、急きょサラダ油と天ぷら粉を買って、翌日登る金剛堂山の登山口で味わった。御天道様は実のところ私達にたいそう優しかったのだ。

2年後、やはり6月末に時高さん夫妻と再訪した。白木峰の南西方向にある小白木峰の登山口より標高差450㍍を一気に小白木峰に登り、白木峰までを往復した。長い道のりだったが、池塘と広葉樹林の柔らかな優しさに満ちていた。

（平成14年6月29日歩く）

⋀コースタイム⋁

県道八尾・古川線小白木峰登山口（6時間30分）白木峰往復

⋀地形図⋁2万5千＝白木峰

白木峰の湿原

経ヶ岳

大山さんが計画して山の会の3人で登った。羽広観音前の駐車場に車を置き、カラマツの植林帯の道を登る。

快晴ではあったが、楽しみにしていた東側に連なる南アルプス連峰の景色は霞んでいてもの足りなかった。翌日の戸倉山は雨だったから、湿気の多い霞はその予兆だったのだ。

しかし、樹間より南側に時折見える中央アルプスの将棋頭山の大きな盛り上がりが想定外だったので、新鮮で印象深かった。

（平成2年11月3日歩く）

⋀コースタイム⋁

羽広観音（4時間）経ヶ岳（3時間）羽広観音

⋀地図⋁昭文社＝「木曽駒・空木岳」

桟敷ヶ岳

賀茂川の源の祖父谷峠が山深い峠の趣をとどめていた頃以来、桟敷ヶ岳へは行っていなかったが、紅葉真っ只中を見計らって1人でぶらりと行ってみた。

岩屋橋バス停から志明院までは行かず、手前で右の西谷に入った。林道終点からの登りで自然林の割り合いが増してくると、薬師峠からの道に合流した。

桟敷ヶ岳の山頂は四方から集まってきた登山者で賑やかだったので、ナベクロ峠方面へ少し行った所の雑木林のなかで昼食にした。まっ盛りの紅葉を仰ぎ見ながらビールを飲めば、たちまちにして極上の別天地。

ナベクロ峠からまだ歩いていない長谷を下りようとしたが、くだるにつれて一般登山道ではない様子が徐々に増してきて、地図をよく見ると大楼谷だった。引き返したつもりが左俣をつめていたようで、城丹国境尾根に出たようだった。

現在地が判然としない時間がしばらく流れ、紅葉のなか、酔い心地で迷い子的気分を味わった。

（平成15年11月1日歩く）

⋀コースタイム⋁

岩屋橋（3時間）桟敷ヶ岳（2時間）ナベクロ峠から長谷をくだるつもりが大楼谷を下りかけて引き返す。左俣をつめて城丹国境尾根に出てから祖父谷峠（2時間）岩屋橋

⋀地図⋁昭文社＝「京都北山」

新ハイ自然観察山行

経ヶ岳から法恩寺山

越前

鷲見守康

西日本最大のゲレンデを擁するスキージャム勝山が山麓に広がる法恩寺山は、広域基幹林道法恩寺線を利用して中腹の中ノ平まで車で行けば、そこから1時間余りで山頂に立てる。

2004年の秋、この山頂から経ヶ岳を遠望したとき、経ヶ岳へと続く稜線を眺めて心ひかれた。山頂には経ヶ岳への道標もあり、何とか日帰りでの縦走が可能だと判断した。

避難小屋のある中ノ平からは、里へ登山道がのびており、三頭山で二手に分かれる。右手は大師山を経て越前大仏への道、左手は平泉寺白山神社への道である。

この平泉寺への道は、白山禅定道の一つの越前禅定道であり、平泉寺はその起点の越前馬場であった。

経ヶ岳と法恩寺山をつなぐ稜線と白山越前禅定道を組み合わせて歩いてみたい、そんな願いを翌2005年の新ハイ例会で実現した。しかし、当日は本格的な雨降りで何も見えなかった。

晴れ上がった空の下、白山を眺めながら歩いてみたい、というアンコールの声に応え、2006年の同時期にもう一度実施したものの、再び雨であった。

2005年例会での全行程は、経ヶ岳から法恩寺山へ縦走、法恩寺山から平泉寺へくだるコースとした。

法恩寺山から望む経ヶ岳

日程は1泊2日だが、初日は朝9時過ぎに岐阜駅集合なので、現地での行動時間は午後の数時間しかない。2日目は関西から参加する会員の帰りの時間を考慮すれば、14時頃までの行動時間でしかない。

そんな時間的な制約をクリアするためには、行程を分断し、中ノ平から平泉寺のコースをまず初日に歩き、翌日に経ヶ岳から法恩寺山、法恩寺山から中ノ平を歩くという変則的な方法をとらざるを得ないと考えた。

2006年も同様な方法であったが、三頭山からの下山コースだけを大師山に代えて歩いた。

1日目は、バスで中ノ平まで入った。中ノ平付近は森林公園として整備されているようで、避難小屋からさらに奥へ行くと舗装された駐車スペースがある。

本日は、ここから平泉寺までのショートコースだ。三頭山まで平坦な道を坦々と歩く。1時間ほどで三頭山着。ここから2006年には右に大師山への道を歩いたが、2005年は左の道をとった。尾根伝いの急な道をくだり、40分程で平泉寺奥の三宮社に出た。この三宮社が白山禅定道の出発点である。

白山は泰澄大師の開山と伝承されている。やがて修行僧が登るようになって道がつくられ、平安時代には加賀・越前・美濃の三つの禅定道が成立したという。この千年以上の歴史をもつ白山禅定道に、私は特別な想いを抱き続けている。

現世の悲しみに耐え、来世での救いを求め、長い行程に苦行を重ねた人々の登拝は、装備や食料に恵まれた現代とは異なり、きわめて過酷で厳しいものがあったに違いないと思うのだ。登拝道の中途で倒れ、絶命した人の存在さえ想像でき、まさに命がけの山旅であったと思われ、そんな登拝者の姿が映画のスクリーンのように目に浮かぶのだ。

ヒマラヤ登山などで頂上へのアタック隊の選出をめぐって「われ先に」と争いが起き、名誉欲の果て殴り合いまでになってしまうこともあるという、アルピニズムのあり方に疑念を持つからこそ、禅定道の存在は、ひときわ感慨深いのかもしれない。

2日目、いよいよ本番の経ヶ岳から法恩寺山への縦走である。

経ヶ岳は、県境の山岳を別にすれば、福井県内での最高峰という。昔、一向一揆によって平泉寺が焼き討ちにあったとき、その宗徒が経文を山頂に埋めたという伝説が山名の由来となっている。

白山より古い火山といわれており、山頂の南側直下の池ノ大沢は、そのときの噴火口で、山麓のなだらかな六呂師高原は、噴火の際の泥流でつくられたものだという。

ルートは沢沿いの唐谷コースと、保月

山・杓子岳を越えて行く尾根コースとがある。例会では見晴らしの良さから尾根コースを採用した。

このコースの起点は六呂師高原にあるが、時間と体力を節約するため、同高原の上部を走る広域基幹林道法恩寺線をバスで行き、途中のポケットパークで下車、すぐ付近の登山口から出発した。ポケットパークは、高原の展望台となっている。

広域基幹林道法恩寺線は、大野市の南六呂師と勝山市の暮見を結ぶ全長28㌔、幅員5㍍の全線舗装された道路であり、唐谷コースの入口もこの道沿いにある。したがって、唐谷コースと尾根コースを結んで周回することも可能ではあるが、唐谷コースの入口と尾根コースの林道登山口は、6㌔程離れている。

この林道を利用する場合、南六呂師からの進入口に表示はあるものの若干わかりにくく、慣れないと通り過ぎてしまうかもしれないので、注意が必要だ。

8時10分、林道登山口から出発した。スギ木立を抜け、岩のゴロゴロした道をジグザグに急登する。やがてブナの大木が多くなり、気分が和む。頭上が開け、1時間ほどで保月山だ。広場があり休憩に適している。四囲に眺望が開けているのだろうが、曇りのため見晴らしは無い。

三角点を後に杓子岳へ向かう。ロープのある急尾根の階段を登ると、杓子岳が見えてくる。牛岩と呼ばれる岩峰を捲き、崖状の稜線左側をトラバースし、露岩が点在する尾根のアップダウンを繰り返し、急斜面をジグザグに登ると杓子岳に着く。ここも小広場となっている。

このコースの見所は、杓子岳の先の中岳から見下ろす池ノ大沢のブナ林である。2005年はガスで見えなかったが、2006年には、何とか眺めることができ、林内を彷徨してみたいような誘惑にかられた。

経ヶ岳の山頂（南峰）でとうとう雨が降り出した。ここまで来てしまえば縦走するしかないと、北峰に向かう。道標が無いので、この日のようにガスに巻かれたときにはコンパスで方向を定めたほうがいい。踏み跡はあるが、チシマザサのササ漕ぎとなり、初めて立ち入ったときには不安になる。

北峰の標識もササのなかだ。ここから北へ赤兎山への案内はあるが、法恩寺山への案内は無い。雨とガスのなか、再びコンパスで方角を探り、西へ続く踏み跡を進む。相変わらずササ漕ぎだ。

2005年に比べ、2006年はこのササやぶが深く長く続いていた。ハイカーがあまり歩いていない様子だった。

ササやぶを脱すると原生的なブナ林の道となったが、花の無い季節であり、見晴らしもなく、本降りの雨に打たれて黙々と歩いた。晴れていれば、樹間越しに白山連峰や加越山地の山並が遠望できるはずだ。そして、春の季節なら日本海要素の花たちが続き、晩秋であれば燃えるような色彩の森に違いない。

法恩寺山山頂

13時過ぎ、法恩寺山頂から20分ほど北東に位置する伏拝に到着。雨は降り続いているものの、先の見通しがつき、ひとまずほっとする。

伏拝とは、白山を遥拝する地点のことで、三つの禅定道には所どころ設けられているようだ。白山にはまだ遠く、ここで登拝行を断念し、白山に向かって合掌して戻った人も少なくなかったのではないだろうか。

禅定道は、この伏拝から滝波川支流の弘川へとくだり、和佐盛平に進み、そこから小原峠に登って三ツ谷へくだり、市ノ瀬へと続いて行く。

法恩寺山頂には13時半過ぎに立った。2005年、周囲は乳白色の世界で何も見えず、疲労を感じながら突っ立っていただけであったが、2006年には雨も小止みとなり、振り返ると今縦走してきた尾根と加越の山並がぼんやりと浮かび上がり、アンコール参加のメンバーは苦労が報われた思いがあったようだ。

山頂直下には、スキー場のリフト終点地がある。スキージャム勝山はスキー板を履いていなくても、登りはリフトが使用できる。積雪期にリフトに乗れば、ラッセルしても山頂までは30分程度だろうか。冬晴れの日なら眼前は文句なしの絶景。スノーハイキングの狙い目である。

山頂からすぐの所に、山名の由来となった法菅寺跡（「恩」ではない）がある。ここから道はよく整備されているが、木道と丸太とが滑りやすく、濡れていると難渋する。ゆっくりくだって、14時20分、中ノ平に着いた。

（平成17年10月1日～2日
平成18年9月30日～10月1日歩く）

△参考タイム▽＊2005年のもの
［1日　くもり］中ノ平13・40―三頭山14・50～15・00―平泉寺15・40～16・00
［2日　くもりのち雨］広域基幹林道法恩寺線ポケットパーク8・10―保月山9・15～20―杓子岳9・55～10・05―中岳10・20―経ヶ岳11・10～15―北峰11・25―縦走尾根で昼食（20分程）―伏拝13・15―法恩寺山13・35―中ノ平避難小屋14・20

△地形図▽2万5千＝越前勝山

人気商品紹介
◆ウォーキングライト◆
オリジナルザック & 登山用品専門店
神戸ザック
http://www.h2.dion.ne.jp/~kobezac

クライミングからハイキングまで使えるシンプルなデザイン。トップとフロントに大型のポケット、両サイドには、ストック等の収納に便利なワンドポケットを装備。軽量化と機能性を追及した日帰りから一泊用のノンフレームのNEWザックです。
☆26ℓ☆
・カラー　ブルー×ネイビー・レッド×ネイビー
ワイン×ネイビー・オレンジ×ネイビー
・重　量　820g
・素　材　ナイロンU-リップ
・価　格　¥10,500
イモック山遊行くらぶ
秋の山行予定
● 9月16日　三国の山
● 10月21日　福井の山
夜叉ケ池・三周ケ岳
詳細はお問合せ下さい。
イモックと
サムで下さい
OUTDOOR SPORTS SHOP
IMOCK.
KOBE
〒653-0039 神戸市長田区日吉町3丁目1番30号
カナゾノビル2F
TEL (078) 621－5851
FAX (078) 621－3528
営業時間／10:00～20:00　毎日曜日不定休

林道終点から支尾根に取り付く

栗木田谷から釣瓶岳ナガオ尾根

比良

小山誠次

本誌87号「栗木田谷からイクワタ峠・釣瓶岳」で、栗木田谷林道をたどる途中、終点近くで「左手上方には釣瓶岳ナガオ尾根からの支尾根がスカイラインを形成している」と報告した。そこで、今回はその支尾根に栗木田谷林道終点から取り付き、釣瓶岳ナガオ尾根に到達することを目的として、山行計画を立案した。

平成18年11月3日の前日の天気予報では、兵庫県北部を除く近畿地方全域で降水確率は0％で、滋賀県は北西の風が吹き、彦根での最高気温は21度とのことであった。ただし、当日朝の予報では、滋賀県北部は午前・午後共10％、南部は午前0％、午後10％と、多少悪化の傾向がある。

JR京都駅8時15分発の湖西レジャー号は、10月21日のダイヤ改正によって、それまで永原行きだった新快速が敦賀行きに変更となった。ただ従来は近江今津駅では9時6分着・9時6分発だったのに、改正後は9時6分着・9時19分発となっているので、いささかいぶかしく思っていたが、構内放送で車輌の切り離しのためとわかった。湖西レジャー号は敦賀駅には9時51分着だが、いつか行く機会を持ちたいものだ。福井県の山を調べないといけない。

さて、本日は一応は青空なのだが、全体に靄がかかっていて、電車からは比良山系が薄いヴェールで覆われているようで、小女郎峠すぐ北のガレが白く目立っている。

8時55分定刻に近江高島駅に到着した。改札口を出て畑行きの江若バス乗り場に急いだが、ここでも変化があった。先ず10月1日から高島市コミュニティバスとなり、料金は大人が220円均一、ただ近江高島駅←→ガリバー旅行村間だけが440円である。コミュニティと銘打つぐらいだから、以前の料金との差額分は高島市が負担してくれているのか。もしそうならば、有り難いことだ。

また、従来の9時発が9時3分発と少しだけ余裕ができたが、とりわけ畑直通ではなく、ガリバー旅行村経由に変更となったことが大きい。実際、乗客は立ち席の人もそこそこあったが、その大部分はガリバー旅行村で降車したので、今月末まではガリバー旅行村を経て八淵の滝に行く人がずっと増加していくだろう。

結局、15分間迂回したことになり、9時36分黒谷に到着した。

従来は黒谷で降りて、ここから八淵の滝に向かう人が多かったが、本日ここで降車したのは筆者だけである。準備を整えて高度計を240㍍にセットし、6分後に出発した。栗木田谷への分岐点、コンクリート製の橋、右岸に渡る橋、再び左岸に渡る橋等々は、「栗木田谷からイクワタ峠・釣瓶岳」のときと不変であるが、何ぶんバスの迂回による予定外の遅延を少しでも取り戻そうと急いだ。以前の林道終点到着時刻の10時16分に対して、5分遅れまで追いつくことができた。

ここで、改めて準備を整え、飲水休憩をとり、10時30分林道終点の堰堤下流の谷を渡った。目的の支尾根はすぐ目の前である。しかし、ここから支尾根にのるまでが難儀だ。谷から急峻な斜度50度の崖を登らないといけないからである。実際に取り付いてみると、途中から杣人の踏み跡かと思われる片足の幅だけの通路を発見した。やはり筆者だけが選んだルートではないようである。

取付点ではちょっと苦労したが、尾根上に達すると、そこは広くてやや薄暗い杉の植林帯だ。事前の地図・地形図上での判断から、尾根にのれば、あとは一路上方を目指すだけで選択肢は歩きやすいルートを探ることにある。しばらく進む

(写真1) 思いがけなく延々と続く古道

栗木田谷から釣瓶岳ナガオ尾根付近略図

と、ブナ・ミズナラ・コナラの自然林のなかを歩いていることに気づく頃、明らかな溝状から踏み跡程度の古道が上方に続いているのを発見した（写真1）。

出発から20分後、標高680㍍に達した頃、木々の枝葉の間より、左手にカラ岳・釈迦岳・ヤケオ山が眺められるようになった。カラ岳山頂の関西電力比良無線中継所のアンテナが白く輝いているのがわかる。

登高ルートは古道と遭遇して以来、それをたどるようにして来たが、もちろんマーキングは全く無い。本日のように晴れ間の広がる日であれば、今の時期の黄葉、紅葉と常緑樹のコントラストが青空を背景にして、実によく映えている。また、古道にはすでに落ち葉が堆積しており、クッションを踏み締めての尾根登高を楽しむ心境である。なお、本日登高の平均斜度は24度である。

11時11分、標高810㍍に達したとき、右手上方の杉の木の隙間から釣瓶岳の山頂が一瞬遠望しえた。また、左側ではまだ釈迦岳の高度に及ばないのを目測で判断しうる。この尾根は植生上は植林と自然林とが交互に出現しているように見えるが、どうもあまりキチンと区域分けされていないようだ。

11時38分、標高1010㍍でようやく釈迦岳に並ぶ位の高度にまで達したと思う頃、正面上方の木々の隙間より青空がチラホラと垣間見えるようになってきた。あと少しである。このあたりになると、古道跡は不明瞭になってきたが、むしろよくここまで連続して残っていたものだと感心する。

11時52分、ついに釣瓶岳ナガオ尾根に到達した。ちょうど、釣瓶岳からナガオ尾根をたどり、最初に大きく右に屈曲する地点である。128と示した石柱が立ち、平成7年北比良財産区との丸い看板が木に括り付けてある。ここで標高1060㍍である。写真を撮って釣瓶岳に向かおうとしたとき、アカサカ道からナガオ尾根をたどって来た登山者1人に会った。

11時59分、釣瓶岳に到着して時刻もちょうどよく昼食開始とした。本日の当初の予定では、10時30分の尾根取り付きだったので、標高差500㍍余りの道無き登高ならば、13時の釣瓶岳到着でも御の字かと考えていたが、古道跡をたどれたことが好結果を生んだ。

昼食中、イクワタ峠方面から十数人のグループが釣瓶岳に登って来て、喧噪のなかで昼食をとり始めた。筆者は避けるように、急いで食事を済ませ、早々にナガオ尾根から下山開始とした。昼食時間は30分間だった。

ナガオ尾根は、踏み跡がもうほとんど山道といってもいいくらいに形成されている。筆者も最初ここを通るときは、コンパスと地形図で方向をチェックしながら歩いたが、この尾根では武奈ヶ岳、コヤマノ岳と釣瓶岳の位置関係が現在地をよく教えてくれる。

といっても、ナガオ尾根からは武奈ヶ岳とコヤマノ岳は木々の枝葉越しに常に望めるが、スッキリと写真が撮れるのは一ヶ所だけである（写真2）。また、後方を振り返り、釣瓶岳とナガオ尾根の小高くなった、本日の筆者の到達地点もきれいに写真に収めることができた（写真3）。

後は、尾根上をピーク991手前のコルまで踏み跡をたどってやって来た。このままっすぐ前方に向かえばアカサカ道であるが、本日はここで右折し、広谷に向かうこととする。

昭文社「比良山系」地図上、ピーク991の標示は標高1000㍍の等高線より高いピークに当てられているので、明白な錯誤である。2003年版では正確だったのだが、……。2004年版は全面改訂で、大きく構成が変更されたので、その時の手違いによるものか。

広谷からイブルキのコバを経て、ススキが全山をおおうほど見事に生い茂っている旧比良スキー場跡に到着した。そのまま道をくだり、旧八雲ヒュッテ跡まで来ると、すでにすっかり旧態の更地に戻っている（写真4）。八雲ヒュッテ正面に備え付けられていた石のテーブルと椅子だけが、往時の名残を留めている。一方、その正面には人工池が新たに造設されている。もしかしたら、八雲ヶ原湿原が人工的に拡張されるのだろうか。

北比良峠を目指して広い旧ゲレンデを登ると、比良ロッジもすでにきれいに取り除かれていて、作業用の車だけが慌しく動いている。さらに、旧ロープウェイ山上駅では、ちょうど建物が解体中で、

（写真2）ナガオ尾根から武奈ヶ岳（右）とコヤマノ岳

（写真3）釣瓶岳とたどり着いた地点（右奥）

（写真４）旧八雲ヒュッテ跡

こちらには我々がいつも休憩する芝生の上に、作業員用の宿泊施設まで建設されている。旧山上駅内を覗いて、往時を偲んで写真を撮った。京阪の「比良連峰アタック」に参加した当時、構内いっぱいに並んでようやく順番がきたと、喜んで階段を数段登って、プラットホームでローブウェイを待っていたのが懐かしい。

14時14分、ここからはダケ道を下山する。神爾（じに）谷道出合から次郎坊山の白秋の風景を写真に収めて、ようよう下山開始である。

ダケ道は昔から「九十九折」と言われるくらい、曲折が多い山道であり、角倉太郎著『比良連嶺』（昭和16年再版）には、「或る必要からその屈曲の数を調べたことがあるが、百十一とは驚かざるを得ない」と記載されている。しかし、屈曲の数よりも、ゴロゴロした石や岩の上を踏み越えて下りることが多いので、周囲の景色を見るよりも、怪我をしないようにと足許から視線を逸らせないことの連続である。膝の悪い人には堪えるルートでもあろう。

15時2分、大山口に到着し、13分後にはイン谷口まで下りてきた。そのまま右手の橋を渡り、途中で堂満東稜道と合流しながら、15時45分に比良駅に到着した。幸いにもあまり待たずに、15時53分発の京都行き普通電車で帰途についた。

本日の釣瓶岳ナガオ尾根に到る支尾根は、ヤケオ山で昼食をとりながら眺め、比較的まっすぐで長い尾根として以前から注目していた。そして、実際に登高してみると、驚いたことに古道跡がナガオ尾根直下まで溝状に延々と続いているので、今回の取り付き箇所以外は比較的歩きやすく、あまり人の踏み入らないルートであることを発見した。

これで、栗木田谷から笹峠にも、イクワタ峠にも、そして今回のナガオ尾根にも到達することができた。

本日は新旧の推移をいろいろと体験することの多い1日でもあった。

（平成18年11月3日歩く）

《コースタイム》

黒谷バス停（15分）栗木田谷分岐点（6分）コンクリート製の橋（8分）右岸に渡る橋（10分）林道終点（20分）標高680㍍（17分）標高810㍍（23分）標高1010㍍（9分）ナガオ尾根到達（4分）釣瓶岳（40分）ピーク991手前のコル（9分）広谷（5分）イブルキのコバ（11分）八雲ヒュッテ跡（11分）比良ロッジ跡（5分）旧山上駅（48分）大山口（13分）イン谷口（30分）ＪＲ比良駅

《地形図・地図》

2万5千＝北小松

昭文社＝「比良山系」（2006年版・2003年版）

道迷い山行①

ガラン谷のオマキヤシキへ

長谷川　雅　俊

鈴鹿

今回は道迷いについてチョッと書いてみたいと思います。新ハイ誌やネットの書き込みを読まれた方からメールをいただいたりするんですが、その中に「コンパスや地形図を使いこなして迷わず歩けるなんてすごいですね」と言うのがあります。

ところが現実は逆で、山歩きを再開してから13年間、ほとんど毎回迷っているし、片手位は、その日の内の下山を諦めかけたこともあります。

また小生がよく歩いている御池岳周辺でも毎年遭難者が出て、警察が出動しております。先日の日曜日も御池の犬帰シ谷に入っておりましたら、滋賀県警のヘリコプターが朝早くから飛んできて、遭難者の名前を呼んで捜索しておりました。幸い2時間程で鞍掛峠付近で無事発見されてメデタシメデタシでしたが、本人にしても後処理が大変ですし、ヘリを2時間も飛ばすと、莫大な費用がかかります。警察のヘリとはいっても税金で賄われるわけです。

できるだけ自力で（歩けるかぎり）下山するのが理想なのですが、そんな迷った時の参考にでもなればと思い、小生の恥ずかしい山行を紹介してみます。

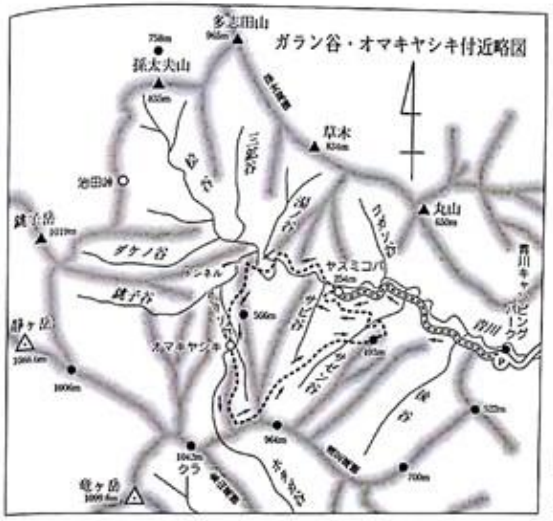
インターネットの世界で「ヤブコギネット（ヤブコギネット）」というのがある。通風山さんが管理しておられるのだが、非常にマニアックで登山道の無い山歩きを、たくさんの方が書き込んでおられる、小生にはちょっと敷居が高いのだが、おもしろいのでちょくちょく覗いている。

ガラン谷、オマキヤシキ跡（真中奥が左俣谷）

先日、このサイトの集まりである、第一回オフ会があった。参加したかったのだが、残念なことに家庭の都合で参加できず、悲しい思いをした。

竜ヶ岳の頂上に12時集合とのことで、皆さん、西から東から好き勝手に登り、大いに盛り上がったようである。そんなわけで、小生も3週間遅れで竜ヶ岳へ行こうと思い立ち、出かけることになった。「遅ればせのオフ会」と銘打った寂しい山旅である。

どこから取り付くかが問題であるが、



ヤブコギである以上、宇賀渓からでは能がないので久し振りに、青川からにする。

仕事が早く終わったので、自宅を20時9分出発。青川のヤスミコバまで行くつもりでいたが、林道のゲートが閉まっていたので、21時28分、キャンプ場のバーキングに停めてひと眠り。

朝4時起床、天気は良さそうだが、風がかなり強く、ゴウゴウとうなっている。4時47分出発。天空にたくさんの星がきらめいており、特にオリオン座とカシオペア座が美しかった。もっともこの二つ位しか名前は知らないのだが……

しばらくすると、薄明るくなってきて、右下の青川の川原が白く浮き上がってきた。途中、二ヶ所で林道が崩れて分厚い鉄板が敷かれている。このためゲートが閉まっていたようだ。この林道も雨の時は恐ろしい。ヤスミコバまで乗り入れるのはよいが、帰りに、崖崩れなどで車が通れなくなることがある。

5時15分、ヤスミコバに到着し、高度計を255㍍にセットする。ひと休みしてから川原に下りるが、けっこう水量があって、渡渉するのに難儀する。ヤッパ沢靴を持ってきたほうがよかったかなあ……。でも履き替えるのが面倒だし。

そう言えば、ここのヒルは三国岳のアンゾ谷と並んでもの凄い。昔、台風の3日後に入ったことがある。増水していてパンツ一枚になって何度も渡渉したのだが、川から上がるたびに体中ヒルだらけ！　たしかヒルは水の中にはいないはずなのだが。ちぎっては投げちぎっては投げと、いくら繰り返しても、すぐに体に取りついてくる。知らないうちにパンツの中にまで、恥ずかしくてとても血を吸われた場所までは口に出せない。

三回目の渡渉で左岸の滝ヶ谷の滝を通過。まっすぐ進むと堰堤に突き当たったので、戻って左岸を高捲く。高捲き道にて今年初めてのヤマジノホトトギスに出会う。この花、何となく気になるんですよね、毒々しくてあまり好きじゃないけど、ネオン街の厚化粧の○○○のよう……。

写真を撮りたかったのだが、まだ暗いので諦めて歩き出す。結局この花の写真

をこの年は撮りそびれてしまった。しばらくして広河原入口の小屋跡に出たが、跡形もなくきれいに片付けられていて、コース案内の新しいプレートが建っている。

広河原に出ると、雌鹿が二頭、左から右へ走り抜けていった。以前はこのあたりで必ずカモシカと出会えたのだが、最近は鹿ばかり……。近頃の鈴鹿は鹿が増え過ぎてカモシカを駆逐しているように思える。広河原もかなり荒れていて、水の流れもほとんど無くなっている。

湯ノ滝を通り過ぎてから右岸尾根にのるのだが、うっかり通り過ぎて川をまっすぐに進むところだった。いつまでたっても地形が覚えられないアホな私。

登山道のわかりづらいやぶを漕ぎながら進むと、すぐに昔の面影が残っている雰囲気の良い場所に出る。昼間でも薄暗い感じの所であるが、往時には鉱山関係の施設や遊郭が並んでいたといわれる、「下り藤」と呼ばれていた所だと思う。今でもここだけタイラに整地され、石で四角を囲われた屋敷跡がいくつかある。

通り過ぎて斜面を少し登ると、すぐに素掘りのトンネルが現れる。「やはず尾の隧道」と呼ばれていて、明治時代の政商、五代友厚の次女、五代アイが治田鉱山の鉱石を運ぶため掘ったトンネルと言われている。治田峠へは、このトンネルを抜けるのだが、本日は手前からトンネルの尾根へ攀じ登る。尾根芯にのると、朝日が眩しくなり、6時19分、395㍍で子鹿が銚子谷側からやせ尾根を乗っ越していった。

しばらく尾根を直登して行くと、6時23分、410㍍にて、かすかに杣道が右へトラバースしているようなので、その道を追うが、すぐにやせ尾根に突き当たってしまった。道は消え、尾根向こうは急崖なので、やむをえずやせ尾根を直登する。162度へ登るがすぐに獣道とは明らかに違う道が現れたのでトラバースする。しかしまた崖になり、灌木につかまりながら直登を繰り返す。

6時57分、515㍍でトラバースしていると、ようやく進行方向に白い川原が見えたので下り立ったが、ガラガラにガレたガラン谷、時間は7時6分、490㍍であった。今までガラン谷は枝谷だとばかり思っていたのだが、下流部は結構な水量があったのに驚いた。登り始めると515㍍ですぐに滝が現れた。落差は6～7㍍位で右岸を高捲いたが、途中で今年初めてのミカエリソウを見つける。545㍍でも滝があり、こちらは落差5㍍程で左岸を高捲く。

しばらく谷を進むとほとんど水量が無くなり、7時50分、570㍍で二俣になる。左171度、右225度に分かれている。この手前の左岸に、「北勢町風土記」に載っている伝説の女山師、おまきさんの屋敷跡と言われている「オマキヤシキ」がある。ここでおまきさんが本当に金を採っていたかどうかは定かではないが、石垣の並び方からして確かにここに小屋があったのは事実だと思う。しかし、このガラン谷は見ての通りのガラガラの暴れ谷で、冬ならともかく、春から秋にかけては、雨になれば土石流が恐ろしくてとても住めない所と思うのは小生だけだろうか？　もっともこういう話は小生も大好きで、山歩きの大きな楽しみの一つである。

さてこれからどうするのかを考える。二俣の間の尾根を登るのが一番無難。右俣は入ったことはないが入り口から覗くと、ガレてはいるが苔むして暗くやぶっ

ぽい。左俣はまさしくガレ谷で、上の方まで白い岩がゴロゴロしていて、明るい廊下状になって逃げ場もない。以前入渓したところ、落石に当たり、ケガをしてほうほうの体で逃げ帰ったことがある。

う～ん、どうしよう……。アホはアホなりに深く考える。ヤッパ無理するのはやめよう。ここで動けなくなったら、ほとんど人が入らないので、単独行者にとっては致命的となる。こういう時には、気が小さい性格が長所となる。

8時16分、二俣の間の尾根急斜面を灌木につかまりながら攀じ登る。すぐに猛烈なやぶになり、登るどころか右にも左にも行けなくなり、何とかやぶの上をひざまずいたりして這い上がる。地に足が着かないとはまさしくこのことである。やっとのことで激やぶを越えると、8時43分、675㍍にて美しい二次林の急斜面となる。周りを見渡すと、カワチブシに混じって、アケボノソウが咲いているではないか！　アケボノソウと言えば、御池岳へいつも写真を撮りに行くのだが、昨年に続いて今年も不作で諦めていたので、ここで出会えたことに大喜び。ザックを降ろして大休止、いろんなカットを撮る。

30分程してから再び歩き出す。時々左俣のガレ谷を覗き見しながら登って行くが、715㍍で谷はかなり小さくなる。815㍍になると掘割もなくなり、小さな谷となる。9時39分、840㍍で谷は無くなって広い斜面となってしまった。

とりあえず、高みに向かって195度に登って行く。斜度もかなりゆるやかになり、ノンビリと散策気分となる。右手の方へ寄り道でもしようとトラバースすると、たぶんガラン谷右俣谷の源頭部に出合い、斜面から水が噴き出ている。谷の源頭部というのは不思議なもので、水がジワジワとにじみ出てくる所もあれば、ここのようにいきなり吹き出す所もある。しばらく飽きずに見とれていた。後少しで稜線に出るという所で、大きなヌタ場（2～5㍍位の長円形）があった。真っ黒な泥土で、ケモノの足跡が入り乱れていた。

10時10分、970㍍でクラ（1042㍍）の東の稜線にたどり着いた。地形図で見てみると、970㍍弱なので高度計は正確である。このまま竜ヶ岳のピークまで行こうかとも思ったのだが、この時間では頂上は登山者が大勢いるのではと予想され、諦める。仲間同士で仲良く食事をしている所を眺めるのは、単独行のわびしさがつのるので近寄りたくはない。そういえばもう何年も竜ヶ岳のピークには行っていない。

ガラン谷源頭部

そのまま尾根芯に沿って964㍍ピークへ歩き出す。このあたりのササも御池ほどではないが、かなり勢いが弱くなって、周りを見渡せるようになってきたので歩くのに問題はない。ある意味では、楽しみが半減してしまった。途中、馴染の池に寄る。好天続きのせいか、ヌタ場ほどではないが水溜りかも……と思わぬでもないが、やはり夢を持ち続けたいので池としておこう！

10時52分、940㍍あたりで左手に尾根らしき所が見受けられたので、46度へ下りることにする。青川側の林道南河内線終点から谷に入り、斜面がきつくなってから尾根にのり換え、何度かこの遠足尾根にたどり着いたことはあるのだが、今こうして下りようとすると、下りる場所がどこかわからない。マーキングを取り付けておけばよいのだが、小生の主義に反するので今までマーキングしたことはない。

そのまま目の前のこの尾根沿いに進めば、林道に出合えるであろうとくだり始める。ところが11時14分、745㍍でたどり着いたのは、白っぽいガレ谷（サビ谷）の中！　う～ん、何でこうなるの？

早速コンパスを取り出して現在地をチェックする。藤原岳の袴腰三角点が10度、孫田尾根の丸山ピークが48度。とりあえず右へトラバースし、11時23分、715㍍で二つ目の沢を横切る。と、目の前をカモシカが走り去った。

11時42分、550㍍においてもまたもやガレ谷（サゼン谷）の中！　もうメゲそう。気を取り直してコンパスで現在地を確認すると、丸山ピークは40度の位置。11時54分、500㍍で薄っすらと、しかしけっして獣道ではない杣道に出合う。道なりに右へトラバースして行くと、11時58分、490㍍で尾根にぶつかったので、尾根芯に沿って下りる。コンパスで確認すると、60度の方向へくだっているようだ。ちょうど、鹿が尾根右手を駆け抜けていった。12時3分、465㍍にて植林帯になる。12時8分、440㍍でようやく林道にたどり着いた。かなり荒れた林道で、しばらく見ないうちにこんなに荒れるのだろうかと思った。右へ行っても左へ行ってもすぐに道が無くなり、途方にくれる。特に左側はもの凄いガレ谷に突き当たり、トラバースをためらわれるほどであった。やむをえず適当な所から、林道下の植林帯へ飛び込み、まっすぐに下りて行くと12時34分、385㍍において見覚えのある林道にソフトランディング。

ホッ、今日もまた無事に下界に戻れたことに、鈴鹿の山神様に感謝……。

どうも先程の荒れた林道は地形図に載っていない道のようである。道なりに西へ進むと、今日悩まされたガレ谷に新しく出来た大堰堤に出合う。橋もコンクリートの出来たてほやほやの感じである。橋の上から丸山ピークを測ると31度であった。

ここからは鼻歌交じりで林道を歩いて、12時57分、254㍍でヤスミコバに到着。13時28分、青川キャンピングパークの駐車場に何とかたどり着くことができた。あ～よかった。

（平成18年9月24日歩く）

＜参考タイム＞

青川キャンピングパーク4・47―ヤスミコバ5・15―滝ヶ谷の滝5・34―広河原5・40―湯ノ滝5・50―素掘りのトンネル6・02―ガラン谷7・06―オマキヤシキ7・50―稜線10・10―下降点10・52―林道12・34―ヤスミコバ12・57―青川キャンピングパーク13・28

＜地形図＞2万5千＝竜ヶ岳

源流を訪ね、源流の山を登る

吉野川・四万十川・球磨川、そして淀川

山形　明

子供の頃、川で遊ぶと晴天続きであるにもかかわらず、川の水は途切れることなく悠々と流れてくる。この大量の水はどこから来るのだろうか、この川の上流にはどのような仕掛けがあるのだろうか、との疑問が絶えることがなかった。この謎を解いていくと、「源流」という言葉にぶち当たる。では源流とは何か？　水の流れの源である、というのだがさっぱりわからない。しかし「源流」という言葉の響きは心に残り、自分で見てみよう、と夢を見た時期があった。川の源流を確かめた後も、あの川はどうなっているのだろうか、この川はどうなんだ、と気になることが多く、四国と九州の川へ行ってきた。

四国・吉野川

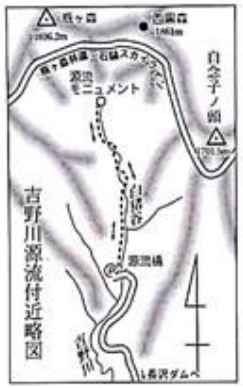
紀伊水道に流れ込む吉野川の河口に立つと、やはりでかい。四国三郎の別称を持つこの川を地図で見ると、徳島県を一直線に横断し、県境付近で南下し、高知県に入り石鎚山系が源流部のようだ。この川に沿って道が石鎚山のふところまで入っているので、川を見ながら通行できる、車の距離計をゼロにして走り出す。

幅広くゆったり流れるこの川も、中流域になると、大歩危・小歩危の渓流美を見せるようになる。国道194号線から県道40号に入るが林道並みの道だ。寺川神社横から白猪谷林道に入り、白猪谷渓谷を目指す。途中人家がぽつぽつとある。よくもまぁこんな山奥にと思う所だ。四国の山は険しく、その険しい山の斜面に人家が張り付いている。平家の落人は山岳民族になったのだ。

吉野川中流域の大歩危

吉野川の源流は石鎚山脈、瓶ヶ森に突き上げる白猪谷に源を発する。白猪谷をまたぐ源流橋の先に車を置き通行に入る。

橋の上から谷を見ると、谷も深く大量の水を流しているので、奥がかなり深いのではないかと思う。高捲きをしたり、谷へ下りたり、渡渉をしたりと道はしばらく続くが、やがて道は無くなり石ゴロの谷の中を歩くようになる。いくつもある深い釜はエメラルドグリーンに澄み渡り、歩きやすい所を拾って何度も渡渉を繰り返して行くと、モニュメントのある源流点に着いた。



吉野川源流点上の滝

モニュメント横の大きな岩ゴロをよじ登ると台地状になっていて、そこは一面ヤマシャクヤクが咲くお花畑、その中の岩の積み重なる間から、チョロチョロと水が流れ出ている。これが最初の一滴だと写真を撮ったが、奥を見ると高さ5㍍ほどの滝がチョロチョロと水を落としている。あれが源流だろうと行ってみると、落ちた水は地に吸い込まれ、三方が壁になっていて登れない。

結局最初の一滴は見られなかったが、お花畑の中に坐り、ウイスキーの源流水割りをいただく。ヤマシャクヤクに周りをぐるっと囲まれて、花はみなオレを見ているようだ。風に舞う花は何か言葉を発しているように思える。オレを歓迎しているのだ、ウイスキーの水割りも格別にうまい。酔いしれて1時間あまりをここで過ごしてしまった。

吉野川源流の瓶ヶ森は石鎚スカイラインから簡単に登れる山で、以前に登っているので割愛した。

（平成19年5月16日歩く）

≪コースタイム≫

源流橋（1時間40分）源流点

≪地形図≫2万5千＝瓶ヶ森

四国・四万十川から不入山

翌日、四万十川源流の不入山を目指す。国道439号線を行くが、これが曲がりくねったくねくねの道、乗用車同士のすれ違いもままならない。大型トラックは走れない。天筒トンネル手前から県道に入り、しばらくで不入山登山道入口の林道を見て先へ進むと、源流部へ入る林道がある。林道を車で入ると四万十川源流の石碑があり、そこに車を置く。

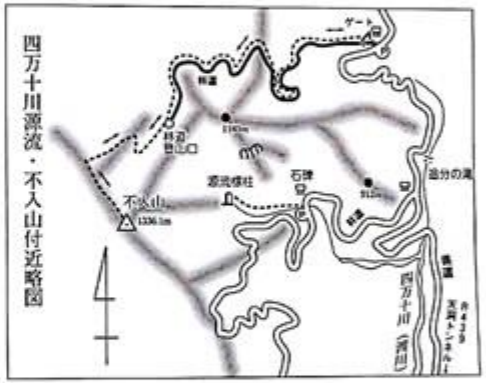
沢を左から入りすぐに右へ渡渉ひとまたぎ、細い流れに沿って道は源流部まで続いている。高捲きをする所から沢に入り、苔のついた石ゴロの中を右や左に歩く。オレは今四万十川をまたいで歩いているぞー、と叫ぶが誰もいない。源流点には「幹線流路延長一九六㎞の流れここに発す」と書いた木柱が建っている。その横には小さな滝があるのでそこを登るとしばらくで流れは消え、最初の一滴が岩の重なる間から湧き出ている。

ここでもウイスキーの四万十川源流の水割りをいただく、ウイスキーは参鳥の極上品だ。

不入山登山道への林道は入口にゲートがあり、林道を約1時間歩くと登山口、

四万十川源流部の遡行

不入山山頂



四万十川源流・不入山付近略図

さらに1時間で頂上に達する。山頂には1等三角点があり、南北に切り開きがあり、北には四国カルストの黒滝山・鳥形山が見える。林道をくだると鶴松森が姿を現し、その奥の山の稜線上には風力発電の風車が十基並んで回っている。不入山はコウヤマキの大木の森があり、途中尾根上にはひときわ大きな巨樹があり、「不入山太郎坊」と書いた木札が立っている。

（平成19年5月17日歩く）

⋀コースタイム⋁

源流の石碑（約40分）源流点・林道ゲート（1時間）林道登山口（1時間）不入山

⋀地形図⋁2万5千＝王在家

九州・球磨川

球磨川は最上川・天竜川と共に日本三急流として知られ、河口八代まで115㌔を流れる川だ。古くは上流で伐採された木材をイカダに組み、この川に流して河口まで運んだが、上流に市房ダムが出来て川は木材運搬の役目を終えている。代わりに登場したのがトラック輸送で、そのための林道が山奥深く入り込んでいる。水上村から山を越えて五木村へ通じる林道をたどる球磨川本流に沿って入る。林道支線を行くと、球磨川を渡る橋があり、ここが入渓点だ。

この橋は源流橋で、橋の左から入ると道がある。高捲きから谷へ下り、一本丸太で左岸へ渡る所から谷へ入る。約4㍍、7㍍、15㍍の滝を次々とへつって越えて行くと、正面に岩が迫りS字状ゴルジュになり、チョックストンが見える。ここまでと右手の斜面に逃げ、登山道を登る。

球磨川源流付近略図

球磨川源流域に次々出てくる滝

道からは谷は見えないが、かなりの高捲きだ。源流部で涸谷にぶつかると、下の方から水の流れる音が聞こえるので、その谷をくだると二俣に分かれる。水の流れる左俣を登り返すと谷は突然失せ、地下の岩盤から水が噴き出している。地層は石灰岩で地下に鍾乳洞でもあるのだろうか。晴天続きの日であったので水量は少なかったが、雨後にはこの岩穴から大量の水が吐き出すように流れ出るという。

ここに坐り込む。九州といえば焼酎、今日は球磨焼酎を持ってきた。源流水で湯を沸かす、球磨焼酎の球磨川源流水のお湯割りだ。酔いの回りは早い。この上の険しい涸沢を登って水上越まで行く予定であったが、あっさり諦めてしまった。

（平成19年5月20日歩く）

⋀コースタイム⋁

源流橋（1時間20分）源流点

⋀地形図⋁2万5千＝椎原

そして、近畿・淀川

鈴鹿のムトウ女史から北国街道の滋賀・福井県境分水嶺に淀川源流の石碑があった、との連絡が入ったので行ってみた。

木之本から高時川沿いの道に入るが、先で通行止め。北国街道に戻り、北上すると栃ノ木峠に着く。脇にトチノキの大樹があり、ここが分水嶺だ。

高時川の細い流れは分水嶺近くでコンクリートの溝になり、スキー場の建物の床下に消えている。峠鞍部西の山はスキーゲレンデになっていて、この斜面の水をコンクリート溝に流し込んでいるのだ。スキー場が営業すれば建物からの営業排水もこの溝に流し込まれるであろう。沢沿いには広い駐車場もあり、淀川の水はすでに源流部で汚れているのだ。

淀川の水は日本一まずいという。猿ヶ馬場山に登った時、地元の人から白川郷の水源の山なので入ってほしくないと言われた。東京都の水は奥多摩の山と森を水道局が管理している。水を守るということは大変なのだ。

（平成19年5月27日歩く）

⋀コースタイム⋁

駐車場（約2分）源流点

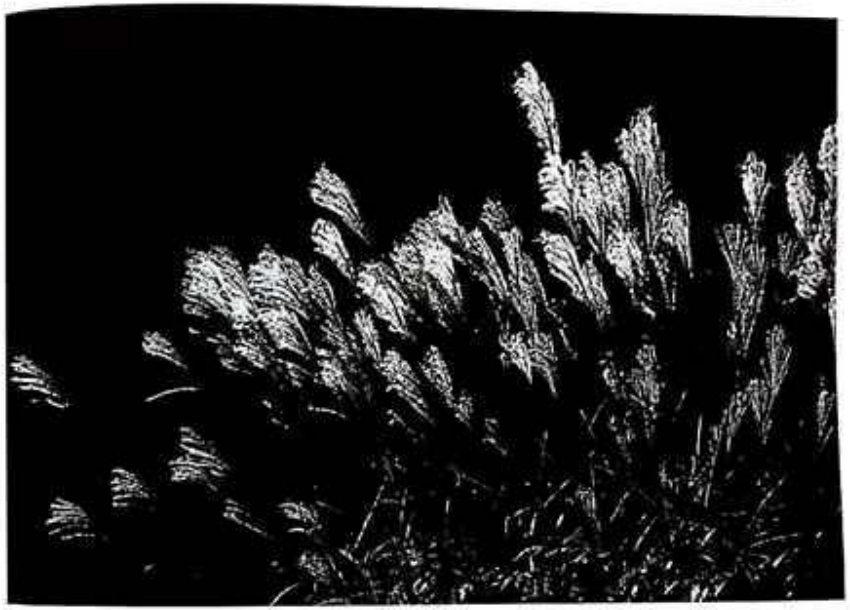
⋀地形図⋁2万5千＝板取

京都北山を歩く　●ミニガイド（第5回）

エリア別徹底研究

―― 初秋、ポピュラーな山、自然林の稜線を歩く5コース ――

■村田 智俊



初秋の山ミニガイド

京都北山の山々へ四季を通じて歩いてみませんか。

今号は涼しい秋の1日、ゆったりと歩いてみたいポピュラーな山を五つ紹介します。この中で「瓢箪崩山」はルートを変え、「八ヶ峰」はガイドどおりに、村田が案内する山行例会に組み込んでいます。ガイドを読まれ、興味をもたれた方は、ぜひご参加ください。

最近、京都北山でも山麓に開発の手がのび、無用と思われる林道工事が行われ、一方荒れた山道が放置されたまま。立ち入りが禁止された所も多くなり残念です。

＊北山歩きの入門コース「瓢箪崩山」「平国高山」、自然林の稜線をたどる「旧花折峠から天ヶ森」「祖父谷峠から城丹国境尾根」と、一度は歩いてみたいコースを選びました。北山奥のパノラマ台の「八ヶ峰」は、紅葉の始まる10月末頃がよいでしょう。

コース①（一般コース）

寒谷峠から瓢箪崩山

珍しい山名に惹かれて何度か登ったことがあるが、なぜこのような名が付いているのかは知らない。どこからか眺めた形が瓢箪に見えるのであろうか。大原へ行くバスの車窓から西に見える。

京都駅から大原行きのバスに乗り、戸寺バス停で降りる。コンビニの横から西に高野川の橋を渡って井出集落に入る。寒谷峠へは、金毘羅山麓の江文神社への道を分け、集落内で左折して南に向かって行く。すぐに集落が途切れ、林道ゲートを入って行く。林道はやがて終点になり、ややガレ状の谷沿いをつめる。

バス停から約1時間で寒谷峠に到着し、ここをまっすぐ越えると岩倉に出る。寒谷峠には四方から道が集まっている。峠から東南の山頂への登山道を行く。同じ方向の右へ山頂を捲く道があるが、それには入らないで、岩のある尾根道を行く。いったんくだって登り返すと、瓢箪崩山（3等△532・4m）の山頂に着く。

東方には比叡山や奥比叡の山々が望まれ、北には大原を取り囲む山々も見える。ここから下山地の岩倉までは、ゆっくり歩いて2時間も見ておけばよいので、山頂でゆっくりとしよう。

岩倉への下山は、尾根伝いに南へ行く。山頂をくだって行くとすぐに地蔵を見て先ほどの捲き道が右から合流する。山頂に用のない村人が歩いた道であろう。

500㍍程尾根を伝って行くと、二手に分岐する。まっすぐ主尾根を伝っていけば、二本松を経て八瀬方面。案内するコースは、岩倉への右手の道へくだって行こう。しばらくは支尾根をくだるので坦々としているが、八塩山を過ぎると急な下りになって滑りやすい道が続く。雨後には通りたくない所である。しばらく緊張を強いられるが、やがてなだらかとなって池に下り立つ。

民家の中を花園町の大きな車道に出てそのまま南へくだっていけば、叡電八幡前駅に着く。15分で出町柳駅である。

≪コースタイム≫

JR京都駅（バス1時間）戸寺バス停（1時間）寒谷峠（10分）瓢箪崩山（30分）八瀬分岐（1時間）池・岩倉花園町（15分）叡電八幡前駅（電車15分）出町柳駅

≪地図≫昭文社＝「京都北山」

訂正　前号「滝又の滝から東俣山」で、東俣山へのコースに誤りがありました。「射撃場手前で右の林道に入る」と書きましたが、現在私有地となっていて柵があり、林道へは入れません。林道終点からの道も廃道になっています。

東俣山へ登るには、その林道と射撃場の間の尾根を登ってください。はっきりと踏み跡があり、射撃場へ立入禁止のロープに沿って行けば、下から約30分で山頂に着きます。

（7月1日例会の下見時に判明）

コース②（一般コース）

小野郷から半国高山

半国高山には例会で何度も登ったが、登るたびに山頂の雰囲気が変わっている。以前は深いササに覆われ、樹林が繁っていたが、10年前には大きな松を残して伐採され、東側の展望がよかった。

北の緑坂峠から尾根伝いにいくつかのピークを越えて山頂に着き、供御飯峠へくだって杉坂まで歩いたこともある。

今回は、登りやすい短いコースを紹介する。初登山の場合は迷うことの無いコースで登り、地形や周りの雰囲気を知り、

次には少し違ったコースから挑戦してみる。そして四方八方から攻めて幾度か挑戦する。最後は尾根や谷筋を地形図で読んで人の行かない自分の道を発見して歩く。これが北山歩きの醍醐味で、やぶ漕ぎの楽しみが広がる。

京都駅発の周山行きJRバスに乗り、約1時間20分で小野郷バス停に着く。すぐ岩戸落葉神社を見る。大森への車道から東（右）へ岩谷林道に入って行こう。車止めがありマイカーは入れない。右に川を見ながら杉林のなかを行く。しばらくすると川を渡って左を流れるようになる。30分もたどると林道が右へ大きくカーブする付近が岩谷峠への取付点だ。

昔は大岩を左に見ながら登って行った記憶があるが、今年1月に例会で歩かれた仲谷氏に尋ねたところ、現在その道は歩けそうにないようで、案内札を見て、いったん左の川に下りて渡渉して右岸沿いを行くとよい。倒木をまたぎながらの道だがテープがあり、また右の川を渡渉すると岩谷峠に登るしっかりした道があるとのこと。この先、支谷を渡り、左岸沿いを行くと、ロープ場が一ヶ所あり、倒木が塞ぐ所があるが、捲いて行けるので問題はないとのことだった。

岩谷峠は小野郷と真弓八幡町を結ぶ峠で昔はよく歩かれたと思うが、荒れても林業作業に入らない山道は放置されているようだ。北山の峠らしい雰囲気を残し、ベンチと道標がある。

山頂は峠から南へ、15分ゆるやかに登る。半国高山（△670・0㍍）はその後樹林が育ち、展望は無くなっている。

あとは南西にのびる尾根伝いに急坂をくだり、鞍部から上り下りを繰り返しながら展望の良い534㍍を過ぎて、地蔵のある供御飯峠に着く。左は杉坂口バス停へ、右の小野郷方面にくだろう。すぐに作業小屋を見て、林道をたどれば小野郷口のバス停である。

△コースタイム▽

JR京都駅（バス1時間20分）小野郷バス停（30分）岩谷林道の取付点（40分）岩谷峠（15分）半国高山（15分）鞍部（20分）P534㍍（15分）供御飯峠（20分）小野郷口バス停（バス1時間20分）京都駅

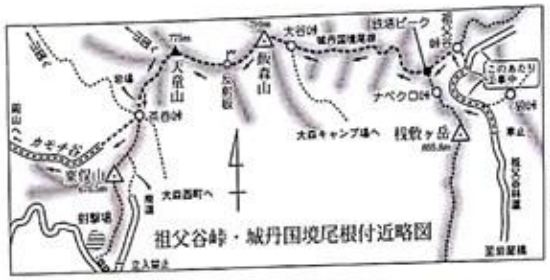
＜地図＞昭文社＝「京都北山」

＊JRバス ☎075（672）2851

コース③（ロング一般コース）

祖父谷峠から城丹国境尾根

城丹国境尾根は、京都北山を南部と北部に分ける、まさに山城と丹波を分ける東西に長い尾根である。



私の予想だが、南の雲ヶ畑から北の京北町井戸へ祖父谷峠付近を越えて府道61号を結ぼうと、今の工事があるのではないだろうか。北山の原風景の地に道路が出来、車が行き交う情景を想像すると、昔を知るハイカーにとってはたまらない。

今回紹介する城丹国境尾根はロングコースになるので、バス利用の岩屋橋からでは忙しくなる。京都地下鉄北大路駅からタクシーに乗り、岩屋橋の3㌔奥の祖父谷林道の車止め地点から祖父谷峠を目指す。降りた所から地道の林道を上って祖父谷峠へ行こう。この付近、森に覆われた昔の雰囲気は残っていない。近年伐採されて林道工事中で峠付近も荒涼としている。祖父谷峠からは、ナベクロ峠北の鉄塔ピークへ行く。

ここが、南の桟敷ヶ岳と西に向かう城丹尾根への分岐点だ。以前には見えなかったが、ここも広く伐採されてこれからたどる飯森山や西の反射板、天童山までが見える。

鉄塔ピークから西に入ると自然林のなか、快適な登山道が続く。飯森山までほぼ尾根上をたどる道だが、ときには尾根の右や左へ折れながら行く。道標やテープがあり、それらから外れないように行けばよい。アップダウンはあってもそれほどではない。しかし、大谷峠を過ぎると急登になって登り切ると、飯森山（△791㍍）だ。山頂でお弁当にしよう。

飯森山から急坂をくだって、鞍部から登り返せば反射板のピークで展望が開ける。次は天童山のピークに着く。広々として落ち着ける山頂なのでゆっくりとくつろいで行こう。

直接山国にくだる道もあるが、バス便のよい周山に向けてまず茶呑峠を目指す。急坂をくだって行き、下りた所でひと息つける。やがて岩場を通過して茶呑峠に下り立つ。

峠から周山への下山はカモチ谷林道がよい。しばらく荒れた道だが、やがて歩きやすい林道となり、民家に出た所を左に曲がって道なりに車道を進めばやがてJR周山バス停南の橋に出る。

△コースタイム▽

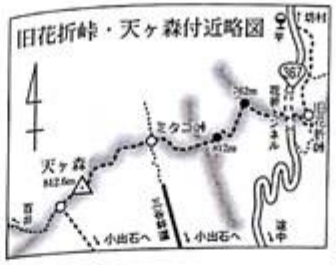
京都駅（地下鉄15分）地下鉄北大路駅（タクシー40分）祖父谷林道車止（20分）祖父谷峠（10分）鉄塔ピーク分岐広場（1時30分）飯森山（20分）反射板ピーク（15分）天童山（30分）茶呑峠（1時間50分）周山バス停（バス1時間30分）京都駅

＜地図＞昭文社＝「京都北山」

＊JRバス ☎075（672）2851

コース④（中級コース）
旧花折峠から天ヶ森（ナッチョ）

南比良・檀現山からの支尾根が、花折峠から天ヶ森、天ヶ岳にのびている。途中越から北方は、敦賀街道を挟んで東を比良、西を京都北山と分けていて、唯一花折峠だけが比良と北山を尾根で結んでいる。花折峠を越すと、安曇川によって明確に区別される。その繋がる尾根の下を花折トンネルが通っている。トンネル開通によって、昔の鯖街道が旧花折峠として残っている。当時の人はこの峠を越えるのに苦労したことだろう。



旧花折峠から尾根上を忠実に歩いて天ヶ森まで歩いてみよう。

出町柳駅発の京都バス、あるいはJR堅田駅から江若バスに乗り、平バス停で降りる。バス道を少し引き返し、旧花折峠への昔の鯖街道に入る。しばらくは檀現山への登山道といっしょになっていて途中で分かれるが、鯖街道をそのままたどると、旧花折峠に登り着く。

旧花折峠には立派な石碑がある。峠南側から西に、尾根に上がる登山道がのびている。草叢の道を高みへとたどって行くと、やがて尾根にのる。展望のきく尾根道を西へ伝い、檜林のなかを登っていくとP762㍍だ。ひと休みしたら左折するように南への尾根をたどる。以前はやぶに覆われていたが、いまは歩きやすくなった。前方に見えるP812㍍を目指して、最後の急登をこなして上部に出て、右折してしばらく行くと対面に皆子山を見て、山頂に着く。

灌木が繁っているが、積雪のときはすばらしい広場を提供してくれる。このピークに名前が無いが、私は勝手に「ミタニ山」と呼んでいる。それは三谷の源頭の山であり、ミタニ峠の名もあることからである。

ミタニ峠までは樹林のなか、快適にくだる。途中、くだった鞍部に広葉樹林の広場がある。昼食はこのあたりがいいだろう。緑に包まれ落ち着ける所だ。

鞍部から少し登り返し、しばらく行くとミタニ峠だ。天ヶ森へは三谷口バス停からこの峠に来てもよいが、林道歩きが長いので敬遠したくなる。

ミタニ峠から天ヶ森へは、樹林のなかをテープに導かれて容易に登っていける。伐採斜面が出て展望が広がる箇所があったが、植林は大きくなっているだろう。天ヶ森（△812・6㍍）は狭い山頂だがのんびりしていこう。南にくだって行くと、すぐに左折する小出石への下山道が分岐する。これをたどって行けば1時間30分で国道に下り立ち、10分で小出石のバス停に到着する。

＜地形図＞
JR堅田駅（バス40分）平バス停（30分）旧花折峠（30分）P762㍍（30分）P812㍍（40分）ミタニ峠（1時間20分）天ヶ森（1時間30分）国道登山口（10分）小出石バス停（1時間30分）京都駅
（地図）昭文社＝「京都北山」
＊京都バス ☎075（871）7521
＊江若バス ☎077（572）0374

コース⑤（マイカー一般コース）
知見八原から知井坂・八ヶ峰

前号で頭巾山を案内したが、同じ若丹尾根の八ヶ峰に京都側から登ってみよう。福井県側の八ヶ峰旅行村や染ヶ谷橋からよく登られているが、京都北山の山ということで京都側からのコースを紹介する。

登山道は明確でわかりやすくあえてガイドする必要も無いくらいだ。バスは不便なのでマイカーで行こう。ただし、八原からの往復では能がないので下山は山頂から東の五波峠とする。二台で行き、まず五波峠に置き車して八原へ入ろう。

八原からしばらく植林のなかだが、スキー場跡を過ぎる頃から自然林になってくる。それほどの急な登りもなく、約1時間で上部の林道に出合い、すぐに知井坂の峠に着き、福井県側の展望が広がる。道標を見て山頂へは東に尾根伝いを行く。鉄塔の下を通り、登って行くと、八ヶ峰（△800・1㍍）山頂だ。

旧八ヶ国が望まれるところから八ヶ峰と名が付いたというが、たしかに展望は抜群だ。2等の三角点と山名柱の周りでゆっくりとお弁当を広げてくつろげる。お天気のよい日なら、麓の家族旅行村から大勢が登ってくることだろう。福井県側からならファミリー登山でも容易に登れる。

ゆっくりしたら東へ五波峠に向けて出発する。地図を見ると長いようだが、「森林浴の森日本百選」に指定されているだけに、尾根を伝う道はブナなどの自然林がいっぱい。二、三のピークを越えるが、下り一方のはっきりした道だから楽に歩ける。山慣れした人なら約1時間で下り着くが、自然林のなかで休憩して展望を見たりしてのんびりとくだろう。

福井県側から五波峠へ立派な林道が上がってきている。マイカー一台ならここから山頂を往復するのがよいだろう。

以前、このコースを例会で歩いたときは大型バスで来たので、下の田歌まで林道を歩いて下山した。地図に「遊車道ビレッジライン」と記されているがどういう意味だろう。曲がりくねった道で長いなあと思ったのを覚えている。

置き車に乗って八原のもう一台まで戻り、帰路に着く。

＊10月21日回にこのコースを例会に組みますが、マイクロバス利用なので五波峠で乗車できます。

＜コースタイム＞
京都市内（マイカー・五波峠経由3時間）知見・八原登山口（1時間）知井坂の峠（20分）八ヶ峰（1時間10分）五波峠（マイカー・八原経由3時間）京都市内
＜地図＞昭文社＝「京都北山」

連載

旗振り通信の新研究 ⑤

生駒山系・萬塾・時計・旗振り山

柴田昭彦

【生駒山系の旗振り場について】

平成18年6月、東大阪市の竹田博一氏からメールが届き、暗峠の北の天照山（高見峰の道場、米相場の旗振り場跡）を調査したという。竹田氏はHP「竹田雑学研究所」（旧名「竹田科学研究所」）を運営している。

竹田氏が、暗峠付近の歴史に詳しい嶺本さん（男性、70代）に聞いた話によると「天照山は昔、のろしを上げた場所であり、頂上に石がある。昔は大阪と奈良を見通せたが、燃料にプロパンガスを使うようになってからは木を切らなくなったため、木が茂り放題になっている。旗振り通信のことは知らない、聞いたこともない」とのことだった。慈光寺の住人（若い女性）も旗振り通信のことは全くご存じなく、もちろん望遠鏡もないという。

現在では、天照山が旗振り場であったことを語り継ぐ人は、慈光寺のある髪切の里には一人もいないようである。樋口清之『こめと日本人』（家の光協会、昭和53年）で述べられている「生駒山に残る長さ2㍍の望遠鏡」（本誌62号参照）の行方は不明のままである。

竹田氏は近くの府民の森に「旗立山」という小山があるのを見つけたが、「天照山」と併せて、その由来を知りたいという問い合せのメールであった。

『東大阪市の歴史と文化財2』（東大阪市教育委員会、平成2年3月）（1・2合冊号、平成4年3月）の101頁には、次のような記事があり、その由来がわかる。

「旗立山　府民の森のぼくらの広場からは、河内～大和が一望できます。広場から尾根道を西へ下ると丸い山丘があり、ここは旗立山と呼ばれ、南北朝の戦いの頃の見張り所であったことも考えられます。」

天照山の山頂

したがって、旗立山は、米相場の旗振りとは無関係と考えるのが妥当であろう。

一方、旗振り場であった「天照山」の由来は何であろうか。インターネットで検索してみると、「天照山」は地名であったり、お寺の山号であったりして、結構、各地にあることがわかる。神奈川県足柄下郡湯河原町宮上の天照山神社は昭和6年建立だが、祭神は天照大神である。各地の天照山が天照大神を祀ったことに由来することは言うまでもないことであろう。

本誌61号で紹介したように、生駒山系には旗振り場が五ヶ所あることが判明している。五ヶ所とは、天照山、十三峠、ソバフリ山（平群町久安寺）、高安山、ソバフリ山（三郷町南畑）である。生駒山系のハイキングコースはかつてよく歩いたものだが、十三峠と高安山を除く三ヶ所の旗振り場の現地調査はまだ実施したことがなかったので、竹田氏が調査したという天照山を含めて、五ヶ所すべてを踏査してみることにした。

平成19年5月3日、近鉄生駒ケーブルで、生駒山上駅から「スカイランドいこま」の東側の舗装路を南下して縦走路の山道に入る。信貴生駒スカイラインを横切って山上展望台からまっすぐくだると、慈光寺への下り道を右に分ける地点に出る。そのすぐ先の右手に登り道があり、鉄塔から尾根道（府県境）を忠実にたどると、天照山（標高510㍍）に着く。山頂には竹田氏の報告のように散石が見ら

ソバフリ山（久安寺）の航空保安施設

ソバフリ山（南畑）の山頂

れるが、展望は全く開けない。「サ、キ」と刻んだ標石や土塁が見られる。散石群は奈良朝時代の高見烽の遺構と推定されている。江戸・明治時代に旗振り場であったことをうかがわせるものは山頂には何も残されていないが、土塁の上で旗振りが行われたことだろう。山頂から南への道は竹が密生しているので、元の道を引き返す。

暗峠に出て、生駒縦走歩道をたどる。鳴川峠から展望台、ベンチのある場所、鐘の鳴る展望台を経て、十三峠に着く。旗振り地点は、十三峠か十三塚か不明だが、どちらであっても中継は可能であったことだろう。ここから、堂島、三輪米市場、天王山、小塩山、神於山、ボンデン山などと旗振り中継したという。

十三峠からスカイラインを離れて、途中の分岐で右へくだると再びスカイラインのそばに出て、正面に国土交通省大阪航空局の航空保安施設が見えてくる。この施設のある山がソバフリ山（平群町久安寺の相場振り山）である。試掘調査が行われて、江戸後期の食器・鍋が発見されており、その頃に利用された旗振り中継所であったものと考えられている。建設前の昭和52年の現地調査によれば、「山頂で土塁らしき土盛りが一カ所」あったという（『夢ふくらむ幻の高安城（第六集）』高安城を探る会編集発行、昭和57年、44頁）。

ソバフリ山をあとにして、一元の宮の看板のところでスカイラインをくぐり、宗教法人の施設を右に見て、分岐で右に上がると小さな峠で、高安山の山頂を示す目印によって右によじのぼると山頂三角点である。展望は開けないが、ここが古代高安烽の跡地であり、大正時代の旗振り場であった。大正3年当時の目撃談によれば、頂上には櫓が組まれ、一人は双眼鏡を持ち、もう一人は旗振りをして、丹波市や大和高田方面に送信していたという。

昭和53年4月、平群町久安寺の亀井市蔵氏（高安山の三角点の山の元の所有者）への聞き取りによれば、「小学生ごろ（老人は明治三十一年生まれ）に四年間程、相場の旗を振っていたことは記憶にある」という（『夢ふくらむ幻の高安城（第六集）』67頁）。高安山での旗振りは、明治40年頃にも行われていたことがわかる。

三角点から戻り、気象レーダー観測所の脇の高安城跡の石碑を見て、近鉄西信貴ケーブルの高安山駅に着く。

高安山駅からソバフリ山（三郷町南畑）に向かう。スカイラインは歩行禁止だが、ソバフリ山に至るには通らざるを得ないので、車に細心の注意を払いながら南下して左折する。右カーブの地点でまっすぐショートカットして次の左カーブ地点で右手の巡視路に入る。すぐ右折してササをくぐりながら、一番高い地点を目指す。ソバフリ山の山頂は樹木が茂っていて展望は開けていない。旗振りが行われた歴史を物語るものは何も残されていない。

今回の探訪を振り返ってみて、狼煙（烽火）や旗振りといった遠距離通信における重要な遺跡が現地では明示されることもなく、忘却されていることがよくわかる。山頂のプレートは見苦しいので、ないほうがよいと思うが、一抹の寂しさを感じるのは私だけだろうか。

日本地名学研究所編『みちのく縄文地名発掘　雄勝―秋田県雄勝町文化調査報告書』（池田末則監修、五月書房、平成10年）には、「十三峠の旗振り」（135頁）、「旗振り山」（137頁）、「相場振り山・相場とり山」（146～7頁）の記事がある。

沢井浩三『八尾の史跡　第1集』（八尾市・八尾市郷土文化研究会、昭和41年）では、高安山における手旗通信にふれている（15頁）。この小冊子は第5集までを一冊にまとめて、昭和43年に『八尾の史跡』として発行されている。後には、本誌61号で紹介したように、数回にわたって改訂版が出ている。

【町家・まちなか・萬塾】

大津の町家を考える会編『大津百町物語　―暮らしの昔と今を歩く―』（サンライズ出版、平成11年）のまち歩きこぼれ話「相場山」は本誌79号で紹介したことがあるが、坂本町（中央2丁目3、滋賀銀行南東）に残る米会所の石畳の写真が掲載されている。

筆者のHPを見つけた青山菖子さん（大津の町家を考える会）の依頼を受けて、「町家・まちなか・萬塾」（平成18～19年、全8回）の第4回講座として、「旗振り通信ものがたり」の話を2時間ほど行なった（平成18年11月25日）。参加者には熱心な会員が多く、鋭い質問もあって、関心がどのような方面にあるのかを知るうえで、貴重な体験となった。

旗振り山の調査のきっかけ、各地の旗振り場の遺跡地の情報、米相場の情報が間違って伝わった事例、旗振り通信員の給料（不明）、旗振りで用いた時計の種類、旗振り通信の開始と終了の時刻と通信回数（兵庫県の加東米穀取引所では、午前9時頃から午後4時頃まで10回程度）などに関心が寄せられた。

【旗振り通信で用いた時計の種類】

萬塾で出た「旗振り通信において、どのような時計が用いられたのか」という質問は、興味深い。旗振り通信の実施に当たって、大切な備品の一つが時計であったことは、本誌77号で紹介した『白子郷土史後編』（昭和35年）に記されている。筆者の知る限りでは、他の文献には時計についてのコメントは全く見当たらない。ただし、相場の通信時刻はあらかじめ決めておかないと仕事にならないことは容易にわかることである。通信に用いた時計の種類は記録に残されていないので、ここでは当時、普及していた一般的な時計の種類から推測してみたい。

江戸時代には、時刻は日時計をもとにして、寺で鳴らす鐘で知らせており、当時の不定時法に合わせた和時計が作られていた（有澤隆『図説　時計の歴史』河出書房新社、平成18年）。昼夜および季節によって一刻が変化する日本独特の不定時法が使われていたので、機械式時計は輸入されてはいたが、実際には使えなかったのである。当時、和時計には、大型のものだけでなく、携帯用小型時計や置時計もあり、旗振り通信では、携帯用小型時計

ソバフリ山（南畑）の山頂

れるが、展望は全く開けない。「サ、キ」と刻んだ標石や土塁が見られる。散石群は奈良朝時代の高見烽の遺構と推定されている。江戸・明治時代に旗振り場であったことをうかがわせるものは山頂には何も残されていないが、土塁の上で旗振りが行われたことだろう。山頂から南への道は竹が密生しているので、元の道を引き返す。

暗峠に出て、生駒縦走歩道をたどる。鳴川峠から展望台、ベンチのある場所、鐘の鳴る展望台を経て、十三峠に着く。旗振り地点は、十三峠か十三塚か不明だが、どちらであっても中継は可能であったことだろう。ここから、堂島、三輪米市場、天王山、小塩山、神於山、ボンデン山などと旗振り中継したという。

十三峠からスカイラインを離れて、途中の分岐で右へくだると再びスカイラインのそばに出て、正面に国土交通省大阪航空局の航空保安施設が見えてくる。この施設のある山がソバフリ山（平群町久安寺の相場振り山）である。試掘調査が行われて、江戸後期の食器・鍋が発見されており、その頃に利用された旗振り中継所であったものと考えられている。建設前の昭和52年の現地調査によれば、「山頂で土塁らしき土盛りが一カ所」あったという（『夢ふくらむ幻の高安城（第六集）』高安城を探る会編集発行、昭和57年、44頁）。

ソバフリ山をあとにして、一元の宮の看板のところでスカイラインをくぐり、宗教法人の施設を右に見て、分岐で右に上がると小さな峠で、高安山の山頂を示す目印によって右によじのぼると山頂三角点である。展望は開けないが、ここが古代高安烽の跡地であり、大正時代の旗振り場であった。大正3年当時の目撃談によれば、頂上には櫓が組まれ、一人は双眼鏡を持ち、もう一人は旗振りをして、丹波市や大和高田方面に送信していたという。

昭和53年4月、平群町久安寺の亀井市蔵氏（高安山の三角点の山の元の所有者）への聞き取りによれば、「小学生ころ（老人は明治三十一年生まれ）に四年間程、相場の旗を振っていたことは記憶にある」という（『夢ふくらむ幻の高安城（第六集）』67頁）。高安山での旗振りは、明治40年頃にも行われていたことがわかる。

三角点から戻り、気象レーダー観測所の脇の高安城跡の石碑を見て、近鉄西信貴ケーブルの高安山駅に着く。

高安山駅からソバフリ山（三郷町南畑）に向かう。スカイラインは歩行禁止だが、ソバフリ山に至るには通らざるを得ないので、車に細心の注意を払いながら南下して左折する。右カーブの地点でまっすぐショートカットして次の左カーブ地点で右手の巡視路に入る。すぐ右折してササをくぐりながら、一番高い地点を目指

す。ソバフリ山の山頂は樹木が茂っていて展望は開けていない。旗振りが行われた歴史を物語るものは何も残されていない。

今回の探訪を振り返ってみて、狼煙（烽火）や旗振りといった遠距離通信における重要な遺跡が現地では明示されることもなく、忘却されていることがよくわかる。山頂のプレートは見苦しいので、ないほうがよいと思うが、一抹の寂しさを感じるのは私だけだろうか。

日本地名学研究所編『みちのく縄文地名発掘　雄勝―秋田県雄勝町文化調査報告書』（池田末則監修、五月書房、平成10年）には、「十三峠の旗振り」（135頁）、「旗振り山」（137頁）、「相場振り山・相場とり山」（146～7頁）の記事がある。

沢井浩三『八尾の史跡　第1集』（八尾市・八尾市郷土文化研究会、昭和41年）では、高安山における手旗通信にふれている（15頁）。この小冊子は第5集までを一冊にまとめて、昭和43年に『八尾の史跡』として発行されている。後には、本誌61号で紹介したように、数回にわたって改訂版が出ている。

【町家・まちなか・萬塾】

大津の町家を考える会編『大津百町物語　―暮らしの昔と今を歩く―』（サンライズ出版、平成11年）のまち歩きこぼれ話「相場山」は本誌79号で紹介したことがあるが、坂本町（中央2丁目3、滋賀銀行南東）に残る米会所の石畳の写真が掲載されている。

筆者のHPを見つけた青山萱子（まのこ）さん（大津の町家を考える会）の依頼を受けて、「町家・まちなか・萬塾」（平成18～19年、全8回）の第4回講座として、「旗振り通信ものがたり」の話を2時間ほど行なった（平成18年11月25日）。参加者には熱心な会員が多く、鋭い質問もあって、関心がどのような方面にあるのかを知るうえで、貴重な体験となった。

旗振り山の調査のきっかけ、各地の旗振り場の遺跡地の情報、米相場の情報が間違って伝わった事例、旗振り通信員の給料（不明）、旗振りで用いた時計の種類、旗振り通信の開始と終了の時刻と通信回数（兵庫県の加東米穀取引所では、午前9時頃から午後4時頃まで10回程度）などに関心が寄せられた。

【旗振り通信で用いた時計の種類】

萬塾で出た「旗振り通信において、どのような時計が用いられたのか」という質問は、興味深い。旗振り通信の実施に当たって、大切な備品の一つが時計であったことは、本誌77号で紹介した『白子郷土史後編』（昭和35年）に記されている。筆者の知る限りでは、他の文献には時計についてのコメントは全く見当たらない。ただし、相場の通信時刻はあらかじめ決めておかないと仕事にならないことは容易にわかることである。通信に用いた時計の種類は記録に残されていないので、ここでは当時、普及していた一般的な時計の種類から推測してみたい。

江戸時代には、時刻は日時計をもとにして、寺で鳴らす鐘で知らせており、当時の不定時法に合わせた和時計が作られていた（有澤隆『図説　時計の歴史』河出書房新社、平成18年）。昼夜および季節によって一刻が変化する日本独特の不定時法が使われていたので、機械式時計は輸入されてはいたが、実際には使えなかったのである。当時、和時計には、大型のものだけでなく、携帯用小型時計や置時計もあり、旗振り通信では、携帯用小型時計

を用いたものと考えられる。

明治6年から新暦が導入され、定時法に合わせて洋式時計が輸入されるようになった。明治時代、旗振り通信に用いられたのは、当時、広く普及していた懐中時計と考えられる。さらに明治35年頃からは腕時計が普及するようになる（阿部猛『起源の日本史　近現代篇』同成社、平成19年）。旗振り通信でも腕時計に変わっていったことであろう。日本で腕時計が国産化されるのは大正2年のことであった（永瀬唯『腕時計の誕生』廣済堂出版、平成13年）。

【『旗振り山』を紹介している文献】

○日本電信電話株式会社（NTT持株会社）のPR誌「365度」第6号（平成18年5月）は「特集　商いのカタチ　享保十五年のインベストメント」で「新幹線よりも速かった旗振り通信による米価情報」の記事を載せ、筆者の『旗振り山』（ナカニシヤ出版、平成18年）の本を、江戸期から明治期の投資家を支えた「電話開通以前の高速情報通信網」の様子を生き生きと伝えるものとして紹介している。「365度」は平成17年7月創刊（年6回発行、隔月刊、無償配布）。

○神戸市消防局監修『雪』664号（平成18年10月号）において、「神戸の本棚・今月オススメの一冊」として、児玉紫乃氏（神戸市立中央図書館）によって紹介されている。

○『岡山県の山』（山と渓谷社、平成19年）では、天狗山の項目に本の紹介がある。

【『旗振り山』の評価について】

インターネットにおいて、次のような視点から『旗振り山』についての評価をいただいている。

・旗振り通信の詳細を初めて集大成した。
・旗振り通信ルートの解明に挑んだ意欲作。
・現在も残る遺跡を紹介していて役立つ。
・地図や写真が豊富に取り入れられている。
・通信の道具（ハードウェア）、送信ミスと盗み見の防止（ソフトウェア）が興味深い。
・「視覚通信」
・「今も昔も情報はカネなり」
・旗振り通信社は経済通信社の原点。
・新幹線より速い高速情報通信網。
・江戸・明治期のインターネット。
・広義の光通信、光ネットワーク。
・パケット通信（小さな単位に分けて送る通信方法）の元祖である。

位置づけに関連する文献としては、次のようなものがインターネットで閲覧できる。後者は、パケット通信・光通信および筆者の本を紹介している。

・片山正彦「通信社の役割　―知られざる報道メディアの中枢―」（メディアと文化、第2号、平成18年3月、93～130頁）
・石原聰「光ネットワーク―家庭にまで届いた光ファイバ（FTTH）」（テクノカレント、№427、石井威望編集、平成18年10月1日）

（つづく）

（平成19年3月23日成稿）
（平成19年5月15日修正）

【旗振り通信の位置づけと関連文献】

旗振り通信の位置づけとしては、次のような表現がインターネットで見られる。

高山病対策&高所登山に!

低酸素室

「低酸素室」とは、人工的に高所環境をつくり、高度障害に耐性することを目的とする装置です。設定高度も3000m～4000mに調整することができます。初めて国内・海外の高峰を目指している方、山岳会やグループでの高所登山を計画されている方もお気軽にお問い合わせください！

高所ツアーも経験豊富なアミューズトラベルにお任せ下さい！

アフリカ大陸最高峰キリマンジャロ(5895m)登頂
チベットからネパールへ　エベレストBC(5150m)
ネパール　ゴーキョピーク(5360m)トレッキング
ネパール　カラパタール(5545m)トレッキング
ネパール　パラクピーク登頂(4618m)と世界最高所山岳ホテル
ペルー　インカ道(4200m)トレッキング
パプアニューギニア最高峰　ウィルヘルム山(4509m)登頂
マレーシア最高峰　キナバル山(4095m)登頂　等々

まずカタログをご請求下さい！

見ごたえたっぷり国内・海外の山旅と自然観察の旅、計500コース以上を満載した総合カタログ。ハイキングから海外の高峰登頂ツアーまで幅広い商品を揃えています。見るだけで楽しいオールカラー152ページのボリューム。そして、これから登山やハイキングを始める方、初心者の方のための、山歩き教室カタログもあります。送料・本体ともに無料でお届けしております。
どうぞお気軽にご請求ください。

お電話 おはがき FAX・HP にて

送料・本体共に無料です。お気軽にご請求下さい！

大好きな自然の中で働いてみませんか！

山岳添乗員・山岳ガイド大募集

山旅専門旅行社アミューズトラベルでは夏山の繁忙期に向けてツアーのお手伝いをしてくれる方を募集しています。自分のペースで、大好きな山の中で働いてみませんか?ご興味をお持ちの方は一度お問合せください。

アミューズトラベル株式会社
国土交通大臣登録旅行業第1366号
日本旅行業協会正会員　ボンド保証会員
〒530－0001 大阪市北区梅田1－11－4 大阪駅前第4ビル7階
☎06－6456－3366
ホームページ http://www.amuse-travel.co.jp
E-mail:amtosa@amuse-travel.co.jp
FAX 06-6456-3377

連載

三角点を訪ねて ㊽

やぶの巡視路を登る

大白木山へ

奥美濃

礒部 純

この年、金谷さんの五回目の例会で登る山は蠟帽子崩だった。この山の概要は、新ハイ誌第51号・第64号にあるように、登山口に取り付くには根尾西谷川を渡らなくてはならない。この週の始めに日本列島を襲った台風14号は各地に雨の災害をもたらし、増水した谷を渡ることができるか危ぶまれていたが、例会前日に、稲沢の彼女がわざわざ谷の様子を見に行ってくれ、「西谷川が増水していて、渡るのは危険」とリーダーへ連絡してくれた。登る山を急に変更しなくてはならなくなった。

集合場所から近い刈安山・ドウの天井・大白木山と候補に上がった。刈安山は、温見峠への道が朝9時から午前中は通行止めだとわかり、大白木山は新ハイでも例会で登ったことがあることから、舗装路歩きが長くなるが、誰も登ったことのないドウの天井に決め、その旨、参加者に連絡した。連絡できなかった方には、現地で承諾を得ることにした。

JR山科駅6時22分着の電車でやってきた6人を乗せて、リーダーと私の二台の車は名神を関ヶ原インターへ走る。いつもの農道の近道を通り、池田温泉、谷汲山華厳寺、集合場所の樽見駅へ着いたのは8時25分。我々の到着で参加者全員が揃う。

参加者は1人を除いていずれも顔を知っている人ばかりで19名。久しぶりに鈴鹿の彼女、彼女の天敵である一宮の彼、いつも地下足袋で歩くあの彼女の顔も見える。まずは、谷増水のため危険なので、行き先をドウの天井に変更する旨伝え、了解を得た。六台の車に分乗して上大須ダムへと向かい、ダム手前の中部電力専用道路ゲート前に駐車する。

ドウの天井は山懐が深く、容易に登る

大白木山三角点

ことのできない山だった。上大須方面から登る場合には、上大須ダムの北の東河内谷を遡り、谷分岐から中央尾根を登って主稜線へ。そこから明神山を経てドウの天井へ登り返すのがクラシックルートだったようだ。最近、この山の南に川浦ダム湖が出来てから、山頂近くまでのびている中部電力の建設道路を利用すれば、簡単にドウの天井へ登れると聞き、このルートを登ることにしたのである。現にこの5月、会員の津島市の夫妻がこのルートを登っている。

中電の建設道路は、有刺鉄線のゲートで塞がれており、このゲート横から柵を乗り越えて道路内へ入る。ここから山頂近くまでは舗装道路を歩く。スニーカー、山靴を背に草履履きの人までいる。ルンルン気分で道を登っていると、道が東に廻り込む先で傾斜の工事をしていた責任者に止められた。「何とか通して欲しい」と言ったが、「中部電力の方に聞いてくれ」と言われ、呼んでもらった中部電力の人に「道路を歩かせて欲しい」とお願いするが、「許可はできない」の一点張り。結局、ここから泣く泣く引き返さざるを得なかった。稲沢の彼女は、「中電の人は融通がきかないので、絶対通してくれない。見つかったのが不幸」と言う。この舗装路は、原則的に関係者以外進入禁止。これまでこの道を使った人達は、禁を犯して見つからないように登ったもので、ドウの天井への一般ルートとは言えないようである。

時間はすでに10時前。予定になかった近くの高屋山に変更して越田土へくだり、ここで車を四台にまとめて、越波へ向かう林道を走るが、折越峠まで来ると先頭を走っていたリーダーの車が停まっている。どうやら、時間も時間だし、道の無いやぶの登山となる高屋山を変更し、始めの候補にあった大白木山へ登ることに決めたようだった。この山へは、参加者のほとんどの人が登っていると思っていたが、聞くと、登ったことのあるのは5人だけだった。

折越峠から50㍍程南にくだった所から斜面に取り付く。道は巡視路らしく手摺があり、階段まで切られている。舗装路歩きの長いドウの天井へ登るのだと思っていた膳所の彼は、山靴を持ってきておらずスニーカー履きでの登りだ。すぐ横の斜面にはオヤマボクチが顔を覗かせており、尾根にのると、足元には赤紫色をしたアキギリの花が咲いている。ゆるく登って行くと標高816㍍の比較的広いピークで、東は杉林だが、西は雑木林が広がっている。足元にはクルマバハグマやモミジハグマがあちこちに咲き始めており、セリバオウレンの葉と思われるセリ状の葉が一面に敷きつめられている。ゆるくくだった鞍部から急登が始まる。巡視路歩きの初心者向けの山と書いてあるガイドブックもあるが、なかなかどうして、この急勾配の登りには手を焼かされる。道の両側はやぶでイバラが多く、

大白木山付近略図

木をよく見てつかまないと、イバラが刺さってしまう。ハアハア言いながら急斜面の尾根を登り、西の尾根が合流する地点まで来ると、やっとゆるくなる。そこには太い檜の大木が立っていて、その大檜にリョウブの木が絡みつくように共生しているのが珍しい。そこから先へ進むと、両側の林には太いリョウブが目立ち、大きな実を付けたシロモジも見られた。

道はしっかりしているが、道にササや木々が覆いかぶさり、それを払うように進まなくてはならない。しばらくやぶと格闘して登って行くと、手前のピークにある№29の送電線鉄塔へ出た。送電線は越田土から大白木山山頂の方向へとのびているが、私の持ってきた地形図を見ても送電線は記されていない。おそらく、最近に設置されたのであろう。日は陰っていたが蒸し暑く、汗は止まることを知らない。これから登る山頂の方を見ると、平坦に見える大白木山の頂はガスのなかに頭を突っ込み、山頂に立つ反射板が、ボンヤリと見えているだけだった。

このピークから方向を西南へとり、標高差60㍍程くだる。足元のやぶの間にアキチョウジが密やかに咲いている。鞍部から高原状の尾根を歩くと、ミズヒキやキンミズヒキが点々と咲いている。勾配が急になってくると、道は右手へ斜面を切るようにのび、道脇には名の知らぬ小さな花が一面に咲いている。№27の送電線鉄塔まで来ると、そこから急斜面の階段をまっすぐ上に登って行く。始めの予想では、道はゆるい尾根から南へ登り、標高点1123㍍を踏んで大白木山へ向かうのかと思っていたが、どうやらこのピークは通らないようだ。

階段があっても直登は厳しい。フウフウ言って尾根にのったが、この辺りはガスのなかに入っており、尾根の南に林は無いのだが展望はきかない。わずかに左手下の尾根の状態が見えるだけ。この尾根道もやぶとササが両側から覆いかぶさり、それをかき分け、足元にある段や木を探りながら登って行く。10分も登ると林は切れ、平坦な山頂へ登り着いた。

三角点は小さな山頂広場に立っている。点名「黒須」で、2等三角点である。標石はしっかりと真南を向いている。標高はガイドブックに「1234・4m」と書いてあるが、点の記を見ると「1234・46m」となっており、地形図に表示している「1234・5m」の表示が妥当である。三角点の北側には大きな反射板が二基設置されており、その周りは広場になっている。北から東へかけては開けていたが、あいにくのガス。リーダーによれば、「天気が良ければ、日永岳・ドウの天井・天神山・左門岳、そしてピラミダルな形をした屏風岳が手の届きそうな所に見える」と言うが、この日はガスに閉ざされ全く何も見えない。ただただ、その山容を白いガスのなかに想像するしかなかった。

広場に腰を下ろして昼食とする。この

観光バスなら 確実第一の
太陽観光開発㈱へ!!

・小型（20人・24人）
・中型（28人乗り）
・中2階（45人乗り）
・大型（55人・60人）
いずれもサロンカーからデラックスまで
スキーバスもあります
〒578-0971 東大阪市鴻池本町1-20 オカダビル4F
電話 06(6745) 3911・FAX 06(6745) 3983
夜間・電話 06(6242) 2371・FAX 06(6242) 2372

山行はサブなので、アルコールは飲むつもりもなく持って来なかったが、瀬田の彼の横に坐ったのが運のツキ、つい一杯が二杯と手が出てしまう。そのうえ、総菜が次から次にと廻ってきて、自分の持ってきた物を食べる暇もないほどだった。食べている間中、顔の周りを蚊か蠅?が飛び交い、それを払うのにも気を遣う。

ところで、最近は、鈴鹿ばかりでなく、京都北山や比良山にもヒルが見られるようになってきている。まさか美濃の山にはいないだろうと、これまで信じていたが、昼食時、「足周りを見るとヒルを見つけた」と言っている人がいたのでビックリ。それだけ、ヒルを運ぶ動物が増えてきていると言えるのだろう。

13時15分、下山にかかる。山頂からくだる尾根で、鈴鹿の彼女に教えてもらったハシバミの実を採りながらくだる。ハシバミの実は、知る人ぞ知る日本のヘーゼル・ナッツと呼ばれている実で、歯で割って食べるとうまいとのこと。早速、それを味わいたいと思ったが、以前、山でチーズを食べようとして、義歯を欠いてしまったことを思い出し、食べるのは家に帰ってからと思い、実は採るだけ。

いったんくだって平坦尾根を歩き、№29の鉄塔まで登り返すと、やっとガスが薄れ、山頂の反射板を見ることができた。ここから見ると、平坦な山頂が横に広がっていて、反射板が無ければ、どこが山頂かわからないほどだ。さらに大檜までくだると、ガスから完全に抜け出して、展望が広がる。東に、頭をガスのなかに突っ込んだドウの天井が横たわっているが、山腹を横切る林道が痛々しい。あんなに山頂近くまで林道が走っているのでは、尾根歩きはわずかで、ほとんど舗装路歩きをしなくてはならない。めったに登れない三角点はもったいなかったが、今更ながら、大白木山へ登って良かったと思った。一方、北にはガスのなかに薄っすらと、三角形をした屏風岳が浮かんでいた。

登りは足を上げることに必死だったこともあり、それほど思わなかったが、いざくだるとなると斜面は急過ぎるほどの急。体を支えようと道脇の木をつかむと、それがイバラで思わず離して転んだり、木に足を滑らせ尻を打ったり、三回も転んでしまった。それでも余裕はあったようで、登りに見なかったユキザサの真っ赤な実、ツルリンドウの花、イチヤクソウの実も見ることができた。最後に道路に下りる前の細い尾根には、登る時には気がつかなかったが、ツクバネの実が羽子つきの羽のように、枝にちりばめられていた。

折越峠へ15時10分に戻る。そこから樽見駅へ走り、解散となった。帰路、京都方面組8名と鈴鹿の彼女、農中の彼は、谷汲「満願の湯」で汗を流す。

今回の例会は、案内の蠅帽子嶺に登ることができず、行く先変更を余儀なくされた。ドウの天井では進入を断られ、高屋山は時間不足と二転三転したが、最終的には大白木山へ登れた。大白木山は、案内書にある初心者向けの山とは名ばかりで、道はあってもやぶ山と呼んでもよい山と言える。この日は、ガスで周囲の山々を見ることができなかった。展望があればと思い、残念でならなかった。

（平成17年9月10日歩く）

Aコースタイム▼
折越峠（1時間）№29送電線鉄塔（1時間）大白木山（55分）№29送電線鉄塔（55分）折越峠
△地形図▽2万5千＝下大須

文学歴史探訪ハイク ⑯

堺に与謝野晶子を訪ねて

松永恵一

鳳晶子

ふるさとの潮の遠音のわが胸に
　ひびくをおぼゆ初夏の雲

明治・大正・昭和を短歌とともに生き「情熱の歌人」と呼ばれた晶子は、明治十一年（1878）12月7日、堺の和菓子の老舗「駿河屋」の鳳宗七・津祢の三女に生まれた。名は「志よう」。

幼い頃から漢学塾に通い、堺女学校に進む。卒業後は家業を手伝いながら『源氏物語』などの古典を繙いた。「堺敷島会」という歌会に入ったのは18歳の頃。会で弟籌三郎の友人、覚応寺の僧・河野鉄南を知る。

やは肌のあつき血潮に触れもみで
　さびしからずや道を説く君

鉄南は新進気鋭の詩人与謝野鉄幹と幼なじみだった。明治三三年（1900）8月4日、鉄南に連れられ新詩社の支部設立、「明星」の宣伝拡大運動に来阪した鉄幹と会う。山川登美子とともに「明星」に投稿するように勧められる。晶子22歳。旧制第三高等学校寮歌としても有名な「人を恋ふる歌」は鉄幹の代表作。

妻をめとらば才たけて
　みめ美わしく情ある
友をえらばば書を読みて
　六分の侠気四分の熱

11月、鉄幹、登美子、晶子の3人は京都で落ち合い永観堂に遊ぶ。粟田山の辻野旅館に一泊。鉄幹は妻と離別すると告げ、登美子は心なくも嫁ぐことを話す。

狂ひの子われに焔の翅かろき
　百三十里あわただしの旅

明治三四年（1901）6月、堺を出奔、妻子のある与謝野鉄幹のもとに走る。8月、歌集『みだれ髪』を鳳晶子の名で刊行。表紙はハート型のなかに乱れ髪にくるまれた女の顔を描き、その中央に矢が刺さって花がこぼれている。

与謝野晶子像（南海本線・堺駅前）

山川登美子

髪ながき少女とうまれしろ百合に
　額は伏せつつ君をこそ思へ

若狭・小浜の士族の娘に生まれ「白百合の君」と称せられ、「明星」の歌人として与謝野晶子と名声を分かった山川登美子は、明治二八年（1895）、17歳で大阪の梅花女学校に編入学した。

浪華津の梅の園生におひ立ちて
　かをり初めしは師の君の恩

明治三三年4月、与謝野鉄幹が創立した東京新詩社の社友となり、機関誌「明星」を舞台に、鳳晶子と歌才を競う。翌年、一族の山下駐七郎と結婚。

それとなく紅き花みな友にゆづり
　そむきて泣きて忘れ草つむ

明治三五年12月、夫・駐七郎は病死。明治三七年4月、日本女子大学に入学するが、夫から伝染した肺結核が進行し中退、療養生活を送る。

我いきを芙蓉の風にたとへますな
　十三絃を一いきに切る

明治四一年1月、父貞蔵死去。翌年4月15日永眠。満29歳9ヶ月。

父君に召されていなむとこしへの
　春あたゝかき蓬莱のしま　（辞世）

浜寺公園

白砂青松の浜寺公園は、我が国で初めての公園の指定を受けた。明治六年（1873）、時の内務卿大久保利通は歴史に名高い松林の荒廃を惜んで詠んだ。

音に聞く高師濱のはま松も
　世のあだ波はのがれざりけり

浜寺公園駅は明治三〇年（1897）に浜寺駅として開業。駅舎は明治四〇年（1907）に建てられた二代目。私鉄最古の駅は、東京駅など数々の近代建築を手掛けた辰野金吾・片岡安博士の設計。国の登録有形文化財。レトロで瀟洒な香が漂う。ホームに降り立った瞬間、時計の針が逆回転した。

晶子は明治三三年（1900）8月6日、鉄幹を歓迎して開いた「浜寺での歌会」に参加した。山川登美子もいた。

夕潮に磯の松が根あともなし
　いづこぞ君とふたり立ちぬる　鉄幹

わが恋をみちびく星とゆびさして
　君ささやけし浜寺の夕

8月15日、鉄幹は岡山からの帰京途中晶子を呼び出し、浜寺で逢う。

松かげにまたも相見る君とわれ
　ゑにしの神をにくしとおぼすな

君死にたまふこと勿れ

堺女学校、現在の大阪府立泉陽高等学校が晶子の出身校。校舎の裏庭に、「君死にたまふこと勿れ」の詩碑がある。

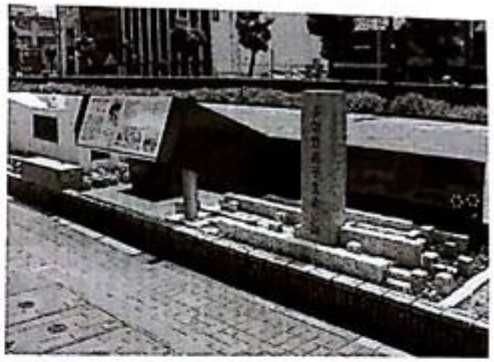
あゝおとうとよ、君を泣く
君死にたまふことなかれ
末に生まれし君なれば
親のなさけはまさりしも
親は刃をにぎらせて
人を殺せとをしへしや
人を殺して死ねよとて
二十四までをそだてしや　（略）

明治三七年（1904）、日露戦争の旅順攻略戦に従軍中の弟の身を案じて作られた長詩は、国粋主義者大町桂月の批判にさらされる。晶子はひるむことなく「歌はまことの心を歌うもの」と一蹴した。

第二次世界大戦には四男豆が海軍大尉として戦いに加わっていた。

水軍の大尉となりて我が四郎
　み軍にゆくたけく戦へ
子が船の黒潮越えて戦はん
　日も甲斐なしや病ひする母

存亡を賭けた国の戦いに赴く若者たちへの鼓舞と共感、子の無事をひたすら願う母の心。晶子は自分に忠実に生きた。



与謝野晶子生家跡・歌碑

コース概観

摂津国、和泉国、河内国の三国の境。古代から交易で栄え、ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスは「東洋のベニス」と表現した。堺に生まれ育った与謝野晶子は、生涯に五万首にも達する短歌を残した。二十四冊の歌集、十五冊の評論集と小説、詩集、童謡。そして五男六女11人の子どもを育てた。晶子の故郷堺、足跡をたどり歩いてみた。

南海電鉄高野線の堺東駅下車。駅前南側の高層ビルが市役所。高層館三階の市政情報センターで堺観光地図や「与謝野晶子文学碑めぐり」などを手に入れる。展望ロビーのある最上階二十一階に上がる。市街地を眼下に六甲山、生駒山、金剛山など360度のマルチな展望を楽しむことができる。東南には仁徳天皇陵が緑に包まれている。夜9時まで無休無料で開放されていて夜景が楽しめる。喫茶コーナーの一角には赤い毛織を敷いた席がある。堺は千利休の出身地。

市役所の東を南北に走る道（一条通）を南下し、東西に走る大阪中央環状線（フェニックス通り）との交差点を西にとり、市民会館に向かう。晶子の歌碑が建つ。歌碑の上部には晶子の顔のレリーフ。

母として女人の身をば裂ける血に
清まらぬ世はあらじとぞ思ふ

植え込みでは貿易商として大活躍したルソン助左衛門の像が手を振っている。

中央分離帯にフェニックスの大木が並木をなしている、フェニックス通りは堺のメインストリート。歩いていても気持ちがいい。日本の道100選にも選ばれている。堺は応永の乱や大阪夏の陣、さらには昭和二十年の空襲など、度々火災で焼かれている。その火炎の中から、新たな生命を得て生まれ出る不死鳥のように、焦土から力強く起ち上がることを念じて、昭和三〇年（1955）火の鳥の樹、フェニックスが植えられた。

西へしばらく歩く。大阪に残った唯一の路面電車（阪堺電気軌道・阪堺線）との交差点が宿院。路面電車の走る大道筋は紀州街道。堺の銘菓「けし餅」の小島屋。けしの実の歯ごたえが三百年以上の歴史を伝える。二階の喫茶で大道筋の真ん中をのんびり走る路面電車を眺めながら、ゆったりとお茶を味わえる。

線路に沿って北へ行く。大道筋の西側の甲斐町西1丁の舗道に「与謝野晶子生家の跡」の石柱と横長の白い石の晶子歌碑がある。

海こひし潮の遠鳴りかぞへつゝ
少女となりし父母の家

堺市博物館所蔵の歌巻「春風抄」より採った自筆を刻字している。中央のアマリリスと百合の花は晶子が好んだ花、碑全体の形は晶子の旧姓鳳より鳳凰が大きく羽を広げている姿を象徴してるという。

「親の家」と題された詩。

目にこそ浮かべ、ふるさとの
堺の街の角の家、
帳場づくゑと、水いろの
電気のほやの輝きと、
店のあちこち積み箱の
かげに居眠る二三人。　（略）

道路を挟んだ向かい側（東側）、三菱東京UFJ銀行堺支店の前に甲斐町の碑。

菜種の香古いさかいひたすらむ
踏ままほしけれ殿馬場の道

チンチン電車の停留所大小路・花田口を見る。花田口を東に入ると大阪府立泉陽高等学校。『おしん』の橋田寿賀子や女優の沢口靖子の母校としても知られる。授業の邪魔にならないように見学したい。

堺・与謝野晶子関係案内図

北側の妙国寺は森鴎外の小説『堺事件』の舞台。「英士割腹跡」の碑が建っている。境内の天然記念物の大蘇鐵は信長が安土城に移した時、夜ごと堺へ帰りたいと泣いたという。北隣の宝珠院に土佐十一烈士の墓がある。

故郷
堺の街の妙国寺
その門前の包丁屋の
淺葱納簾の間から
光る刃物のかなしさか
御寺の庭の塀の内
鳥の尾のよにやはらかな
青い芽をふく蘇鐵をば
立って見上げたかなしさか　（略）

西本願寺堺別院は堺最大の木造建築。「北の御坊」とも呼ばれ、明治の初め頃には堺県庁が置かれていた。晶子の碑は本堂の左手前銀杏の大木の傍にある。

劫初より作りいとなむ殿堂に　われも黄金の釘ひとつ打つ

別院の前の道を北へ進んだ突き当りにある覚応寺は、自分で格子戸を開けて境内に入る。中庭に建てられている歌碑。

その子はたちくしにながるゝくろかみのおごりの春のうつくしきかな

晶子は当寺の住職河野鉄南によって鉄幹にひきあわされた。毎年5月29日（晶子の命日）午後1時30分から「白桜忌」の集いが持たれている。

神明町の停留所から晶子の生家前を走っていた路面電車に乗る。終点浜寺駅前には晶子と鉄幹との恋の出会いの思い出の場所浜寺公園が広がっている。

＜コースタイム＞

堺東駅（5分）堺市役所・二十一階展望ロビー（5分）堺市民会館（10分）与謝野晶子生家跡（10分）泉陽高等学校・妙国寺・西本願寺堺別院・覚応寺（10分）神明町（阪堺線18分）浜寺駅前・浜寺公園

＜地形図＞2万5千＝堺

＜費用＞神明町～浜寺駅前　200円

（問い合わせ先）

堺市政情報センター
☎072（233）1101（内線3945）

覚応寺　☎072（238）6835

〈山のレポート〉
山の地名を歩く㊱

「由良ヶ岳」

西尾　寿一

表題に由良ヶ岳の名を挙げたが、本来は由良川であったかも知れない。なぜなら由良川河口の由良の街が先にあって後から河の名称が発生したとは考えにくいからである。

由良ヶ岳は果たして、先の両者より先か後か、判断が分かれるが、それは丹波の内陸部の開拓が河口より先か後か、の判断とほとんど同義となるからである。

北山クラブの初代会長の故金久昌業氏は出雲族の東進が北山に及んだと言われ、石仏峠がその名残だったと言う。これに対して当然のこと、瀬戸内海から北進した勢力があったわけで、両説は対立する。由良川は京都の北辺を東から西北へ流れる大河であり、古代から多くの民族を養ってきた。この民族がどこからどのルートで来て住みついたのかがわかれば「由良川」の名の由来が見えてくるのではなかろうか。

実は由良・油良の地名は丹波地方に特に多いが、それが海岸・内陸に共に分布することは海と陸との個別に分かれるのではなく、両者に共通する基盤があったことを物語っている。同じ言語圏に属する民族だったとすると、由良川筋の「由良・由里・由利・由油・百合」などは異字同義だったと考えられようが、果たしてどうなのだろうか。

それならユラ・ユリはどんな意味を含んでいるのだろうか。

多くの地名辞典をみると、例によって様々な解釈がなされている。それによると、①揺れる所②砂地③山地の小平地④海岸の砂地⑤風波で砂がゆすりあげられた所⑥山の峡道⑦曲物の容器⑧岬（ユリ）と呼ぶ山間の小平地⑨花のユリなどがあるが、大きく外していないと思う。

言葉の意味は「動く」という風や波の力によって発生した変化形である点は共通している。このうち③と⑧は同じ意味で間接地名であろう。②と④もよく似ていて除外してもよい。⑨は誰も取り上げないが小生独自で共通の意味を感じとったまでで証拠は何もない。①⑤⑥が残るが一見全く異なる意味であるが、小生は強い関係があるとみている。

宮城県の名取市に「閑上」という難解な地名があることをバイク走行中に発見してこれが⑤に近いものだと気づき、それがもとで「由良・由利」を調べてみる気になった。

ユリ・ユラは全国的に海岸線に沿って分布している。海・港に名を残す由良は紀州・淡路・丹波などが代表格だが港でなくても、鳥取の由良宿、宇和島の由良崎、五島の百合崎があり、山形の由良など平地でなく海岸の厳しい地形で絶えず波の浸食を受ける所で、不安定で動きの厳しい土地に共通している。

これらに対して、内陸部のユリ・ユラ地名は地域的に限られている。京都北部と秋田県の鳥海山北麓一帯である。これは何を意味しているのだろうか。

丹波内陸部のユリ・ユラ地名はいかなる理由によるものか？　これを先の⑥に当てる人もあるが、実は二系統の性格が現れる。その一は由良川筋の水辺であり、その二は山間の小集落である。前者を⑤、後者を⑥とすれば整合性はあり、①は両者が共有する。これで一件落着となるが、果してどうか。

吉田茂樹氏は「ユ（揺）リ」が本来の意ではないかと言われており、「丹波のみなら山間の峡道でも通ずるが他地方にも散在しており、これらを合わせて内陸部にあっては、河川水が浸食・堆積活動をくりかえし、その谷間や山麓を揺り動かすところがユリであろう。砂を揺り上げる意があるかも知れぬが、逆に崩す意を含めてのユリであろう」とまとめられている。こうしてみるとユリ・ユラは総論ありき、としながらも、なお各論で異なる性質を排除できないようである。

海岸にも河口の砂地と岩の突出した岬・崎地形があり、内陸でも、河川流域の支流出合の小広い台地と河川と関係しない山中とがある。

「山間の峡道」説は、登山を一生を通じて実践している者にとっては強い思いが生じてくる。例えば丹波地方のワンデリングをしていて、「ユリ道」というのを度々聞いている。その道はたいてい細長く高低の少ない道だった。長い尾根に沿って（稜線ではない）水が呑める細流と出合いながら、いつの間にか山の肩へ出ているというものだった。だから「ユリ道」とは楽な「ユルイ道」だと考えてきた。

北山に二瀬ユリがある。京福電鉄の駅から貴船山をからんで直谷へ抜ける峠道を「ユリ道」と言い、貴船神社を経由するよりはるかに楽で早かった。しかしその道は時々山抜けで部分的に流される道だった。

これも河川を道になぞらえると、普段はゆったりしているが時として変化が起きる、つまり揺れ動く・安定しない意味を含んでいるのではないか。垂直に長くのびる故に揺れ動くことから逃げ得ない宿命をもつということから、先の⑨百合の花を持ち出したのだが、語呂合わせの域を出ないと一笑に付されそうだ。しかし、自信のなかったこの説にも実は援軍があったのである。ユリ（百合）の古名は「狭井」と言い、「古事記」に神武天皇が狭井川辺りで恋をする場面で登場する。ユリの原意は球茎の結合形容または揺ぐ花の視覚形態によるものらしい。

秋田の由利地方の地名は鳥海山の北麓一帯に広く分布している。京都の由良川に相当するのは子吉川で、清流と広い河原をもつ立派な河川である。この流域の右岸側に東由利町がある。一説に坂田金時や由利若などの伝説がある、と言われるのも、この土地を領した由利氏がいたためだ。この由利氏の名も地名から発生したことは他の例と同じであるが、その由利氏も中世にこの土地を去った。

由利の名は東由利町のみではなく、子吉川左岸の鳥海山溶岩台地一帯に無数の由利地名を残している。由良川の水流によるものの他に火山活動による表土の動揺が古日本語のユリで統合されている感がする。この地では間違いなく地表が揺れ動いたのである。

ところが、地元秋田の民俗学者のぬめひろし氏の「地名譚」には注目すべき記述があって驚かされた。「由利長根」の一節には、「由利の地名由来は百合の多い土地であったからと古くから言い伝わる。この素朴な口碑は、文化の進んだ人々があれこれ名付けてこの起源を論じ、むずかしくしているよりも意外に地名の源をあてていることがある（中略）由利の

地名も百合の根を食用する故にそれがよく生えている土地柄をしのばせて納得のいく地名起源だと思う」とあって、思いがけない援軍を得た思いがした。なお由利長根とは字の通り鳥海山の溶岩台地を越えて行く街道の意である。

さて、ぬめ氏の説は地元の聴き取りらしいので動かし難いが問題は百合の大群落があるとしても、その百合の名はどこから来たか、という壁に突き当たってしまう。全国の「ユリ・ユラ」地名に必ずしも百合が多いわけでもないから他に原因を求めなければならない。

百合の花もおそらく長い茎が重い花弁を付ける頃、風に揺れ動き安定性を欠く。このことから発した命名ではなかったか、と考える。百合はイネ科の植物の中にまじって咲いていれば安定を得られるが単独の場合はすぐに倒れる。特に人の植えたものなどは添木を必要とする。

百合説もやはり原意からの借用だったとみると話を元に戻す必要がある。

京都北部丹波内陸部と秋田県の由利地方は共に河川の浸食と洪水などによる地表の変化という性格は共有するものの、火山の変動の点では違ったものがあり、これをどう扱うかが問題となる。

ユリ・ユラを古語辞典（岩波）でみると㋐後（ヨリ）の源語　㋑揺（全体が根底から動揺・振動する）　㋒許り（ゆるされる）　㋓助（ヨリの母音替形）　㋔緩（ゆとりがある）　㋕百合（ユリの上代東国方言）となる。ユラについてはユが地表の揺れ動くとき、ラは動くさまを表す助詞、とある（日本語源辞典（村石利夫編、日本文芸社）。

言葉のうえではユリ・ユラは、揺れ動く様子と緩るむことが含まれる。

ユリ・ユラ・ユルイ・スル・スルリ・スベルなどはよく同じ意味に使われる。ユルイは余裕があることを善意に使われるほかに、頼りなく気持ちがゆるむ、と理解されがちである。

「行動がユルイ」などと、ヌルイ・アマイなどと同列に扱われることさえある。

柳田國男等の編集による「分類山村語彙」によると、「ユリ」は「崩れた山の土を水の流れが洲り平めたわずかな平地。海岸と山間と同じ地形語の多いのが我邦の特徴であるが、是なども其一例で、ユラというのは浜でも同じ地形である。但しこの方の由良はやゝ規模が大きい」とあって、ほぼ現状を説明し切っている。民俗学的見地からみても、陸と海との移動民には共通の語があった可能性を感じとることができる。

今まで取り上げてきた、ユリ・ユラの概観に対して全く異なる説を出されているのは吉田金彦氏で『古代地名を歩く』（京都新聞社）で由良川および加佐の部が注目される。

「丹後の由良が、ユラと呼ばれて古代からあり、それは河口から川沿いの中流に至るまで、川を縁としてユラという語が使われた」と言い、続いて「古代人の漂着神の信仰からしてユラ（由良）は寄り集まる、依り掛かるというヨル（寄・依・憑）の意味があるらしい。大陸や南島から、また隠岐や出雲から神々がこの由良の海岸に寄り着き、由良川岸を遡って行った」。

この説は地名由来としては初見であるが、ユリ・ユラを「ヨル」と解釈するところが新鮮だ。さらに由良川を遡って行き寄るべき土地へ根をおろした、とするもので金久氏の出雲族東征説と似ていて

妙である。

舞鶴・福知山付近には確かに由里地名が多いから傾聴すべき説であった。

ところで、丹波地方で使用される「山峡の道」説とはどんな関係となるのか、また、海岸の人のいない細長い宇和の由良岬、その他の由良との関係、秋田の由利地方などは「寄る」で理解するのは困難だと思われる。

次にユリ・ユラ関係の山岳名を取り上げてみたい。

「コンサイス日本山名辞典」（三省堂）によると、由良を名乗る山が四件、百合三件、緩二件、以下は一件であるが、由利原・洲綾・揺・震・ユルギ・涌出・動・石動などがある。

このうち山中に軽く揺り動かすことができる石があって、石動の名を残す地方がいくつかあるようだ。京都の笠置山、能登の石動山などの他に動く石は各地にあって、信仰の対象となったものさえある。前出の山名のうち、いくつかは崖崩れなどの例があって名となるものが含まれているように思う。

震岳と涌出山などは意味深長で、ぜひ現地へ行って自分の目で確かめてみたい気がする。

さて結論を出さねばならないときがきた。

青葉山が漁民の目標となるランドマークタワーであったように、由良ヶ岳も同様の役割を演じてきた。

由良の集落と由良川のどちらが先にせよ、由良ヶ岳が先二者より先に名称が生じた可能性は低い。由良川があり、その河口の砂地に由良の集落が生まれたから、山名が発生したのであろう。とすると、問題は整理されてくる。つまり由良川が先か由良が先かの二論となる。細かい差違は省くとして㋐土地が動くという概念で説明できる、㋑人が寄りつく場所（村落等）となる。

㋐は前述の通り河川筋の水による浸食活動によるもの。動く岩石（山）、崩壊地形（崖）、山間の峡道（細長い直線的な道）、火山活動、海岸の砂浜などに該当し、ほとんどのユリ・ユラ地形に無難に対応できる。

これに対して㋑は、文献によって説明できる部分も確かにあるものの、すべてのユリ・ユラ地名に対して説明できそうにない。「寄り集る」という定規は開拓民が新しい土地に移入し村落を形成していく過程で発生する地名のありかたを説明する魅力ある説である。村落でない多数の無人地帯のユリ・ユラを説明できない欠点をもちながらも捨て去るにしのびない何ものかがこの説にはある。

この説で例えば「福知山」図巾に上町の北油良・南油良の小集落がある。少し北に香良があり朝鮮系の名で古い時代の鉱山もあるが、それにしても南北の油良は、この地域の中心的存在ではなく支流の枝村である。この村に先の説を当てるには少々窮屈な思いがするのである。

もしかすると日本語のもつ幅広い解釈を現代人は十分把握し切れてないのではないかとさえ感じてしまうのである。

東北や北海道の人々がよく「ユルクナイ」と発言する。その意味は「簡単ではない」困難性を示す意であるが、ここでも「ユルイ」とは安心して身構えない状態を示すから、古代日本語の源は大概そんなところにあったのかも知れない。由利・由良の地名探索は想像をはるかに超えて、「ユルクナイ」ものであった。

特選コースガイド 1　湖東

（里山シリーズ41　近江八幡）

自然のままのかくれ道
白王山から笠縫山縦走

一般コース（★★　）

長宗　清司

JR東海道線（琵琶湖線）の、上り電車が近江八幡駅から安土駅にかかるあたり、琵琶湖側（左）の車窓から眺めると八幡山から北へ、途切れ途切れに琵琶湖岸までの低山群が目に入る。後方の山は、長命寺山・姨綺耶山（通称津田山）・御所山と続き、北側には国民休暇村と湖上に沖島が望め、ハイキングコースも整備されて登山者でにぎわう。だが、同じ山塊なのに今回紹介する縦走路はほとんど人が入らず、自然に近い環境なので、山の雰囲気を十分に楽しめる区域である。

JR近江八幡駅から長命寺行きのバスに乗り、円山バス停で下車。目の前の小山を試し越えする。円山神社の石段（254段）を一気に登って、境内からさらに円山頂上へは小道を登る。展望良好の広場からは「西の湖」周辺の景観が美しく望める。踏み跡程度の道を北へ急下降すると、やがて擁壁の上部に出て、右へ移動していったん平地に下り立つ。

長命寺川に架かる橋を渡ると、次の山裾に竹やぶを抜ける小道が見つかる。ここ旧王之浜村の名は、天武天皇（一説には唯善親王）が漂着したことに由来するが、神や天皇に献上する食物を意味する「おもの」が変化した地名ともされている。

登り切った頂は、小松と岩を配した自然の庭園。さらに尾根をたどると雑木林のなか、白王山（165・6㍍）のピークに着く。展望無し。再び北へ急下降して道路に下り立つ。湖岸道路は車が多く、ハイスピードの車に注意して、道路を向かい側に渡る。ここは旧白部村。特産の石灰や白部石が出たことから名付けられた。

これから登る白部山（243㍍）の南山麓に鎮座する若宮神社の祭神は大国主命である。隣の国清寺の境内で出会った地元の人の話だと、この山は通称長峰山とのこと。

地図上に、この尾根を横断する破線の峠まではやぶ漕ぎで難儀した。下り道、立て看板の「伊崎山・国民休暇村」の標識に従って足を踏み入れたが、ここは土と落ち葉に埋まり、雨で流された道らしき所は自然に還っている。

以前歩いた記憶のある地点にやっとたどり着いた（余裕がなければここで左へ下山すると、奥津島神社経由で、波合のバス停に行ける）。

若宮神社から白王山

元気組は、さらに笠縫山（△177・3㍍）に向かう谷にくだるが、ウラジロが胸の高さまでに生い繁って道か谷川か判別し難い。やがて南からのびる山道に出る。

4等三角点は、山道から少し外れるが、読図で容易に探れる。確認後、右の山道に引き返し、やがて堀切港の船溜り地点に下り立つ。

バス停は、これからさらに2㌔先の国民休暇村にある。

運が良ければ、近江八幡駅行きのバスの車窓から、琵琶湖の美しい夕景が見られる。

（平成13年12月8日歩く）

白王山・笠縫山付近略図

≪コースタイム≫

JR近江八幡駅（バス20分）円山バス停（30分）円山（45分）白王山（30分）若宮神社（30分）白部山（20分）小峠（50分）T字地点（1時間）笠縫山三角点（20分）堀切港（25分）国民休暇村バス停（40分）近江八幡駅

≪地形図≫2万5千＝近江八幡・沖島

（問い合わせ先）

近江八幡駅観光案内所　☎0748（33）6061

休暇村近江八幡　☎0748（32）3138

近江鉄道バス（八幡）　☎0748（33）3231

近江タクシー（湖東）　☎0748（37）0106

新刊

三訂　奥美濃――ヤブ山登山のすすめ

高木泰夫著　四六判並製　一八九〇円

樹林の山旅が楽しめる奥美濃七〇山のガイド。写真と地図を多数掲載。

春は尾根の残雪を踏んで頂上へ。新緑で萌える頃は白やピンクの花の咲く道を、夏は魚影を追って渓谷をつめ、秋は燃える樹林の中の古い峠道を辿る。

好評！重版

比叡山1000年の道を歩く

竹内康之著　A5判並製　一六八〇円

【付】「東山」の山なみ

比叡山の諸堂へと続く古道や峠道は、千年の歴史で踏み固められたやさしい道として訪れる人達を待っています。誰でも登れる、晩秋から初冬の陽だまりハイキングに最適。

★表示の価格は5％税込です

ナカニシヤ出版

http://www.nakanishiya.co.jp/

京都市左京区一乗寺木ノ本町15

☎075-723-0111　〒606-8161

特選コースガイド②　南信

隠れた名山・伊那富士

戸倉山（とくらやま）

初級コース（★　）

金谷　昭

戸倉山は、中央アルプスと南アルプスとに挟まれ、それらと平行する伊那山脈北端の盟主として周囲を凌駕する。北方の伊那市付近から見ると富士山型の偉容を誇り、古くから伊那富士とも呼ばれ、地元民の信仰の山として親しまれている。また、薪炭や飼料用の草木を採取した山としても登られてきた。地元を除けば名高い両アルプスの影に隠れ、ややもすると一般登山者には顧みられることなく、いわゆる隠れた名山となっている。雨戸の形をした断崖や岩場をあちこちにもつ山容から戸倉山と呼ばれ、数少ない1等三角点峰だけに山頂の展望は優れている。

登山口近くの下田までのバス便は少なく、JR駒ケ根駅もしくは中央道駒ヶ根インターからタクシーで行くか、マイカーに頼らざるをえない。京阪神からは早朝に出発し、名神・中央道を利用すれば、日帰り登山は可能である。

駒ヶ根市街から天龍大橋を渡り、駒ヶ根ゴルフ場の案内に導かれて中山集落に入り、落合で戸倉キャンプ場の案内に従って左折する。舗装された急勾配の曲りくねった狭い道路を走ると、登山口の戸倉キャンプ場に到着する（駒ヶ根から約30分）。

キャンプ場を奥に入り、獣除けの電線柵を開けて登山道に入って行く。小さな谷の右岸沿いに行き、檜植林の小尾根の右（南）山腹に取り付く。間もなく一合目の標識を見て、10分程して、ベンチのある「二本松」に着く。二本松とあるが、一本の赤松の巨木しか見当たらない。それを過ぎると登山道は小尾根の稜線にのり、右側はカラマツ左側はブナやエンジュの自然林となる。「ミツバツツジの保護区」の看板が出てくる頃、昔村人が刈り取ったカヤやシバなどを運ぶ馬をつなぎ留めた、巨木「馬留め松」が出てくる。このあたりからは大きく九十九折をゆるやかに登って行く。頂上からの西南尾根にのって左に折れると、上の森分岐となり、右から別ルートが登ってきている。西南尾根は、少しの急登を終えるとシラカバを交えたカラマツの美林のゆるやかな登りとなり、頂上までほぼ直線的な尾根道となる。

中央アルプスを展望する六合目を過ぎる頃から、尾根左側のカラマツは変わらないが、右側は原生だろうか、松の巨木が多く見られる。この地方の松は虫害もなく健在である。「日蔭滝分岐」となり、右の谷に下りるロープが下がっているのを見過ごし、先を行くと尾根右側は松、左側はブナ・ナラを交えた雑木林となる。やはり巨木の「猿の松」が出てきたり「天狗伝説の岩」が出てきたりと、山の歴史を感じさせる。

七合目を過ぎると道脇に冷たい「金明水」の水場がある。東屋が設けられていて休憩するのに最適である。ここからは快い自然林のなか、頂上への最後の直線的な急登となる。八、九合目を過ぎると、やがて西峰に飛び出す。

西峰頂上は中央に庚申塔が置かれた小広場で西面は大きく開き、西方に中央アルプスの大観が得られ、前に展望説明板がある。東方の南アルプスは塩見岳以南の連峰が木の間越しに見られ、この方面の展望説明板も置かれている。

最高部の東峰頂上へは西峰からいったん少しくだって登り返すと10分程で着く。途中の鞍部には頑丈な避難小屋が建っていて悪天候の際には心強い。東峰頂上には少し角の欠けた1等三角点（点名　戸倉山、1680・67m）、脇に十蔵薬師如来とその沿革説明板がある。

狭い頂上だが東北から東南方面は全開、目の前の仙丈ヶ岳と北岳を中心にした南アルプスの北半分の大パノラマが展開する。登りの苦労が吹っ飛んでしまうほどの至福のひとときを得るだろう。頂上での展望を楽しんだら、下山は往路を忠実にたどればよい。

（平成19年6月1日歩く）

《コースタイム》

戸倉キャンプ場（15分）一合目（10分）二本松（10分）馬留め松（30分）五合目（10分）滝分岐（10分）七合目（10分）金明水（10分）九合目（15分）西峰（10分）東峰（10分）西峰（15分）金明水（55分）戸倉キャンプ場

《地形図》2万5千＝市野瀬

・道標あり、特に危険箇所なし

（交通）

・伊那バス　☎0265（88）0007

JR駒ヶ根駅発のこまちゃん竜東地域振興バス「大曽原」行き乗車、「下田」下車

・赤穂タクシー

☎0265（83）5221

・丸八タクシー

☎0265（83）4177

＊戸倉キャンプ場には10台程の駐車場あり

（その他）

温泉「こぶしの湯」第二・四木曜日定休

☎0265（83）7228

戸倉山東峰山頂（最高部）と十蔵薬師如来

特選コースガイド③

南勢

熊野古道三瀬坂峠から 船木浅間山・猫ノ尾

一般コース（★★）

薮木　伸人

国道42号線沿いにある、大台町の道の駅に立ち寄ると、宮川の対岸に植林の山が見えている。ずっと名前を知らなかったが、登りたいとは思っていた。地形図を見ると、電波塔の辺りが天辺のようだ。熊野古道の三瀬坂峠から登れるのではと考え、'05年冬、峠の北側から登ってみることにした。

道の駅を過ぎて、宮川にかかる船木大橋を渡ったらすぐに左折し、三瀬川集落に至る。近くには、三瀬の渡し跡がある。妙楽寺の辺りで細い林道に入り、終点まで登ると、いよいよ山道にさしかかる。古道といっても、ここには馬越峠のような石畳は無い。目立つのは、イズセンリョウの鈴成りの白い実と、モミジガサの痩果の綿毛である。古道自体は、遠く奈良時代にはあったらしい。三瀬坂峠には宝暦地蔵という石仏が祀られている。

峠から電波塔のピークまでは、途中急坂もあるが、クヌギ・タカノツメ・ウリカエデの色づいた葉が美しかった。山頂手前からは、北側の展望が開け、度会の山々、麓の三瀬川や長ヶ集落、近畿道を望む。遠く堀坂山も頭を覗かせているようだ。山頂に着くと、イセ愛山会のプレートから、船木浅間山という名だとわかった。尾根道は、さらに北にのび、少し下の方には、やはり頂に建物をのせた△3 60㍍ピークが見えていた。山腹東面の植林はまだ若く、もうしばらく展望が楽しめそうだ。峠に戻った時、南東方向の尾根にも登って行けそうだったので、折あらば、次は、尾根上の378・9㍍三角点「猫ノ尾」を目指そうと決めた。

'07年初夏、峠の南側、里集落から登ってみた。古道沿いには、ミゾホオズキ・コガクウツギ・タツナミソウ・ヤブウツギ・ハナミョウガ・フタリシズカ・ヨツバムグラなどが咲いていた。峠からは、ある程度やぶ漕ぎを覚悟していたが、意外にも歩きやすい尾根道だった。一番高い場所から外れないように忠実に尾根をたどって行くと、360㍍ピークから、大台町・大紀町（旧大宮町）の町界を示す杭が現れた。終始展望は無く、モチツツジの花が咲いているぐらいだったが、快適な風を受けながら、343㍍ピークに着く。

三瀬坂峠の宝暦地蔵

猫ノ尾３等三角点

鉄塔巡視路が分岐しているので、少しくだって様子を見た後、再び尾根に戻り、しばらくして最高所と思しき場所に出た。少し探して３等三角点を見つけると、傍らの木に「猫ノ尾ノ頭」と書かれたプレートが下がっている。「点の記」によれば、南東方向約600㍍の七保峠から小径が通じており、徒歩約30分（約1・2㎞）とのことだったが、そちらにくだる道は不明瞭だった。ただ、木々の間から、七保峠越しに滝原浅間山が見えていた。

帰路は、来た道を戻ればよいのだが、360㍍ピークから町界杭に沿って東にくだり始めてしまって戻り、さらに、峠手前で北東の尾根をくだってしまい再び戻るはめになった。一度通ったからといって、過信は禁物だと改めて思った。

「猫ノ尾」という変わった名前に惹かれて登ったが、未知の山を歩く楽しさを感じる人以外には、あまりお勧めのコースではない。船木浅間山およびその北のピークの方がおもしろいだろう。

（平成17年11月28日
平成19年5月27日歩く）

≪コースタイム≫

（船木浅間山）三瀬川林道終点（20分）三瀬坂峠（20分）船木浅間山（12分）峠（12分）林道終点

（猫ノ尾）里登り口（30分）三瀬坂峠（50分）猫ノ尾（50分）三瀬坂峠（20分）里登り口

≪地形図≫2万5千＝伊勢佐原

（問い合わせ先）

大紀町役場観光協会
☎0598（86）2243

宮川流域交流館たいき（10時～16時）
☎0598（86）3851

道の駅奥伊勢おおだい（8時～19時）
☎0598（84）1010

道の駅木つつ木館（9時～17時）
☎0598（86）3229

おおみや昆虫館
☎0598（86）3940

特選コースガイド④

南紀

2等三角点のある山

熊野古道周辺の山々
高尾山・平治川・鳴谷・相須

山形　歳之

高尾山（943・5㍍　2等点名書尾山）

初級コース（★　）

高尾山とはありふれた名で、「山名辞典」を開くと数え切れない。タカオとは、尾根が高い所で左右に長くのびていることを示す山名なので、全国に数多くあるのは当たり前である。和歌山県だけでも三山を数える。ここに来る途中でも、一つの高尾山に登って来た。紀伊田辺北郊の奇絶峡にある3等三角点の山で、ガイドブック『和歌山県の山』にも採り上げられている。

東海自然歩道の出発点、東京の高尾山もよく知られているが、確か2等三角点が設置されている。

ここの高尾山は、世界遺産に指定された熊野古道の中辺路にあり、登山口も古道にある。

阪和自動車道から湯浅御坊道路に入り、終点みなべインターで降りる。紀伊田辺から国道311号線を北上し、熊野本宮に向かう。

近露を過ぎ野中に到ると、「一方杉、野中の清水」の看板が出てくる。これに従って左にカーブして旧国道に登る。旧国道から一つ上に熊野古道が通っていて、そこに一方杉のある継桜王子神社がある。古道は狭いが普通車は通行可能である。

継桜王子の隣には「とがの木茶屋」、さらに秀衡桜と碑がある。前には四、五台の駐車が可能で、清潔なトイレ舎も建っている。

登山口はこの碑のすぐ右手で、何の表示も無いが一歩踏み込むと、明瞭な道がのびている。右は植林左は榊の畑で、道は左に分岐する。分岐するほうがよく踏まれていて、山手に向かうのでそちらに登りそうになるが、登山道は直進する道を進む。上に向かう道は榊の畑で消える。

山腹をゆるやかに登って行くと、やがて稜線に達し、左に林道が現れる。林道はしばし稜線にそってから左奥にのびて行った。

高尾山登山口（中辺路、秀衡桜の碑）

あまり歩かれていないようだが、忠実に稜線上を登って行く。植林が切れ雑木林になり、最後の急坂を登り切ると、山頂である。

展望は無く、新宮やまびこ会の山名板などが二、三あり、無傷の標石が設置されている。

熊野古道は賑やかである。各地から訪れた観光バスで大勢が訪れる。登山姿の私達を見つけると、「古道歩きですか」と声をかけてくるが、「山です」と言うと不思議そうな顔をして立ち去った。

（平成19年5月22日歩く）

《コースタイム》

登山口（1時間30分）高尾山

〈地形図〉

5万＝童神　2万5千＝発心門

平治川（485・5㍍　2等点名平治川）

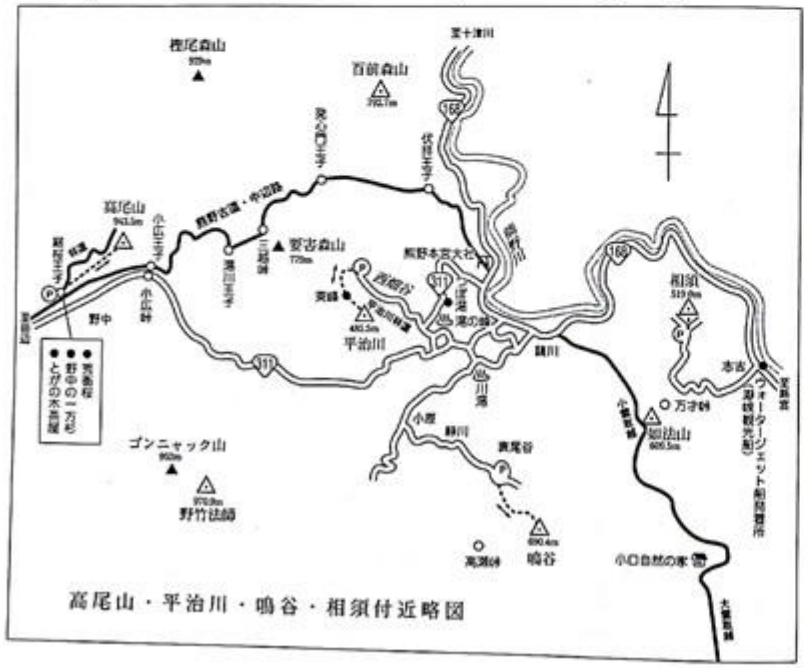
初級コース（★　）

平治川は点名で山名は無い。熊野本宮の湯の峰温泉の手前で下湯川に向かい、さらに北上して栗垣内に向かう。道は細いが舗装されている。栗垣内の手前で左に登る林道が分岐する。砂利道で入口に「平治川林道2305㍍」の表示がある。地形図には西畑谷と記載されている。意外に幅広の林道で、車の入った形跡はあまりないが、楽に終点広場に到着する。

その先で道が二分し、右は新しい林道、左は幅1㍍くらいもある峠道がのびている。全く放置されて歩く人もないようだが、所どころに石段跡も見られ、昔は牛馬も通った街道と思われる。ひと登りで東峠に登り着く。稜線の道と平治川にくだる交差点で、地蔵尊が静かに見守っている。

ここから左へ稜線伝いに進む。周囲は植林地でピークを捲いてのび、簡単に三角点に登り着いた。展望は80%くらい。天端が真っ赤に塗られた山三角点もあった。

（平成19年5月23日歩く）



高尾山・平治川・鳴谷・相須付近略図

平治川、峠の地蔵尊

≪コースタイム≫
登山口（25分）東峠（25分）平治川
≪地形図≫
5万＝栗栖川　2万5千＝皆地

鳴谷（690・4㍍　2等点名鳴谷）
中級コース（★★　）

川湯温泉から大塔川沿いに遡る。狭い道に村々が点在する。小原で左折して支流沿いに静川、蓑尾谷を目指す。こんな奥にも人家があるとは驚きである。蓑尾谷の車の転回広場で車を止める。行き止まりの村で見慣れない車が止まると、何事かと村人が顔を出す。こちらも好都合なので「三角点を調べております」と話す。単に登山に来たなどと言うと、何でこんな山にと怪しまれるのがオチなので、三角点を調べておりますと言うことにしている。そうするとご苦労さんと不思議がられずにすむ。「道があり、行ったことがある」との返事でひと安心。「点の記」は古いし、地形図には登路の記入も無く不安だったが、これでいっぺんに元気が出た。わかりにくいからと取付口まで案内してくれたが、村の人は親切である。林道は蓑尾谷の最後の人家の先で舗装が切れ、U字上に尾根の先端をカーブしている。ここが登り口で、取付は不明瞭だが、尾根端によじ登ると明瞭な道が現れる。まだ十数年くらいの植林の中腹を、どこまでも一直線にのびていた。

しかし全く歩かれていないようで、数年も前に枝打ちされた枯れ枝が堆積し、倒木が重なった所や道が崩落している所もあり、歩き難いことおびただしい。1時間程してやっと尾根の急坂に取り付いた。最後は木の根をつかんで稜線の一角に登り着く。このあたり不明瞭なので、テープ付けをしておくと下山時に助かる。さらに細い稜線をたどってやっとのことで三角点にたどりついた。登ったと実感する道であった。南紀の山には必ずある新宮やまびこの会の山名板も無く、全く登山者の跡は見出せなかった。

展望も無く、少し欠けた標石だけの静かな山頂である。

登山道は「点の記」の通りだったが、稜線からの滑り落ちるような下りは不明瞭なので、テープ付けがあれば安心できる。

（平成19年5月24日歩く）

≪コースタイム≫
登山口（2時間10分）鳴谷
≪地形図≫
5万＝新宮　2万5千＝本宮

相須（519・0㍍　2等点名相須）
初級コース（★　）

地形図では三角点の下まで林道がのびているし、「点の記」にも登り口分とあるので楽勝と思われたが、行ってみなければわからない。今までも荒れた林道を何㌔も歩かされたことがある。

相須の2等三角点にて

三角点の山歩きでは、その地に行っても全く情報が得られない。何しろ人家すら無く、尋ねる術がないうえに、たとえ人に出会えても自分の住む裏山のことさえ全く知らないことが多い。

熊野川瀞峡観光船出発の志古から、川沿いの林道に入る。数軒の村を通り過ぎると林道は山に登って行く。何だか舗装が新しく、熊野古道の道標まで出てくる。これなら道は大丈夫らしいと少し安堵する。小雲取越え、万才峠2㌔の入口もあり、地形図通りである。しかし、やがて舗装が切れ、デコボコの砂利道になった。ゆっくりと車を走らせる。乗用車が止まっている。道を確かめようと車を止めると、囲籠から鶯の声が響いてきた。禁猟のはずである。男は三角点など何のことかとの返事だった。無理もない、こちらの方も変わったことをしているのだから。

湯の峰温泉「つぼ湯」

林道は最高点を過ぎてくだって行き、やがてボロ小屋の建つ終点に到着した。その先にはコンクリート舗装の道にチェーン掛けがされていて、左にも林道がのびている。「点の記」の登り口である。なだらかな林のなかを10分で山頂に到着する。広く刈られた山頂にはいっぱい草が茂っていた。

標石は三角の木枠の中にあり、雑木に遮られて展望は無かった。

三角点の山登りでは、登るだけでなく、登山口に到るまでのルート探索に苦労することが多い。

（平成19年5月26日歩く）

≪コースタイム≫
登山口（10分）相須
≪地形図≫
5万＝新宮　2万5千＝本宮

＊毎日、湯の峰温泉の駐車場を利用したが、静かで美しいトイレがあり、お湯も250円で入れて安い。もっとも有名なつぼ湯は750円で、2人しか入れないので順番待ちであった。

沿線ハイキングガイド

近鉄　京阪　阪急　南海　神鉄　山陽電車　叡電・京福
公開ハイク　歩け歩け大会　文学散歩　歴史散歩　その他

近鉄

▽駅長お薦めフリーハイキング「河内の風情恩智越え」　9月2日(日)雨天決行（荒天の場合9月9日(日)に延期）（集合）恩智駅9時30分～11時（コース）恩智駅―恩智神社―恩智越―展望台―高安山駅（約6㌔一般向＊係員は同行しません）参加自由・無料、河内国分駅072（978）6449

▽駅長お薦めフリーハイキング「大阪夏の陣、兵共の夢の跡と道明寺天満宮を訪ねて」　9月8日(土)雨天決行（荒天の場合9月11日(火)に延期）（集合）道明寺駅9時～11時（コース）道明寺駅―道明寺天満宮―道明寺（尼寺）―石川河川敷―大和川付替え記念碑―高井田横穴古墳群―奥田忠次の碑―玉手山公園―道明寺駅（約10㌔一般向＊係員は同行しません）参加自由・無料、藤井寺駅072（955）0037

▽近鉄万歩ハイキング「天理の町並みから古墳巡りコース」　9月9日(日)小雨決行（荒天中止）（集合）天理駅9時30分～10時（コース）天理駅―市座神社―五智堂―海柘榴市―大和朝倉駅（約13㌔一般向）参加自由・無料、近鉄大阪イベント係06（6775）3566

▽駅長お薦めフリーハイキング「宇治の世界遺産と重要文化財を訪ねて」　9月15日(土)小雨決行（荒天の場合9月21日(金)に延期）（集合）小倉駅9時～11時（コース）小倉駅―県神社―平等院―宇治川先陣の碑―宇治神社―宇治上神社―三室戸寺―万福寺―JR黄檗駅（約9㌔一般向＊係員は同行しません）参加自由・無料、大久保駅0774（41）6286

▽近鉄万歩ハイキング「初瀬街道・西峠越えコース」　9月16日(日)小雨決行（荒天中止）（集合）大和朝倉駅9時30分～10時（コース）大和朝倉駅―白山神社―十二柱神社―（伊勢辻）―榛原駅（約10㌔一般向）参加自由・無料、近鉄大阪イベント係06（6775）3566

▽駅長お薦めフリーハイキング「おかげ参りで賑わいをみた石畳の道、暗越奈良街道を行く」　9月17日(月)雨天決行（荒天の場合9月20日(木)に延期）（集合）枚岡駅9時30分～11時（コース）枚岡駅―芭蕉句碑―豊浦橋―笠塔婆（引法の水）―暗峠―石仏寺―南生駒駅（約7㌔健脚向＊係員は同行しません）参加自由・無料、瓢箪山駅072（981）2144

▽奈良交通ハイキング「伯母峰峠から和佐又山へ」　9月22日(土)雨天決行（中止の場合9月23日(祝)に延期）（集合）大和上市駅9時～9時30分（コース）大和上市駅（バス）伯母峰バス停―伯母峰峠―和佐又山ヒュッテ―和佐又口バス停（バス）大和上市駅（約8㌔健脚向）参加自由・無料（バス代往復2960円は各自払い）、吉野営業所0747（52）4101

▽駅長お薦めフリーハイキング「秋の彼岸花、葛城古道と散策」　9月23日(祝)雨天決行（荒天中止）（集合）近鉄御所駅9時30分～11時（コース）御所駅―鴨山口神社―六面地蔵尊―番水の塔―九品寺―一言主神社―長柄神社―野口神社―鴨都波神社―御所駅（約11㌔一般向＊係員は同行しません）参加自由・無料、高田市駅0745（53）2531

▽駅長お薦めフリーハイキング「秋篠川のほとりを歩いて秋篠寺へ」　9月24日(休)雨天決行（荒天の場合9月30日(日)に延期）（集合）富雄駅西改札前9時30分～11時（コース）富雄駅―秋篠神社―大渕池公園（西地区）―松伯美術館―秋篠川―秋篠寺―平城駅（約9㌔一般向＊係員は同行しません）参加自由・無料、大和西大寺駅0742（33）5320

▽駅長お薦めフリーハイキング「矢田寺から雲山寺を巡る」　9月29日(土)雨天決行（荒天の場合9月30日(日)に延期）（集合）萩の台駅9時～11時（コース）萩の台駅―矢田寺―東明寺―矢田自然公園―雲山寺―富雄駅（約13㌔一般向＊係員は同行しません）参加自由・無料、生駒駅0743（74）2056

▽近鉄万歩ハイキング「山の辺の道を歩く」　9月30日(日)小雨決行（荒天中止）（集合）天理駅9時30分～10時（コース）天理駅―石上神宮―内山永久寺跡―天理観光農園―夜都伎神社―竹之内環濠集落―天理市トレイルセンター・長岳寺―景行天皇陵―桧原神社―大神神社―桜井駅（約16㌔一般向）参加自由・無料、近鉄大阪イベント係06（6775）3566

京阪電車

▽スポニチファミリーハイク「芦生峠・二ノ瀬ユリ」　9月9日(日)小雨決行・雨天中止（集合）叡山電車貴船口駅9時30分～10時（コース）貴船口駅―貴船神社―奥貴船橋―芦生峠―滝谷峠―（二ノ瀬ユリ）―大岩分岐―貴船口駅（約12㌔健脚向）参加自由・無料、京阪電車ハイキング担当06（6947）3702

▽家族DEウォーク「宇治・東海自然歩道から宇治川沿いを歩く」　10月14日(日)小雨決行・荒天中止（集合）京阪宇治駅9時30分～10時（コース）京阪宇治駅―源氏物語ミュージアム―（東海自然歩道）―志津川―天ヶ瀬吊橋―あじろぎの道―宇治橋―京阪宇治駅（約6㌔一般向）参加自由・無料、京阪電車ハイキング担当06（6947）3702

叡山電車

▽叡電ハイク「夜泣峠・向山・賀茂川堤・出町鯖街道起点」　9月19日(水)・22日(土)小雨決行（集合）二ノ瀬駅9時30分～10時（コース）二ノ瀬駅―夜泣峠―向山―山幸橋―高橋―（賀茂川堤）―出町商店街―鯖街道起点（約11㌔一般向）参加自由・無料、叡山電車営業課075（702）8111

▽叡電ハイク「貴裏ヶ岳・静原」　10月10日(水)・13日(土)小雨決行（集合）岩倉駅9時30分～10時（コース）岩倉駅―繁夏坂―貴裏ヶ岳―静原（コスモス観賞）―楽土坂―鞍馬駅（約10㌔一般向）参加自由・無料、叡山電車営業課075（702）8111

京都バス

▽三角点トレック「品谷山・廃村八丁コース」　9月1日(土)小雨決行（荒天の場合9月8日(土)に延期）（集合）京阪出町柳駅コンコース8時～8時30分（コース）出町柳駅（バス）佐々里峠―P866―品谷山―品谷峠―廃村八丁―四郎五郎峠―ダンノ峠―雲原（バス）出町柳駅（約10㌔健脚向）参加定員200名（申込制1ヶ月前から）無料（バス代別途）（申込先）京都バス運輸部営業課075（871）7521～2

▽三角点トレック「赤坂山・寒風コース」　10月6日(土)小雨決行（荒天の場合10月13日(土)に延期）（集合）京阪出町柳駅コンコース8時～8時30分（コース）出町柳駅（バス）マキノ高原―ブナの木平―赤坂峠―赤坂山―赤坂峠―寒風―マキノ高原（バス）出町柳駅（約11㌔健脚向）参加定員200名（申込制1ヶ月前から）無料（バス代別途）（申込先）京都バス運輸部営業課075（871）7521～2

神戸電鉄

▽火曜ハイク「炭ヶ谷・地獄谷西尾根コース」　9月4日(火)雨天中止（集合）谷上駅10時（コース）谷上駅―炭ヶ谷―穂高湖―地獄谷西尾根―大池駅（約11㌔健脚向）参加自由・無料、神鉄グループ総合案内所078（592）4611

▽木曜ハイク「有馬三山縦走コース」　9月13日(木)雨天中止（集合）有馬温泉駅10時（コース）有馬温泉駅―茶屋山―灰形山―湯槽谷山―善福屋畑尾根―六甲ガーデンテラス―六甲ケーブル山上駅（約8㌔健脚向）参加自由・無料、神鉄グループ総合案内所078（592）4611

▽火曜ハイク「丹生山・藍那古道コース」　9月18日(火)雨天中止

〈集合〉栄駅10時〈コース〉栄駅―つくはら湖―シビレ山―丹生山―義経道―藍那古道―藍那駅（約15㌔健脚向）参加自由・無料、神鉄グループ総合案内所078（592）4611

▽木曜ハイクマップ片手にフリーハイキング「三木山森林公園散策コース」　9月20日(木)雨天中止〈集合〉三木駅9時～10時〈コース〉三木駅―福有橋―地蔵口―三木山森林公園―どんぐり谷口―恵比須駅（約6㌔一般向）参加自由・無料、神鉄グループ総合案内所078（592）4611

▽神鉄ハイク「帝釈山・稚児墓山コース」　9月23日(月)雨天中止〈集合〉藍那駅9時25分〈コース〉藍那駅―市バス丹生神社前―鉱山跡―帝釈山―双坂池―稚児墓山―志久道―箕谷駅（約15㌔健脚向）参加自由・無料、神鉄グループ総合案内所078（592）4611

▽駅長ハイク「有馬富士公園コース」　9月29日(日)雨天中止〈集合〉三田駅10時〈コース〉三田駅―三輪神社―有馬富士公園―南ウディタウン駅（約10㌔一般向）参加自由・無料、神鉄グループ総合案内所078（592）4611

▽火曜ハイク「地獄谷・旧摩耶道コース」　10月2日(火)雨天中止〈集合〉地獄谷登山口10時（大池駅下車南へ約1・7㌔）〈コース〉大池駅―地獄谷―ノースロード―穂高湖―掬星台―旧摩耶道―地下鉄新神戸駅（約13㌔健脚向）参加自由・無料、神鉄グループ総合案内所078（592）4611

▽神鉄ハイク「炭ヶ谷・摩耶山パノラマコース」　10月14日(日)雨天中止〈集合〉谷上駅9時10分〈コース〉谷上駅―炭ヶ谷―獅池―まむし谷―シエール道―摩耶ロープウェイ星の駅（約8㌔健脚向）参加自由・無料、神鉄グループ総合案内所078（592）4611

▽火曜ハイク「千丈寺湖・有馬富士公園コース」　10月16日(火)雨天中止〈集合〉ウッディタウン中央駅9時～10時〈コース〉ウッディタウン中央駅―千丈寺湖―十二妃の墓―有馬富士公園―南ウッディタウン駅（約16㌔一般向）参加自由・無料、神鉄グループ総合案内所078（592）4611

▽駅長ハイク「丹生山田の里コース」　10月20日(土)雨天中止〈集合〉箕谷駅10時〈コース〉箕谷駅―大滝口―六條八幡宮―丹生宝蔵―藍那古道―藍那小学校前―藍那駅（約8㌔一般向）参加自由・無料、神鉄グループ総合案内所078（592）4611

▽木曜ハイク「つくはら湖・丹生山コース」　10月25日(木)雨天中止〈集合〉栄駅10時〈コース〉栄駅―つくはら湖―義経道―丹生神社―丹生宝蔵―箕谷駅（約16㌔一般向）参加自由・無料、神鉄グループ総合案内所078（592）4611

山陽電車

▽山陽ハイキング「大中遺跡・鶴林寺を訪ねるハイク」　9月2日(日)雨天中止〈集合〉播磨町駅下車向ヶ池公園10時〈コース〉向ヶ池公園―喜瀬川左岸―播磨大中古代村―円長寺―鶴林寺―尾上の松駅（約10㌔家族向）参加自由・無料（鶴林寺入山料別途）、須磨浦遊園㈱ハイキング係078（731）2520

▽山陽ハイキング「明石海浜公園・阿閦神社ハイク」　9月16日(日)雨天中止〈集合〉江井ヶ島駅下車、江井島海岸10時〈コース〉江井島海岸―明石海浜公園―阿閦神社―ジョセフ彦父母の墓（蓮花寺）―播磨町駅（約10㌔家族向）参加自由・無料、須磨浦遊園㈱ハイキング係078（731）2520

▽山陽ハイキング「苫編山と英賀神社」　10月7日(日)雨天中止〈集合〉手柄駅下車、北西0・5㌔手柄山中央公園10時〈コース〉手柄山中央公園―法輪寺―荒川神社―本徳寺別院―苫道国主神社広場―英賀神社―夢前川駅（約11㌔健脚向）参加自由・無料、須磨浦遊園㈱ハイキング係078（731）2520

▽山陽ハイキング「貨物線跡・網干なぎさ公園ハイク」　10月21日(日)雨天中止〈集合〉山陽網干駅下車、狭間公園10時〈コース〉狭間公園―魚吹神社―貨物線跡―網干臨海大橋―網干なぎさ公園―ダイセル異人館―山陽網干駅（約9㌔一般向）参加自由・無料、須磨浦遊園㈱ハイキング係078（731）2520

□これ以外にも多数の催しがあります。各社の広報も見て下さい。

せせらぎ

題字・小林玻璃三

里山歩きは楽し。偶然見つけた三角点は、2等の標石だった。私はリピーター、そして宣伝マン。

近鉄四日市駅発。ミニ電車の内部線利用、十数分の旅。泊駅下車。まず、道草して囲瀬山（いせいざん）光明寺を訪ねる。山門脇の椎の老樹を見上げたり、受難の歴史の説明をうかがったり、百花撩乱折々の花に感心したりと。寺号は体をあらわす。

寺を西へ。最初の信号を渡った左、泊山市民公園入口とある。つま先あがりの道。右上に階段。平和の塔・母の像・忠霊塔など並び立つ鎮魂の聖域が静かに。さらに道は続く。最奥部の頂は整地され、藤棚があり、桜の公園が広がる。

越えれば、桜並木の下山道あり。その時、段々を下り過ぎないように。紛れもない稜線をつかむ読みが肝要。稜線を伝う。続く先は泊山墓地の一隅。千の風を避けてたどること少々。突如、四囲を保護石で固めた美しい三角点（点名小古曽村・標高74・3㍍）標石が現れる。見ると二等の銘は右書きである。戦前のものは、手彫りが一般的。石工の癖（個性）とその腕（技量）が伝わってきて大感動。至福のひとときを満喫する。

点からは北へ。だが、足跡は稜線を逆U字に西進するかたち。やがて手すりがある道となり、次のピークにて、北に急転直下。降り切って車道へ。そこは、市最大のスケールを誇る南部丘陵公園の一角。動物園あり、梅園・バラ園ありだ。中央の芝生広場に立てば、まさに気宇壮大。あと、電車は近鉄八王子線西日野駅発がお薦め。

（伊賀市　高田栄久）

身近な京都北山、朝日峰を馬蹄形に歩いた。車を周山街道の小野下ノ町から水谷川沿いに走らせ、まずはタカノスを目指す。取付点と駐車地を探すうちにセバ谷と梅ノ木谷の出合近くまで来たようだ。

仕事道を見つけ、北にジグザグに行くと自然林の尾根にのり、一草一木に涼やかな生命の息吹を感じた。北に向かうと・635に出て前方に展望が得られた。西に行くと3等654・0㍍タカノスにこともなげに出られた。

南に・582から田尻峠を探索したが、歩く人も少ないようで下生えが濃い。ようやく獣除けネットのそばのやぶに峠名の札を発見して安堵した。廃村田尻方面を見ると激やぶのようで今日は行かない。

南に・602から3等688・3㍍朝日峰にたどり着き、至福のひとときを過ごす。下山は来た尾根を北に戻り北東に・630を経由し、その先でくだる尾根を間違え、北の尾根にのり換え修正し、ドンピシャ！　谷出合の駐車地に戻った。

北山は林道が至る所にのびてきて歩きにくいと言われるが、林道を避けて少々やぶ漕ぎすれば気散じに歩けてお薦めである。

（向日市　湯浅康夫）

取立山へ取り立てに行ってきた。この山には貸しがあるのだ。今まで二度この山の頂に立ったが二度とも何も見えず、友人からは「これじゃ下で絵葉書を見ていたほうが良かったよ」と言われるしまつだった。

その日は朝から乾燥注意報が出て快晴だ。敷金礼金無しの頂上で時間無制限の一本勝負ができた。目の前には白山がでーんと対峙し、南の勝山の盆地を取り巻く山々、北には手取川ダム湖があり、その周りは山だらけ、360度全部が見渡せる。

ここから白山のすぐ脇に立つ

鳴谷山の姿を見て、登りたくなってしまった。これでこの山に借りができてしまった。

私は車で山へ出かけることが多く、山頂ピストンが多いのだが、取立山はコップリ山に立ち寄り、ぐるーっと一周して元の駐車場に戻ってくるコースになっている。途中、ミズバショウの群生地や大滝があるというありがたい山だ。

その日は気合が入っていたので、朝早く登山口の駐車場に着いた。管理人はおらず、そのまま山に入ったが、下りてくるとやって来て、駐車料金を取り立てられた。これでさっきの借りは帳消しだ！

（熊谷市　山形　明）

6月早々、三重県の白猪山（820㍍）へ登った。

バス停「大石幼稚園前」から歩き始め、標準2時間25分のコースタイムに対し3時間50分を要したが、予想より早く午前11時半には頂上に到着した。

標高差600㍍を日帰り登山の限界とする私が、標高差776㍍の山を選んだのは、資料類における難易度が★（初心者向け）であり、果したい二つの目的があったからである。

前日は東海道ウォークにて疲労し、当日は睡眠不足や鼻風邪のため中止を考えたが、早朝、思い直して挑戦したものである。

そもそもは、平成14年に堀坂山へ登った時、局ヶ岳や白猪山が伊勢三山として信仰の対象になっていると知ったことに始まる。さらに平成15年に局ヶ岳へ登山した時、山頂から白猪岳を見渡し、北の髭山と共に連写してぐんと身近に感じたからだ。

今年は亥年、家内が猪女であるためどうしても登山したいと考えたのである。もちろん山頂から大阪の家内に電話して登頂の報告をした。

年女の彼女に登山は無理でも、今年は桜井市の弊余の道や大和長寿道をウォークして、安倍文殊院のジャンボ花絵（猪）を二度も鑑賞しているし、さらなるお祝いになったのでなかろうか。

私自身としても、頂上から局ヶ岳や堀坂山などを展望して、伊勢三山の登山を為し遂げたことに満足感を抱いたのだった。

予想より早く頂上に到達できたのは、大城地区からの登山道と合する地点（標高400㍍）までが舗装路であり、それ以後は急登であっても土道が主体だった関係による。大都市の近くでは丸太あるいは石による土止め階段の登山道が多いが、これは我々高齢者にとって困りもの。マイペースでの登り下りができないからである。特に段差が大きいと大変なのだが、そうしたことがなくて幸いだった。

平日なのに、頂上では中高年男女5人組や中年男性2組といっしょに過ごせて楽しかった。

（枚方市　東谷　宏）

4月14日、日永岳へ下見に行くも、ほとんど表示が無く林道終点に入ってしまい、やぶ漕ぎ3㌔、4時間かけて山頂に立った。途中でイワザクラの群生を確認した。

4月15日、三瀬明神山に行った。思いがけずアカヤシオ・ヒカゲツツジに出会えたが、今年ホソバシャクナゲに蕾は無かった。初見にミツバコンロンソウがあった。

4月21日、日永岳に行った。イワウチワの群落とミヤマトサミズキを初めて見た。イワザクラを14日とは別の場所二ヶ所でも確認した。

4月29日、昨年と同じ日に笈ヶ岳に登った。雪の量は全く違うが2年前と同じ程度だった。17人を二班に分けて全員登頂したが、初回の人が6人、17人での登頂回数は延40回でした。

4月30日、はらい谷登山口から檜新宮を往復した。登山口からはまさしく「カタクリ山」でカモシカ・ノウサギも見られた。ブナオ山観察舎からはクマ三頭も眺めたが、暑いのかクマは雪の上で寝ていた。

5月3日、御池岳に行った。カタクリが咲き、シャクナゲも咲き始めていた。山頂部のササは枯れていて歩きやすかった。

5月4日、伊吹北尾根を縦走し、花は70種程が見られた。

5月5日、1等三角点の尾張本宮山に行ったら、方位標と刻まれた新たな標石に出会った。新ハイの磯部氏に確認すれば、測量標石の一種で多角点の補助に使われるようだとのこと。多角点は見たことがあるが、方位標は見たことはないそうだ。

5月12日、長野の1等・斑尾山に行くと、多くのギフチョウが見られた。ここでは多分ヒメギフチョウだろう。

5月13日、戸隠山に行った。風化した蟻の戸渡りが渡りにくくなっていて、剣の刃渡り前で戻った。黒姫の古池と戸隠の森林植物園ではミズバショウが満開だった。

5月20日、御池岳にてエビネの色違い三種を同じ場所で見た。

5月26～27日、丹沢縦走。ハコネシロカネソウは初見。シロヤシオ・トウゴクミツバツツジ、さらにコイワザクラも見られた。新たな標石「主図根」を二つ見たが詳細は不明。

（海津市　山田明男）

山行歌ほか

太陽神の金の矢が地に突き立ちて
なお輝ける如き巴草
夏伊吹　パラグライダー　綾織の
花園足下　比良遥かなり
あまた咲く花中自立ため赤麻にも
格子模様の逆八蝶来る
これ程にいとおしいのは何故か
伊吹の花よ　又逢う日まで
学窓を巣立ちて　最早二十余年
恩師を囲み　話も尽きず
一斉に鎌首揺らす百合の蕾
慈雨乞い願う　盆雷の轟
遠き日の哀しき戦き取りて
語り継げ　同じ轍踏まぬ間に
古里の連山望み　降り来れば
久方振りに会う姥玉虫
現猫に導かれでもよき道は
山削り取り　古道消し去る
去年池に来し菱　今年叢を成し
豊かに実る　秋　風立ちぬ
山深きが故に尊からずとや
実りもたらす　秋の里山

（松阪市　藪木伸人）

山行短歌・春の花篇

3月22日　奈良高円山
生きよとも泣けとも白き雲流れ
アセビ鈴なる大文字の空に
3月31日　飛鳥高取山
雛飾り御所車かざる町家から
サクラの道を土佐のお城まで
4月5日　但馬朝来山
なごり雪の山に咲くミスミソウ
めぐりくる春を告げる花
4月15日　西山小塩山
カタクリは恋しきものに御座候
彼の君想へば胸の琴鳴りぬ
4月29日　北山皆子山
友と渉りし谷に咲くニリンソウ
京都北山を称えむ詞花よ
5月3日　鈴鹿鳥帽子岳
邂逅果たしえぬ鈴鹿山脈に
イワウチワ少女は消えたまま
5月12日　越前大日山
山遠く谷はるか過ぎ去る季節
哀しみこめて咲くサンカヨウ
5月14日　北山天ヶ岳
大原の里に恋ふらむ乙女子は
シャクナゲ色に頬を染める哉
5月21日　伯耆三徳山
桜草や都忘れ草やかな御寺より
きびしき岩場越えてゆく
5月24日　美作三ヶ上
ブルーバードライン進む僕達に
幸運のコケイラン咲きぬ

（吹田市　木村太郎）

新ハイキング第95号、小山誠次氏の、「天狗峠往復」の記事に関する補足情報です。

927㍍ピーク手前の記述で、「ピークの直前はクマザサと一部ネマガリダケが繁茂し、やぶ漕ぎとなった。……この地点は特異である。」と書かれています。実は、尾根筋を歩いたきた道がクマザサの茂みにぶち当たり、道が無くなったと感じられる地点から、右下に降りる踏み跡があります。ササに隠れているかも知れませんが、その下に踏み跡はあります。ものの20㍍もくだると草地になり、踏み跡は再び登りに転じて、927㍍ピークの杉の間にたどり着きます。そこからまっすぐに進むと、小山さんが指摘しておられるとおりフカンド山方面に行ってしまいます。ピークを左手に捲き込むようにして、磁石で方向を確認して北へ進みます。この曲がり角が最大のポイントでしょう。

それと帰り道です。951ピークからコウンド谷をくだるのは早いのですが、荒れているのでうんざりします。かといって小野村割岳までバックするのも遠廻りで時間が無駄に感じられます。

そこで別の方法です。951㍍ピークから西南西にのびるなだらかな尾根を進みます。所どころに赤テープもあります。その尾根はしばらくして南方に転じます。870㍍地点に鞍部があります。そこから右斜面は植

林地となっています。かなり急な斜面です。踏み跡はありません。杉の木に手をつきながら、滑らないように下ります。まもなく林道にポンと下り立ちます。そこはワサ谷の林道が南北方向に二つに分岐する地点です。あとは林道を快適にくだり、下の町に向かいます。このルートは傾斜が急なので、下りだけにお勧めです。時間が大幅に節約できます。一度お試しください。

951㍍ピークから先は明瞭な踏み跡ではありませんから、地図で方位を確認しながらお進みください。なお、このルートに関しては、以下のホームページが参考になります。「okaoka club」さんのホームページの「山紀行」の2004年12月18日付の記事です。（アドレス http://www.ne.jp/asahi/okaoka/club/index.html）

（長岡京市　中島金一郎）

6月3日夜から23日夜まで、米沢市の娘の所に行って、5歳の孫守をしてきた。米沢市は山形県でも最も南に位置し、すぐ西は飯豊連峰、県を越えて南に磐梯山、北には鳥海山・出羽三山、県西部は朝日岳、東は蔵王と有名な山が目白押し。

蔵王には一度行っているがお釜を歩いていないし、モンスター樹氷も見てみたい。時間があれば磐梯山にでも、孫を連れて少し歩こうかとも思っていたが、時間が取れずにどこへも行けなかった。

またの機会を見て娘の所を拠点として、これらの山々をぜひ歩きたい。（海津市　山田妙子）

6月3日、10年ぶりに尾鷲の海を見下ろす天狗倉山に登った。

前回は尾鷲側の馬越公園から登ったが、今回は紀北町の道の駅から5人で登った。朝から小雨模様だったが、雨具は使わずに済んだ。（2人なら降りそうな日に山には行かないのだが……）

延々と続く見事な石畳は、濡れていることで、一層美しく見えた。

馬越峠には、以前無かった小屋や案内板も整備され、雨雲越しだが尾鷲の町並が眼下に広がった。

空模様をにらんで思案した末、折角来たのだからと、天狗倉山頂まで登ることになった。ツルアリドオシの花を見ながら行くと、山頂近くで道が分かれていた。「前は左の道しか無かった」と言うと、皆が、「じゃあ右へ行こう」と言うので、そちらに向かう。すると、あっけなく天狗の岩屋に着いた。

ちょうど正午だった。梯子を上り、岩上でランチタイム。40分居坐っていたが、他に来る人は無く貸し切り状態。その内に、何と雲は晴れ、海はもちろん、背後の高丸山や銚子川も、はっきり望めるようになり、気分爽快。往路を戻る。天候回復を待って登り始めたらしい大勢の人と出会った。

雨はすっかり止んでいたが、下りなのでペースが上がり、濡れた石畳で滑らぬようにかなり気をつかった。山中でひっそりと咲いていたイチヤクソウと、これから花咲かすべく豪快に葉を広げていたハンカイソウも、心に残った。（松阪市　薮木伸人）

6月16日、熊野古道の例会で賀田湾に面したホテル「尾鷲シーサイドビュー」に投宿した。

ホテルは、羽後峠から下りてきて、次の甫母峠への上り口の中間、クスノキの巨木で名高い飛鳥神社そばの海沿いにあり、好都合だった。

①部屋や浴室からは、湾内の美しい海景色が見渡せた。

②館内がとても清潔で、ホテルとはいえ和室で落ち着けた。

③夕食は、海の幸が豊富かつ新鮮でおいしかった。

これら以外に一番感動したのは、翌早朝からホテルの旦那がサービスで、大型漁船に泊まり客を乗せ、賀田湾から熊野灘を遊覧してくれたことである。約1時間の船旅で、海上から200㍍程もある柱状節理の大岩壁群を見上げて皆息をのんだ。とくに獅ヶ崎の絶壁は大迫力だった。

女将は、はきはきと親切で気さく、出発時にこれからたどる古道の解説案内までしてくれた。（1泊2食）10000円前後

☎0597（27）2200

○宿泊代、少人数での遊覧は交渉してみてください。

（城陽市　村田智俊）

サービスチェーン SHC 新ハイキング

どこへ行こうか

SHCサービス

チェーン

サービスチェーンを利用するときは、電話が往復ハガキで、必ず予約してください。予約のときに、料金を確認してください。

知床岩尾別ユースホステル（知床国立公園内）
〒099-4356
北海道斜里郡斜里町字岩尾別
電　0152-24-2311
羅臼岳登山・知床連山縦走、知床峠ネイチャーウォッチングボート、知床五湖、カムイワッカに一番近い宿

妖精の森　コテージラウル
1泊2食付き6300円
〒018-4511
秋田県北秋田郡森吉高原
電　0186-76-2107
http://www5.etokine.jp/masugi/
ログハウスが点在する森の中、森吉山登山口、森吉山麓スキー場、森吉山ダム、森吉の森等森吉山登山口および阿仁合駅まで送迎無料　田沢湖・十和田湖・白神山地まで車で100分

新鉛温泉　結びの宿　愛隣館
〒025-1025
岩手県花巻市鉛字西鉛23
電　0198-25-2341
F　0198-25-2338
http://www.airinkan.com
e-mail airinkan@airinkan.com
せせらぎと露天風呂の一軒宿
名峰早池峰登山に

温泉ペンション　森のふくろう
〒080-1403　北海道河東郡上士幌町字ぬかびら源泉郷82
電　01564-4-2013
http://www5.ocnet.jp/mifukurou
東大雪のニペソツ山・石狩岳・ウペペサンケ山の宿泊所。朝・夕食付き弁当同意します。深渓釣り、新しいお部屋で（SHC会員1000円引、会員証要）

駒ケ岳観光ホテル
〒014-1201　秋田県仙北郡田沢湖町生保内字駒ケ岳2の30
電話　0187-46-2211
http://www.komagkan.com
花の百名山・秋田駒ケ岳・乳頭山へ
夏は登山・ハイキング
冬はスキー・雪中かんじき体験
田沢湖・高原温泉

さんそう　もみの木
1泊2食付き　6500円から
〒992-1121
山形県米沢市万世町刈安
電　0238-28-2990
F　0238-28-2990
快適なお部屋とおいしい料理のお宿
酒蔵・飯豊の登山口と米沢駅まで送迎致します。（白布・大日杉）

清里イーハトーヴ　ユースホステル
〒099-4403
斜里郡清里町向陽282
電　01522-5-3995
貸切バス・御宿泊　日本百名山斜里岳近くの宿　貸切バスはお一人様より斜里岳清岳荘まで承ります　羽田発着格安航空券も手配します　弁当用意します

山小舎　八甲田山荘
ロープウェイ前
〒030-0111
青森市荒川字寒水沢1-61
電　0177-28-1512
百名山・八甲田山の出発点・最新情報基地
ガイド案内・山スキー・高山植物
手づくりパン・シチューが大人気
旅のわが家

国見温泉　石塚旅館
〒020-0582
岩手県岩手郡雫石町鶯場
直通　0901-9333-4734
5月から11月10日まで営業
連絡先　0196-92-3355
秋田駒登山基地
岩手の秘湯・名物露天風呂

相模屋旅館
〒960-2157　福島市土湯温泉町野地　新野地温泉バス停
電　0242-64-3624
胃腸病の名湯・山菜料理
磐梯吾妻スカイライン入り口

大雪山層雲峡ユースホステル
〒078-1701
北海道上川郡上川町層雲峡
電　01658-5-3418
大雪山・黒岳ロープウェイへ徒歩5分
（2007年グループ割引）
8名以上で1名無料！（6・8・10月のみ）

八幡平グリーンホテル
〒018-5141
秋田県鹿角市八幡平大沼温泉
電　0186-3131-2111
F　0186-3131-2623
http://www.hachimantai-gh.com
東北の百名山の登山基地
国立公園八幡平温泉郷
雲上の大露天岩風呂

彩りの里　紅彩館
1泊2食付き　8300円から
（入浴・休憩・昼食もできます）
〒960-0807
福島県伊達郡霊山町石田字宝司沢9-1
電　024-589-2233
阿武隈の名峰
霊山登山口の自然あふれる宿

あみはりロッチ
〒020-0585
岩手県雫石町長山字岩手山
電　019-693-2313
http://www.onyx.dti.ne.jp/amhari
秀峰岩手山への登山に最適なお宿
三箇所の登山口・三箇所のスキー場完備OK
網張温泉また仙女の湯（露天）も車で3分

山行計画
（9・10月）
新ハイキングクラブ関西

このページの山行計画には、「会員に限る」と特記してあるほかは会員外の方でも参加できます。一人ずつ往復ハガキに記入例によって必ず山行日の7日前までに到着するよう、申込み先を確認のうえ申し込んでください。電話・FAXでの申し込みはお断りします。「費用」のほかに参加名簿代その他の資料代実費をいただくことがあります。山行申し込み後参加できなくなった場合はすぐ係に連絡してください。体調の悪い方、幼児と飛び入りはお断りします。

例会の参加者全員に傷害保険がかけられています。出発点呼の際、係に保険料日額50円と救援対策費日額50円合計100円（夜行日帰りの場合は2日になり200円）を支出していただきます。

傷害保険特約内容は次の通りです。（株式会社損害保険ジャパンと契約）

死亡・後遺障害保険金額	1000万円
入院保険金	日額 5000円
通院保険金	日額 2500円

保険の対象は集合時から解散時まで。事故があった場合は解散までに係に申し出てください。この保険に該当しないものは次の通りです。①ピッケル・6本爪以上のアイゼン・ザイル・ハンマー・ワカンを持参することを明記した山行 ②スキー使用の山行 ③沢・岩・氷雪登はんを目的とした山行 ④宿泊場所内の事故 ⑤病死の場合（詳細は本部まで）

（記入例）

（往復ハガキを使用）

山行き申込み書

山行名（正確に記入すること）

期日

住所 〒

氏名

会員番号
（会員でない方は会員外と記入）

電話番号

生年月日

緊急時の連絡先 TEL
（山行中の連絡先を記入）

自分の住所氏名に「様」を必ず記入しておいてください。

返信ハガキの宛名欄には、ご

9月	行先	定員	リーダー	サブリーダー
1(土)～2(日)	越中・濁谷山～毛勝山	10	山田	
3(月)夜～4(火)	大峰・下多古川上流～大所山尾根（沢歩き）	*10	田中賢	
8(土)	湖北・余呉湖周回尾根歩道		村田	
9(日)	鈴鹿・ザラノ～スリバチ池	*	岩野	
9(日)	紀泉高原・お菊山	30	塚元	
9(日)	朽木・地蔵谷山	23	森脇	ハバス
13(木)	台高・伯母ヶ峰	25	西上	
15(土)	越美・夜叉ヶ池	15	鷲見	
16(日)	寧生・青蓮寺湖畔サイクリング～布生山		山口	
17(祝)	京都北山・江文峠～瓢箪崩山		村田	
17(祝)夜～18(火)	台高・迷岳～古ヶ丸山	*10	田中賢	
20(木)	京都丹波・鬼ヶ城	24	木村	
23(祝)	鈴鹿・滝谷山～サンヤリ～天狗堂	*	岩野	
25(火)	比叡山・大比叡～瓜生山		仲谷	
26(木)	京都北山・伊賀谷山～八丁平	40	金谷	
27(木)	京都北山・桟敷ヶ岳	22	寺井	
29(土)	若狭・千石山	*	高島	

10月	行先	定員	リーダー	サブリーダー
6(土)～8(祝)	白山・御前峰～別山～赤兎山	22	村田	
7(日)	湖北・呉枯ノ峰	30	塚元	

＊＝マイカー山行

山行計画の実施と申し込みについて

① 山行例会は、前もって保険を掛け、登山届を提出しますので、必ず実施日の7日前までに、「往復はがき」で申し込んでください。人数によっては事前にバスやタクシーをチャーターする必要があります。また、山ではいかなる事態が発生するかもしれません。緊急時の連絡先、および生年月日も必ずご記入ください。

② 返信の案内は、実施日の10日前頃からします。直前にならないと参加人数がはっきりせず、交通機関への手配等、費用もはっきりしないからです。また、早くから返信すると、コースの状況等、何か変更になった場合に再連絡するのが大変だからです。早くから申し込まれた方はそれまでお待ちください。

③ 定員制の計画は先着順に受け付けます。すでに定員に達し、キャンセル待ちの場合はその旨をすぐに返信をいたします。返信が無い場合は、定員枠に入っていると判断してください。

④ グレードは、次のように決めています。

（初級向き）初心者でも安全に歩けるコース（3～4時間コース）

（一般向き）日頃山歩きしておられる方なら誰でも歩ける標準コース。あまり危険のない山（5時間コース）

（中級向き）かなり経験を要するコース。危険な所はないが距離が長いコース（6～7時間コース）

（やや健脚向き）距離は中級だが危険な所があり、登り・下りが長く続くコース（6～7時間コース）

（健脚向き）距離が長く、つらい急な登り、危険な岩場、谷の渡渉、やぶ漕ぎの連続など、ハードなコース（7時間以上）

⑤ 雨天中止・決行の判断は、前夜（18時以降）の当地の気象情報を見て、返信案内の判断基準により各自で判断してください（リーダーから連絡はしません）。雨降りの嫌いな方は、雨天・小雨決行の計画には申し込まれないようにお願いします。

10月	行先	定員	リーダー	サブリーダー
7(日)	鈴鹿・芹川南尾根	*	岩野	
7(日)	比良・雄松山荘道～シャカ岳		秦	
11(木)	台高・仙千代ヶ峰	24	木村	
13(土)	飛騨・船山	20	鷲見	
13(土)～14(日)	白山北方・妙法山～三方崩山	10	山田	
14(日)	朽木・駒ヶ岳～池原山	23	森脇	ハバス
15(月)夜～16(火)	大峰・十郎山	*10	田中賢	
16(火)	上醍醐・修験行者道探勝		仲谷	
18(木)	朽木・百里ヶ岳	22	寺井	
18(木)	大峰・小峰山	25	西上	
20(土)	紀北・一石峠～始神峠		稲垣	
20(土)	湖北・安蔵山	*	高島	
20(土)	美濃・魚金山	20	鷲見	
21(日)	鈴鹿・高取山～猿ヶ山～高畑	*	岩野	
21(日)	湖東・猪子山～瓏山		木村	
21(日)	京都北山・八ヶ峰～五波峠	22	村田	
24(水)	京都北山・天狗杉～鞍馬山北尾根		金谷	
27(土)～28(日)	参詣道伊勢路・大坎峠～丸山千枚田	22	村田	
27(土)夜～28(日)	大峰・南尾根～バリゴヤノ頭	*6	田中賢	
28(日)	但馬・氷ノ山	18	古賀	
28(日)	三重・鎧杖岳～鎧杖湖畔サイクリング		山口	

展望の山36
越中・濁谷山と毛勝山（健脚向き）
期　日　9月1日(日)～2日(月)
　　1泊2日
集　合　（1日）JR西岐阜駅6時50分
コース　（1日）西岐阜駅（車）上市町登山口―濁谷山―（往路）―登山口（車）魚津市片貝山荘（泊）
　　（2日）片貝山荘―西尾根ルート―毛勝山―（往路）―片貝山荘（車）西岐阜駅（解散）
装　備　＊片貝山荘泊は食料持参で自炊・要寝袋
費　用　約7000円（車・宿泊代等）
地　図　2万5千＝毛勝山
係　◎山田明男
申込み　〒503―0535海津市南濃町松山624の19山田明男まで
　　＊定員10名（希望多ければ16名まで増員）
　　1等点の濁谷山と二百名山の毛勝山へ登ります。毛勝山も登頂できたら最初で最後の例会とします。標高差―1700㍍で往復10～12時間かかります。申し込みは私の例会に参加実績のある方のみ。雨天決行

大峰
下多古川上流部から大所山尾根（沢歩き・健脚向き）
期　日　9月3日(土)～4日(日)
　　前夜発日帰り
集　合　（3日）近鉄橿原駅前9時10分／下多古林道大所登山口広場22時30分
コース　（4日）琵琶滝展望台登山口―下多古谷上流部―奥駈道―大所山―登山口（解散）
費　用　交通費各自（保険対象外）
地　図　2万5千＝洞川
係　◎田中賢治
申込み　〒518―0626名張市桔梗が丘6の2の18　田中賢治まで
　　＊定員10名
　　＊マイカー―山行（4名まで乗合い可能。希望者はその旨明記ください）
　　中止になった夏の計画を再度試みます。沢タビ、水切れのよい服装（スパッツ＋半ズボン等）で。ハーネス（簡易型で可）、ヘルメット必携。小雨決行

瀬北・余呉湖周回尾根歩道（一般向き）
期　日　9月8日(土)　日帰り
集　合　JR余呉駅9時30分
コース　余呉駅―江土登山口―大岩山―眺ヶ岳―飯浦分岐―大平良山―神明山砦跡―茂山砦跡―神明山砦跡―西天神―余呉駅（解散16時頃）
費　用　約5000円（大阪から）
地　図　2万5千＝木之本・中河内
係　◎村田智俊
申込み　〒610―0121城陽市寺田大畔10の10村田智俊まで
　　余呉湖をとり囲む山並の尾根道をたどって、湖面を見下ろしながら一周します。雨天中止

鈴鹿を歩く269
ザラノ・スリバチ池（一般向き）
期　日　9月9日(日)　日帰り
集　合　多賀栗栖神社前広場8時30分
コース　広場（車）保月アサハギ谷出合―ザラノ―スリバチ池―鉄塔―林道―アサハギ谷出合（解散）
費　用　交通費各自
地　図　昭文社＝「御在所・雲仙・伊吹」
係　◎宮野　明　○山田景三　○後藤康幸
申込み　〒610―0121城陽市寺田大畔10の10
　　新ハイキング関西まで
　　＊マイカー―山行
　　前回雨で中止した山行。ザラノから北東にのびる広大で秘境の樹林を散策します。雨天中止

地図読み山行82
紀泉高原・お菊山（一般向き）
期　日　9月9日(日)　日帰り
集　合　JR長滝駅9時15分（阪和線「快速」を日根野駅で乗り換え）
コース　長滝駅―意賀美神社―滝ノ池―送電線鉄塔―お菊山―林道出合―新家駅（解散）
費　用　約1700円（大阪から）
地　図　2万5千＝樽井・岩出
係　◎塚元一彦　○中村　登
申込み　〒536―0008大阪市城東区関目4の14の9の901　塚元一彦まで
　　＊定員30名
　　新ハイキング関西支部と合同低い山をゆっくり歩きながら、地形図とコンパス（磁石）の勉強をします。シルバーⅢ型コンパスを持参してください。初心者歓迎。雨天中止

近江の山シリーズ③
朽木・地蔵谷峰（中級向き）
期　日　9月9日(日)　日帰り
集　合　JR京都駅八条口団体バスのりば7時20分
コース　京都駅（バス）朽木能家―登山口―地蔵谷峰分岐―地蔵谷峰―（往路）―登山口（バス）京都駅（解散17時頃）
費　用　約3000円（バス代）
地　図　2万5千＝古屋
係　◎森脇貞義　○磯野重治
申込み　〒610―0121城陽市寺田大畔10の10
　　新ハイキング関西まで
　　＊定員23名
　　朽木の奥深い山（△791・5㍍）に登る。やぶ漕きありますので、長袖で参加ください。雨天中止

台高・伯母ヶ峰（一般向き）
期　日　9月13日(木)　日帰り
集　合　近鉄橿原神宮前駅中央口8時05分
コース　橿原神宮前駅（バス）展望休憩所―登山口―伯母ヶ峰―伯母ヶ峰中継所―展望休憩所―登山口―入之波温泉（入谷・バス）橿原神宮前駅（解散17時頃）
費　用　約2800円（バス代）
地　図　昭文社＝「大台ヶ原」
係　◎西上利和　○木村　豊　○前川和佳子
申込み　〒610―0121城陽市寺田大畔10の10
　　新ハイキング関西まで
　　＊定員25名
　　展望のあまり良くない地味な山ですが、豊かな自然に包まれたコースです。昼食は下山後展望休憩所でとり、帰りは入之波温泉（五色湯）で汗を流します。小雨決行

自然観察山行236
越美・夜叉ヶ池（一般向き）
期　日　9月15日(日)　日帰り
集　合　JR大垣駅9時00分
コース　大垣駅（バス）池ノ又林道終点―幽玄ノ滝―夜叉ヶ池―（往路）―林道終点（バス）大垣駅（解散）
費　用　約4000円（大垣駅からバス代等）
地　図　2万5千＝美濃広瀬・美濃川上・広瀬
係　◎鷲見守康
申込み　〒504―0828各務原市蘇原村南町1の19の5　鷲見守康まで
　　＊定員15名（申込状況により減員あり）
　　6月に中止した夜叉ヶ池を再計画しました。雨天決行（雨天時は観察会）

サイクリング&登山①
室生・青蓮寺湖畔と布生山（初級向き）
期　日　9月16日(日)　日帰り
集　合　近鉄名張駅東口9時00分
コース　名張駅（サイクリング・中央公園―青蓮寺ダム―百々―百合川林道―）登山口（駐輪）―布生山―登山口（サイクリング・青蓮寺ダム―中央公園―）名張駅（解散）
費　用　交通費各自（保険対象外）
地　図　昭文社＝「赤目・倶留尊高原」（日帰）
係　◎山口敏明
申込み　〒518―0755名張市緑が丘中144山口敏明まで
　　青蓮寺湖畔・室生火山群の隠れた渓谷を自転車で走り、布生山へ登山します。手袋・サイズの合った予備チューブ必携。マイカーの方は集合駅に無料Pあり。電車の方は輪行袋必要。自転車はマウンテンバイク（MTB）が最適。雨天中止

京都北山歩き124
江文峠から鷹峯扇山（一般向き）
期　日　9月17日(月)　日帰り
集　合　JR京都駅前京都バスのりば8時40分
コース　京都駅（バス）戸寺―江文峠―寒谷峠―鷹峯扇山―岩倉分岐―上高野―叡電三宅八幡駅（電車）出町柳駅（解散16時30分頃）
費　用　交通費各自
地　図　昭文社＝「京都北山」
係　◎村田智俊　○安倉正勝

○呉比裕美
申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
村田智俊まで
北山歩きの入門コース。大原から幡草崩山へ登り、尾根道を上高野へ南下します（本誌47ページ参照）。雨天中止

台高・迷岳から古ヶ丸山
（健脚向き）
期　日　9月17日(祝)夜～18日(火)
前夜発日帰り
集　合　（17日）近鉄桔梗が丘駅21時10分／大台道の駅23時00分
（18日）八知山林道登山口―迷岳―白倉山―古ヶ丸山―カラスキ谷登山口
（解散）
費　用　交通費各自
地　図　2万5千＝七日市・宮川貯水池
係　◎田中賢治○図平くみ子
申込み　〒518－0626
名張市桔梗が丘6の2の18　田中賢治まで
＊定員10名
＊マイカー山行（4名まで乗合い可能。希望者はその旨明記ください）
標高差、距離ともにかなり厳しい歩きになります。マイカーの廻送ができない場合、コース変更の場合あり。小雨決行

ファミリーハイク109
京都丹波・鬼ヶ城（初級向き）
期　日　9月20日(木)　日帰り
集　合　JR新大阪駅1階正面口8時00分
コース　新大阪駅（バス）観音寺―鬼ヶ城―峠分岐―鳥ヶ岳―峠分岐―観音寺（バス）福知山温泉（バス）新大阪駅（解散）
費　用　約4000円（バス代）
地　図　2万5千＝河守
係　◎木村太郎
申込み　〒565－0854
吹田市桃山台1の2のB12の209　木村太郎まで
＊定員24名（会員に限る）
福知山音頭に歌われ地元に親しまれる鬼伝説の鬼ヶ城、1等三角点の烏ヶ岳を歩く。雨天中止

鈴鹿を歩く270
滝谷山・サンヤリ・天狗堂
（やや健脚向き）
期　日　9月23日(祝)　日帰り
集　合　君ヶ畑広場8時30分
コース　君ヶ畑広場（車）ミノガ峠―滝谷山―サンヤリ―天狗堂―宮坂峠―君ヶ畑広場
（解散）
費　用　交通費各自
地　図　昭文社＝「御在所・雲仙・伊吹」
係　◎岩野　明　○山田景三○後藤康幸
申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで
＊マイカー山行
ミノガ峠から南に連なる長大な秘境の稜線、滝谷山・サンヤリ・天狗堂を踏破。宮坂峠から君ヶ畑にくだります。雨天中止

火曜ハイク35
比叡山・大比叡から瓜生山
（一般向き）
期　日　9月25日(火)　日帰り
集　合　叡電八瀬比叡山口駅9時00分
コース　八瀬比叡山口駅―西山峠―西塔駐車場―根本中堂―大比叡―ケーブル比叡駅―水飲み対陣跡―瓜生山―バブテスト病院―銀閣寺（解散16時20分頃）
費　用　交通費各自
地　図　昭文社＝「京都北山」
係　◎仲谷礼司　○沖　伸
申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで
山腹を捲いて比叡山に登ります。少しロングコースになりますが、大比叡から瓜生山に廻ってくだります。雨天中止

北山ちょっと歩き91
伊賀谷山から八丁平（中級向き）
期　日　9月26日(水)　日帰り
集　合　JR京都駅八条口団体バスのりば7時50分
コース　京都駅（バス）葛川中村―伊賀谷山―西南尾根―899ピ峰―府県境分岐―二の谷林道―八丁平回遊―八丁平中村乗越分岐―中村乗越―伊賀谷右俣―伊賀谷林道―葛川中村（バス）京都駅（解散18時頃）
費　用　約2500円（バス代）
地　図　2万5千＝花背
係　◎金谷　昭　○磯部　純

申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで
＊定員40名（会員に限る）
4月に雨天中止した山を再計画しました（91号参照）。雨天中止

平日ふれあいハイク64
京都北山・桟敷ヶ岳（一般向き）
期　日　9月27日(木)　日帰り
集　合　JR京都駅八条口団体バスのりば7時30分
コース　京都駅（バス）大森―大谷峠―ナベクロ峠―桟敷ヶ岳―薬師峠―縁坂峠―大森中町（バス）京都駅
（解散17時頃）
費　用　約3000円（バス代）
地　図　昭文社＝「京都北山」
係　◎寺井恒夫
申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで
＊定員22名
城丹国境の大谷峠から桟敷ヶ岳を目指します。雨天中止

若狭の山
千石山（一般向き）
期　日　9月29日(土)　日帰り
集　合　旧上中町役場9時00分
コース　役場（車）瓜割名水公園―千石山―（往路）―瓜割名水公園（解散）
費　用　交通費各自
地　図　2万5千＝遠敷
係　◎高島伸浩
申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで
＊マイカー山行
リクエストにお応えして再行します。雨天決行

白山・御前峰から別山と赤兎山
（健脚向き）
期　日　10月6日(土)～8日(祝)
2泊3日
集　合　（6日）JR京都駅八条口団体バスのりば7時20分
コース　（6日）京都駅（バス）白水湖大白川登山口―大倉山―室堂（泊）
（7日）（御前峰往復）室堂―トンビ岩―南竜ヶ馬場―別山―三ノ峰―六本槍―上小池（バス）鳩ヶ湯（泊）
（8日）鳩ヶ湯―林道登山口―たんどう谷―南尾根ブナ林―赤兎山―小原峠―小原林道終点（バス）勝山温泉（入浴・バス）京都駅（解散20時頃）
費　用　約30000円（バス・宿泊代等）
地　図　昭文社＝「白山」
係　◎村田智俊　○呉比裕美
申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
村田智俊まで
＊定員22名
白山へ登り、別山・三ノ峰から鳩ヶ湯へくだる。3日目は欲ばって赤兎山へ登ります。雨天決行

地図読み山行83
湖北・呉枯ノ峰（一般向き）
期　日　10月7日(日)　日帰り
集　合　JR木之本駅9時15分
コース　木之本駅―登山口―呉枯ノ峰―菅山寺―坂口バス停―木之本駅（解散）
費　用　約4500円（大阪から）
地　図　2万5千＝木之本
係　◎塚元一彦　○中村　登
申込み　〒536－0008
大阪市城東区関目4の14の9の901　塚元一彦まで
＊定員30名
新ハイキング関西支部と合同地形図を正しく読めると山の楽しさは二倍、安全は三倍になります。シルバーⅢ型コンパスを持参してください。初心者歓迎。雨天中止

鈴鹿を歩く271
芹川南尾根（一般向き）
期　日　10月7日(日)　日帰り
集　合　河内線向之倉入口手前広場8時30分
コース　広場（車）向之倉（カツラの巨木）―杉峠―P627―杉峠―向之倉（解散）
費　用　交通費各自
地　図　昭文社＝「御在所・雲仙・伊吹」
係　◎岩野　明　○山田景三○後藤康幸
申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで
＊マイカー山行
向之倉から旧道の登り尾を杉峠に登り、北東の宮前へと続く秘境の尾根をのんびり歩く。池もあります。雨天中止

比良を歩く61
雄松山荘道からシャカ岳
（中級向き）
期　日　10月7日(日)　日帰り
集　合　JR近江舞子駅9時00分
コース　近江舞子駅―雄松山荘道登山口―大津ワンゲル道出合―岩場―旧リフト道出合―シャカ岳―横谷―梨ノ木林道養魚場―寒風橋―鹿ヶ瀬道（バス）近江高島駅（解散17時頃）
＊歩行約6時間
費　用　約1700円（京都から）
地　図　2万5千＝北小松
昭文社＝「比良山系」
係　◎秦　康夫
申込み　〒610-0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで
横谷の下りは、やや荒れ道です。雨天中止

ファミリーハイク110
台高・仙千代ヶ峰（一般向き）
期　日　10月11日(水)　日帰り
集　合　JR新大阪駅1階正面口7時00分
コース　新大阪駅（バス）新大杉橋―倉元橋登山口―倉元谷左岸尾根頭―仙千代ヶ峰―（往路）―新大杉橋（バス）新大阪駅（解散）
費　用　約4500円（バス代）
地　図　2万5千＝大杉峡谷・宮川貯水池
係　◎木村太郎
申込み　〒565-0854
吹田市桃山台1の2のB12の209　木村太郎まで
＊定員24名（会員に限る）
秘境大杉谷の宮川流域へと雄野を広げる、台高山脈前衛の奥深い孤高峰に登る。雨天中止

自然観察山行237
飛騨・船山（一般向き）
期　日　10月13日(土)　日帰り
集　合　JR岐阜駅7時30分
コース　岐阜駅（バス）位山峠付近―アララギ湖分岐―船山―アララギ湖（バス）岐阜駅（解散）
費　用　約4000円（岐阜駅からバス代等）
地　図　2万5千＝位山
係　◎鷲見守康
申込み　〒504-0828
各務原市蘇原村甫町1の19の5　鷲見守康まで
＊定員20名（申込状況により減員あり）
飛騨位山三山の一つ、船山のブナ原生林を歩きます。雨天決行（雨天時は観察会）

展望の山37
白山北方・妙法山と三方崩山
（健脚向き）
期　日　10月13日(土)～14日(日)　1泊2日
集　合　（13日）JR西岐阜駅6時50分
コース　（13日）西岐阜駅（車）三方岩駐車場―三方岩岳―野谷荘司山―妙法山―（往路）―駐車場（車）白川村木谷民宿（泊）
（14日）宿（車）平瀬―三方崩山―（往路）―平瀬（入浴・車）西岐阜駅（解散）
費　用　約15000円（車・宿泊代等）
地　図　2万5千＝平瀬・中宮温泉・新岩間温泉
係　◎山田明男
申込み　〒503-0535
海津市南濃町松山624の19
山田明男まで
＊定員10名程度（13日は日帰りのみ6名可）
三方岩岳から妙法山を目指し、翌日は三方崩山に挑みます。黄葉のカラマツが見られると良いですね。雨天決行

近江の山シリーズ④
朽木・駒ヶ岳から池原山
（中級向き）
期　日　10月14日(日)　日帰り
集　合　JR京都駅八条口団体バスのりば7時20分
コース　京都駅（バス）木地山登山口―焼尾東谷出合―稜線―森林公園分岐―駒ヶ岳―池塘―P744ピ―池原山―足谷口（バス）京都駅（解散18時頃）
費　用　約3000円（バス代）
地　図　2万5千＝古屋
昭文社＝「京都北山」
係　◎森脇真義　○磯野重治
申込み　〒610-0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで
＊定員23名
稜線にはすばらしいブナ林が残っていて池塘もあります。ゆっくり歩けます。雨天中止

大峰・十郎山（健脚向き）
期　日　10月15日(日)夜～16日(月)　前夜発日帰り
集　合　（15日）近鉄榛原駅21時10分／杉の湯道の駅22時00分
コース　（16日）白川又川茗荷谷出合―西尾根―十郎山―（往路）―出合（解散）
費　用　交通費各自
地　図　2万5千＝釈迦ヶ岳
係　◎田中賢治○岡平くみ子
申込み　〒518-0626
名張市桔梗が丘6の2の18　田中賢治まで
＊定員10名
＊マイカー山行（4名まで乗合い可能。希望者はその旨明記ください）
西尾根から十郎山へ。小峠山へ足をのばしたいのですが、日が短いので可能性は低い。小雨決行

火曜ハイク36
上醍醐・修験行者道探勝
（一般向き）
期　日　10月16日(火)　日帰り
集　合　日野誕生院バス停9時15分（詳細は返信ハガキで）
コース　日野誕生院―地蔵広場―日野山―バノラマ岩―ユウレイ峠―水鳥谷修験道―本宮ノ峰―東の覗き―開山堂―横嶺峠―高塚山―長尾天満宮―醍醐寺（解散14時50分頃）
費　用　交通費各自
地　図　2万5千＝京都東南部
係　◎仲谷礼司　○沖　伸
申込み　〒610-0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで
醍醐には行場が多くあるようですが、今回はユウレイ峠から水晶谷修験道をたどります。雨天中止

平日ふれあいハイク65
朽木・百里ヶ岳（一般向き）
期　日　10月18日(水)　日帰り
集　合　JR京都駅八条口団体バスのりば7時30分
コース　京都駅（バス）小入谷越―百里ヶ岳―木地山峠―木地山（バス）京都駅（解散18時30分頃）
費　用　約3000円（バス代）
地　図　昭文社＝「京都北山」
係　◎寺井恒夫
申込み　〒610-0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで
＊定員22名
小入谷越から百里ヶ岳を越え、木地山峠から木地山集落へ下山します。雨天中止

大峰・小峠山（一般向き）
期　日　10月18日(水)　日帰り
集　合　近鉄橿原神宮前駅中央口8時05分
コース　橿原神宮前駅（バス）水尻バス停―P926ピ―展望休憩所―小峠山―（往路）―水尻バス停（バス）橿原神宮前駅（解散17時30分頃）
費　用　約2900円（バス代）
地　図　2万5千＝釈迦ヶ岳
係　◎西上利和　○木村　豊
○前川和佳子
申込み　〒610-0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで
＊定員25名（会員に限る）
今春の山崩れでの、国道169号線の通行止が解除されましたので、リベンジ山行します。前鬼の北方、展望の良い小峠山へ登ります。小雨決行

三重の山99
紀北・一石峠と始神峠
（中級向き）
期　日　10月20日(土)　日帰り
集　合　JR紀伊長島駅9時00分
コース　紀伊長島駅（車）加田教会前バス停―一石峠―平方峠―展望台―熊谷道登り口―三野瀬駅―宮川第二発電所―始神峠―宮谷池―大舟橋―船津駅（電車）紀伊長島駅（解散17時30分頃）
費　用　1150円
地　図　2万5千＝長島・島勝浦・引本浦
係　◎稲垣逸夫
申込み　〒519-0311
鈴鹿市大久保町2065
稲垣逸夫まで
熊野古道の峠二つを歩きます。一部交通機関を利用。雨天決行

湖北の山
安蔵山（健脚向き）
期　日　10月20日(土)　日帰り
集　合　中河内集落中央広場9時00分
コース　広場（車）尾羽梨登山口―安蔵山―（往路）―登

費用　山口（解散）
交通費各自
地図　2万5千＝中河内
係　◎高島伸治
申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで
＊マイカー山行

安蔵山西尾根を往復します。今年春に登山道を整備しました。雨天決行

自然観察山行238
美濃・魚金山（一般向き）
期日　10月20日(日)　日帰り
集合　JR大垣駅9時00分
コース　大垣駅（バス）のりこし峠―高尾山―魚金山―（往路）―のりこし峠（バス）大垣駅（解散）
費用　約4000円（大垣駅からバス代等）
地図　2万5千＝谷汲・樽見・谷合
係　◎鷲見守康
申込み　〒504－0828
各務原市蘇原村南町1の19の5　鷲見守康まで
＊定員20名（申込状況により減員あり）

美濃の静かな山です。雨天決行（雨天時は観察会）

鈴鹿を歩く272
高取山・猿ヶ山・高畑
（一般向き）
期日　10月21日(日)　日帰り
集合　河内線寺院前広場8時30分
コース　広場―八谷―高取山―猿ヶ山―高畑―中村―寺院広場（解散）
費用　交通費各自
地図　昭文社＝「御在所・雲仙・伊吹」
係　◎岩野　明　○山田昌三
○後藤康幸
申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで
＊マイカー山行

この山系はほとんど歩かれていない。すばらしい樹林と苔むしたカレンフェルトの岩稜は最高です。雨天中止

ファミリーハイク111
湖東・猪子山から繖山
（一般向き）
期日　10月21日(日)　日帰り
集合　JR能登川駅9時40分
コース　能登川駅―上山天神社―猪子山―地獄越―繖山―本丸跡―観音正寺―北腰越―安土駅（解散）
費用　約3100円（大阪駅から交通費）
地図　2万5千＝能登川・八日市
係　◎木村太郎
申込み　〒565－0854
吹田市桃山台1の2のB12の209　木村太郎まで

干支の山猪子山から佐々木氏の山城跡、西国観音札所を訪ね巡礼道をくだる。雨天中止

京都北山歩き125
八原から八ヶ峰・五波峠
（一般向き）
期日　10月21日(日)　日帰り
集合　JR京都駅八条口団体バスのりば7時40分
コース　京都駅（バス）知見八原―八ヶ峰スキー場跡―知井坂―八ヶ峰―若丹国境尾根―五波峠（バス）京都駅（解散18時頃）
費用　約3000円（バス代）
地図　昭文社＝「京都北山」
係　◎村田智俊　○安倉正勝
○呉比裕美
申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
村田智俊まで
＊定員22名

八原から1時間で知井坂の峠、八ヶ峰を越えて展望の良い尾根道を五波峠へくだります（本誌51ページ参照）。小雨決行

北山ちょっと歩き92
旧花背峠から天狗杉・鞍馬山北尾根
（一般向き）
期日　10月24日(水)　日帰り
集合　京阪出町柳駅7時50分発京都バス広河原行き乗車
コース　出町柳駅（バス）北大路駅（バス）峠下―旧花背峠―天狗杉―旧花背峠―鞍馬山北尾根―鞍馬山（経塚）―龍神池―鞍馬寺本殿―叡電鞍馬駅（解散14時頃）
費用　交通費各自
地図　昭文社＝「京都北山」
係　◎金谷　昭
申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
新ハイキング関西まで

旧花背峠より天狗杉を往復後、鞍馬山に向って展望の良い尾根を歩きます。雨天中止
＊JR京都駅経由の方は地下鉄北大路駅から乗車が便利。

紀伊山地の参詣道を歩く15
伊勢路④
⑲新鹿から大吹峠・松本峠越と鬼ヶ城・獅子岩・花の窟
⑳神木から横垣峠・風伝峠・通り峠越と丸山千枚田
（一般向き）
期日　10月27日(土)～28日(日)
1泊2日
集合　(27日)近鉄大和八木駅8時00分
コース　(27日)大和八木駅（バス）新鹿波田須トンネル南口―徐福の宮―大吹峠―大泊―松本峠―鬼ヶ城―獅子岩―花の窟（バス）熊野かんぽ保養センター（泊）
(28日)宿（バス）神木―横垣峠―阪本―さぎり茶屋―秋葉の里穴蔵―風伝峠―通り峠―丸山千枚田―千枚田口（バス）大和上市駅（解散19時頃）
費用　約18000円（バス・宿泊代等）
地図　当日配布
係　◎村田智俊　○安倉正勝
○呉比裕美
申込み　〒610－0121
城陽市寺田大畔10の10
村田智俊まで
＊定員22名

伊勢路もいよいよ、今回1日目の鬼ヶ城で熊野灘岸から離れ、山間の峠越え道で熊野本宮を目指すことになります。雨天決行

大峰・南尾根からバリゴヤノ頭
（健脚向き以上）
期日　10月27日(土)夜～28日(日)
前夜発日帰り
集合　(27日)近鉄橿原駅21時10分／大川口23時30分
(28日)大川口―バリゴヤノ頭―稲村ヶ岳―クロモジ尾―白倉谷林道（解散）
費用　交通費各自（保険対象外）
地図　2万5千＝弥山
係　◎田中賢治
申込み　〒518－0626
名張市桔梗が丘6の2の18　田中賢治まで

＊定員6名程度（会員に限る）
＊マイカー山行（若干名乗合い可能。希望者はその旨明記ください）

ハイキングリーダーまたは同等レベルの人向き。バリゴヤノ頭南尾根を登り、クロモジ尾を経て白倉谷へくだります。南尾根では安全確保のためロープを使いますので、ハーネス・ヘルメット必携。小雨決行

但馬・氷ノ山（中級向き）
期日　10月28日(日)　日帰り
集合　JR加古川駅北ロータリー7時40分
コース　加古川駅（バス）峰の茶屋―仙谷―氷ノ山―三の丸―峰の茶屋（バス）加古川駅（解散19時頃）
費用　約4500円（加古川駅よりバス代）
地図　2万5千＝氷ノ山・若桜
係　◎古賀慶二　○岡田　昇
申込み　〒675－0112
加古川市平岡町山之上684の33・17A403
古賀慶二まで
＊定員18名

紅葉の季節、下山は、キャラボクや矮性の天然杉を見ながら三の丸へ稜線をたどります。雨天中止

サイクリング&登山②
三重・錫杖岳と錫杖湖畔
（中級向き）
期日　10月28日(日)　日帰り
集合　JR加太駅9時00分
コース　加太駅（車）柚の木峠登山口（駐輪・車）下之垣内登山口―尾根分岐―落合道分岐―錫杖岳―柚の木峠登山口（サイクリング・錫杖湖一周～）下之垣内登山口（車）加太駅（解散）
費用　交通費各自（保険対象外）
地図　5万＝津西部
係　◎山口敏明
申込み　〒518－0755
名張市緑が丘中144
山口敏明まで

マイカーと自転車を利用して登山口と下山口を別にして天を突く錫杖岳に登り、錫杖湖をサイクリングします。手袋・サイズの合った予備チューブ必携。自転車はマウンテンバイク（MTB）が最適。雨天中止

新ハイキング選書

第27巻 **房総のやまあるき** 内田栄一 著

A5判261頁／定価1838円　あなたの知らない千葉県南部の58コース
「えっ！千葉に山があるんですか？」そんなあなたに、とっておきの房総のやまあるきをご紹介。標高ではうかがい知れない奥深い房総の山へのガイド。

第26巻 **静かなる尾根歩き** 松浦隆康 著

A5判288頁／定価1680円　奥多摩から八ヶ岳まで日帰り100コース
今までむずかしいと思っていたコースへの道を開くガイド書。コースにグレード区分をつけ、最新の踏査にもとづき全て分かりやすい略図入りガイド。

第25巻 **東京近郊里山ハイキング** 新ハイキング・ペンクラブ 著

A5判232頁／定価1680円　身近な自然を楽しむ東京近郊67コース
意外なほど豊かな自然が残っている東京近郊。北総・房総・武蔵野・多摩・湘南・三浦半島の里山紀行に加え、初詣と七福神めぐりを網羅した一冊。

第24巻 **山岳巡礼** 佐藤光雄 著

B6判362頁／定価1680円　山に魅せられた一登山家の珠玉の紀行集
春の穂高、夏の大雪、秋の鋸岳北方稜線、冬の御嶽、ひとり拓く山の世界。
本格的に山に取り組む人への良き案内書。

第23巻 **多摩100山** 守屋龍男 著

B6判244頁／定価1575円　多摩の山100山を選び組みあげた50コース
多摩丘陵の低山から東京都の最高峰雲取山までを50コースにまとめて紹介。略図や写真も豊富に入ってわかりやすいガイド書。多摩246山の資料付き。

第4巻（改訂2版） **一等三角点のすべて** 多摩雪雄 編

上製本／B6判352頁／定価1890円　一等三角点研究の決定版
都道府県別に一等三角点を地図上に明示。一等三角点についての詳細な解説、高度順100座一覧表など、この1冊で、一等三角点のすべてがわかる。

近刊 **バリエーションルートを楽しむ** 松浦隆康 著

A5判288頁／定価1680円　花・巨樹・滝・眺望など魅力の100コース
好評の『静かなる尾根歩き』著者による第2弾。奥多摩・奥武蔵／高尾山・扇山付近／丹沢・箱根／道志・御坂／大菩薩付近など全コース略図付き。2007年10月下旬刊行予定

●本誌添付の振込用紙でご注文されると、送料当社負担

新ハイキング社
〒114-0023 東京都北区滝野川7-5-5　Tel/Fax 03-3915-8110

山行報告
（5・6月号）
新ハイキングクラブ関西

台高・迷岳と木梶谷界隈
（鈴鹿遊山31）

5月4日(祝)～5日(祝)
1泊（テント）2日
（4日　晴れ）（集合）蓮ダム管理舎7・45（車）スメール駐車場8・00（車）唐谷林道終点8・30—飯盛山尾根9・40—迷岳10・10—迷岳の霊木10・30（昼食）11・10—サワグルミのコバ12・30—迷の口13・20—唐谷一俣—唐谷林道終点14・50（車）スメール駐車場15・20（懇親会）18・00（解散・泊）
（5日　晴れ）（集合）高見トンネル東口7・45（車）鳴滝展望駐車地8・20～9・30—十字峡9・55—赤ゾレ山10・55—木梶谷源頭11・35（昼食）12・40—P1311 6㎞馬駈け場14・25—木梶山15・15—駐車地16・35（解散）
予定した唐谷一俣からの入口を見逃し、一般ルートで迷岳へ登る。南斜面の霊木を探してくだると、バイケイソウのなかにあった。迷の窪を探索した満足の1日だった。木梶谷は、この山域に詳しい伊勢山上住人の方にガイドしてもらった。芽吹きの谷、花の道にはカエルやヤマカガシがまどろみ、巨木を探索しながらブナ樹林を歩いた。
（参加者）田尾　肇　高原芳彦　池田隆一　梶川軍治　真島　和　平木　勉　◎筒井克治
（4日）梶　真知子
（5日）岩鶴健司　伊藤喜久男　大西俊郎　辻　宣序　中井昭二　松村雅子　○岡田一民（計15名）

高取山・猿ヶ山・高畑
（鈴鹿を歩く263）

5月6日(日)　◎岩野　明
＊雨天のため中止しました。

京都北山・桟敷ヶ岳
（花巡り山行40）

（＊5月8日の予定を11日に変更して実施した）
5月11日(金)　くもり
（集合）京阪出町柳駅8・30（バス）岩屋橋9・30～45—西谷林道終点11・00～05—岩屋山12・00～05—都跡めの岩12・25（昼食）13・00—桟敷ヶ岳13・40～55—ナベクロ峠14・20～25—長谷林道終点15・10—大森キャンプ場15・30—薬師峠15・50～55—岩屋橋16・35～17・00（車内解散・バス）京都市内
お目当てのヤマシャクヤクやクリンソウなどを堪能した花歩きだった。
（参加者）木村　豊　道平きわみ　堀江房雄　山根弘美　船本裕巳子　上山正二　石原君子　中尾美智子　松村雅子　小松志信　鍬田トシエ　青木一雄　加納由紀子　○西原辰夫　◎田中　明（計15名）

六甲
アイスロードから地獄谷西尾根
（火曜ハイク32）

5月8日(火)　晴れ
（集合）六甲ケーブル下9・30—アイスロード登山口9・50—前ケ辻10・10～15—ダイヤモンドポイント11・50（昼食）12・40—地獄谷西尾根—下山口13・50～14・00—神鉄大池駅14・25（解散）
25度もある夏日なのに六甲の上に登ると爽やかな空気が流れていた。先週に咲いていたコバノミツバツツジが散り落ちていたのは残念だが、後方でシロバナウンゼンツツジを見つけたようだ。久しぶりの縦走もいいものだ。
（参加者）池田　茂　中嶋日出男　中川節子　木内粕文　小川富士雄　大林　進　柳川常雄　今村あやの　夏山巻子　清　紀嘉　佐々木幸子　市野博文　萩野暢子　南　ミヤ子　金谷　昭　佐々木トシ子　渡辺民子　竹田英美　久保田玲子　大和　紘　小松志信　船本裕巳子　宮西和子　小林　桂　加納由紀子　河内正治　○青木一雄　○村井寿和　◎仲谷礼司（計19名）

加賀・大嵐山
（ファミリーハイク103）

5月10(木)　◎木村太郎
＊雨天のため中止しました。

美濃・伊吹北尾根
（自然観察山行231）

5月12日(土)　晴れ
（集合）JR大垣駅9・00（バス）国見峠10・05～10—銀助平11・15～25—国見岳12・00—大荒山12・15（昼食）12・45—御座峰13・10—静馬ヶ原15・15～20—笹平農道終点16・15（バス）池田温泉17・15（入浴）18・00（バス）大垣駅18・30（解散）

スプリング・エフェメラルはほとんど花を落としていたが、追いかけるようにヤマシャクヤク・ヤマブキソウ・ラショウモンカズラなどが咲き誇っていた。しかし、入山者が増えており、踏みつけによって花たちの勢いは衰退しているようだ。

（参加者）伊藤　直　伊藤和代　大西節郎　大林　進　荻野美紀恵　小田妙子　川島勝美　加藤真佐子　栗栖宏吉　高橋舜治　滝本由美子　細野欽也　堀田輝子　渡辺かつこ　若松朝子　○仲谷礼司　◎登見幸康　（計17名）

越前

大佛寺山・火燈山から小倉谷山

5月12日(日)～13日(月)　1泊2日

（12日　晴れ）（集合）JR京都駅八条口（バス）永平寺ダム11・13—登山口11・35～52—大佛寺跡12～45～55—大佛寺山13・08（昼食）14・30—虎斑滝15・10～35—永平寺ダム15・55（バス）丸岡温泉「たけくらべ」16・30（泊）

（13日　晴れ）宿7・42—火燈山登山口8・45—火燈山10・00～13—小倉谷山10・40～55—最低コル11・46（昼食）12・40—富士写ヶ岳13・31～14・00—大内峠登山口15・00（バス）たけくらべ温泉15・15（入浴）16・04（バス）京都駅18・55（解散）

大佛寺山から見る白山山系の展望は第一級だった。火燈山から富士写ヶ岳は、シャクナゲの多い所だが、今年は異年のようで咲いていなかった。

（参加者）栗栖君子　村田はる江　村井寿和　和田純子　市井ユリエ　上田久子　山岸勝雄　船本裕巳子　中川節子　杉本英一　砂原恵美子　金森節子　松村雅子　中澤與司博　小尾末吉　若林文夫　森　美香子　長沢佑美　川田洋子　首藤育子　森　瑞代　小林　桂　夏山春子　小松志信　○磯野重治　◎森脇真義　（計26名）

蓬莱山から夫婦滝

（比良を歩く58）

5月13日(日)　晴れ

（集合）JR志賀駅9・00（バス）びわ湖バレイ前（ゴンドラ）打見山9・45—蓬莱山10・05～15—滝平10・35—汁谷10・43～55—シャクナゲ原生林11・15—夫婦滝11・45（昼食）12・30—汁谷13・08～20—木戸峠13・25—クロトノハゲ13・45～55—天狗杉14・23～30—林道登山口14・56～15・05—志賀駅15・40（解散）

25万株といわれる蓬莱山のスイセンも見事だったが、木戸峠からクロトノハゲに至る斜面をびっしり埋める菫岡のイワカガミが圧巻だった。汁谷のキャンプ場で十数ヶ所に設置された、真新しいハンモックに乗って遊んだのもおもしろかった。

（参加者）馬籠忠男　野里マツ代　松井明忠　山本文雄　波多野恵子　巻田　晃　松尾麗子　井林寿癸子　小川晴美　妹尾公代　本間黎子　○本間　隆　◎奏　康　（計13名）

鈴鹿・鳥帽子岳から三国岳

5月13日(日)　くもりのち晴れ

（集合）JR京都駅7・40（バス）時山バンガロー村9・40～50—鉄塔10・15—三国岳分岐11・00—手前ピーク11・10—鳥帽子岳11・30～40—手前ピーク11・50（昼食）12・40—三国岳13・50～14・00—最高点14・10—焼尾山分岐15・00～10—鞍掛峠15・20—鞍掛トンネル東口15・40～16・00（バス）京都駅17・40（解散）

鳥帽子岳のシャクナゲは多く咲き残っていて、シロヤシオも美しく咲いていた。三国岳への尾根も快調にアップダウンをこなし、御池岳・藤原岳を前方に、霊仙山を右に見ながら歩いた。焼尾山分岐にもシャクナゲが咲き、イワカガミが群生して咲いていた。

（参加者）西村文男　武部美美子　岩村春子　西田俊治　伊東ナナ子　荻野暢子　狩野東彦　小栗大直　上田裕子　稲津謙治　前田喜久子　崎山悦子　岩佐　修　野末あや子　岡崎知子　多賀久子　大園加代子　堀内預智　宮野哲郎　小川富士雄　井上恵子　須藤浩子　三井紘一　小谷和子　牧　和夫　角田一江　今泉　勲　荒木光雄　鷲田広美　中谷峯子　大東　哲　岩鶴健司　岡田豊治　岩田育士　福隅　章　○真比裕美　○安倉正勝　◎村田智俊　（計33名）

奥美濃・金草谷から金草岳

5月14日(月)夜～15日(火)前夜発日帰り

（14日）（集合）近鉄桔梗が丘駅21・10（車）芋ヶ平（泊）

（15日　くもりのち晴れ）芋ヶ平（車）金草谷山合8・20—金草岳11・35（昼食）12・35—金草谷出合15・30（マイカー組解散・車）近鉄名張駅20・05（解散）

芋ヶ平からの高倉林道は法面工事が一ヶ所あったが、何とか通してもらう。金草谷は残雪を心配していたが、雪は消えていた。むせるような緑の谷をつめ、源流の密やぶをシャクナゲに悩められながら必死で詰げば、奥美濃の大展望の広がる国境稜線に飛び出す。下降路の確保のために、マーキングは欠かせない。下りは、少しでも間違えば草付きのガレ場に進退が窮まるので、登路を忠実に下降する。

（参加者）大村俊子　岡平くみ子　山形　明　小林　修　高原芳彦　○伊藤喜久男　◎田中登治　（計7名）

笠置・木梶山から伊勢辻山

5月18日(日)　くもり

（集合）近鉄福原神宮前駅8・05～10（バス）展望休憩所9・25～50—木梶林道—登山口10・35—木梶山11・20—馬駐場分岐11・55（昼食）12・30—赤ゾレ山13・20—伊勢辻山14・00—三度小屋辻—大又（和佐羅滝口）16・00（バス）福原神宮前駅17・35（解散）

（参加者）栗栖君子　和田純子　岩村春子　松村雅子　狩野東彦　平田輝美　馬籠忠男　渡部和美　荻野暢子　上田裕子　岩佐　修　大石吉彦　西原晨夫　竹田勝美　中川節子　山西　治　松上美代子　下條利恵　川俣　勲　山口充代　山根弘美　下部正年　大園加代子　堀内預智　川俣節子　佐々木輝子　古山幸男　上島義之　大林　進　○木村　豊　○前川和佳子　◎西上利和　（計32名）

南勢・五ヶ所浅間山と馬山

（三重の山96）

5月19日(土)　晴れ

（集合）伊勢道玉城インター・コンビニ駐車場9・00（車・サニーロード）五ヶ所・愛洲の館9・40—浅間山10・20～40—愛洲の館11・10～20—馬山12・05（昼食）13・00—役場—五ヶ所城跡13・35～40—愛洲の館13・55（資料館見学）14・30（解散）

浅間山・馬山共に展望抜群、言うこと無し。アサギマダラ・モンキアゲハ・アオスジアゲハ、鈴舌のウグイス、ミカンの花の香りなどなど、言うこと無し。

（参加者）亀井悦子　石田眞由美　辻　宣序　相沢芒二　岡本美千子　川村政和　武藤由美子　稲垣亜美子　◎稲垣逸夫　（計9名）

太郎・竜ヶ岳

（鈴鹿を歩く264）

5月20日(日)　くもり

（集合）国道421号線白谷峠取付広場8・30—白谷峠9・15—大井谷出合9・50—源流尾根10・00—中腹広場12・00（昼食）12・45—竜ヶ岳13・30—石榑峠14・40—広場15・10（解散）

竜ヶ岳西斜面ルートが消えているため太尾をカットし、大井谷の出合から登る。秘境の大井谷は新緑の深い樹林のなかに2、10㍍の滝と廊下が続き、獣道を探して登る。竜ヶ岳の西斜面の広大なササ原は、強風とガスのなかに獣道が山頂まで続く。ギンラン・シロヤシオ・ツクバネウツギ・アオダモなど、花々を愛でながら楽しく歩いた。

（参加者）稲津謙治　服部　堯　小林　修　奥野太一郎　高橋舜治　伊東弘隆　石田眞由美　武村千鶴　大西節郎　友田美保子　水戸鉄治　栗本敏夫　網木美恵子　金谷　昭　一芝義雄　一芝美知子　吉岡　仁　小松志信　○後藤康幸　○山田景三　◎岩野　明　（計22名）

湖西・駒ヶ岳

（平日ふれあいハイク63）

5月21日(月)　晴れ

（集合）京都駅八条口7・10（バス）足谷口9・10—池原山10・00—P744㍍10・35—池11・05—駒ヶ岳12・00（昼食）13・00—P696㍍手前の与助谷林道13・45—木地山15・05（バス）京都駅17・30（解散）

雲ひとつない青空、ブナ林の新緑、さわやかな風があった。光る若葉にやわらかな日差しは人をみな幸せ気分にするようでした。

（参加者）蓮井洋子　栗栖君子　和田純子　後藤純子　仲谷礼司　崎山悦子　松村雅子　狩野東彦　渡部和美　田中　明　船本裕巳子　妹尾一正　加藤浩二　野末あや子　中川節子　須藤浩子　山盛加奈子　長沢佑美　岩本彩子　松上美代子　○川上久堅　◎寺井恒夫　（計20名）

美作・三ヶ上

（ファミリーハイク104）

5月24日(水) 晴れ

（集合）JR新大阪駅7・30（バス）上斎原役場10・40～50—放牧場跡11・30～35—山頂まで1.8㌔道標12・05～15—三ヶ上12・45（昼食）13・20—三角点ピーク13・35—三ヶ上13・50～14・00—放牧場跡14・50～15・00—上斎原役場15・30～35（バス）上斎原温泉15・45（入浴）16・50（バス）新大阪駅20・10（解散）

ブルーバードラインの登山道で幸運にもコケイランに出会えた。風清かに吹く稜線には、イワカガミ・アカモモ・ユキザサなど、多くの花が咲いていた。

（参加者）栗栖君子　道平きわみ　妹尾一正　木村　豊　加藤浩一　田島輝昭　岩城豊子　伊東ナナ子　岡崎知子　平田輝美　安田文美江　渡部和美　米山喜子　中澤ちず子　村上嘉子　本間昭恵　金藤千恵子　中谷峯子　前田一代　中尾美智子　本家洗子　長沢佐美　木内範文　澤田高治　岡　倍弘　岡　菊江　○松井明忠　◎木村太郎（計28名）

若狭の山・大御影山

5月26日(土) 晴れ

（集合）美浜町役場9・00（車）白谷登山口9・40—大御影山11・45（昼食）13・15—ハゲノ谷登山口14・50—白谷登山口15・05～25（解散）

リクエストにお応えした新緑の大御影山。晴天に恵まれ、せせらぎ、小鳥の声、花の香り、新緑のグリーンシャワー、風のそよぎ、人生の幸せをいっぱい感じた一日だった。

（参加者）狩野東彦　南　智恵子　堀江房麿　須藤浩子　船越みよ子　山形　明　萩野鴨子　光川二美子　神野孝允　白木良弘　白木やす子　加藤國計　谷　守　市井ユリエ　岩本彩子　湯浅次男　船本裕巳子　石原君子　國近正男　武藤由美子　◎高島伸治　（計21名）

丹沢・塔ノ岳から丹沢山・蛭ヶ岳・檜洞丸縦走

（展望の山31）

5月26日(土)～27日(日)　1泊2日

〈26日　晴れ〉（集合）JR長島駅6・05（車）名古屋市営地下鉄上社駅6・50（車）やびつ峠・富士見山荘11・00—三ノ塔12・25（昼食）12・45—烏尾山13・10—行者岳13・40—新大日14・30—塔ノ岳13・15—丹沢山・みやま山荘16・35（泊）

〈27日　晴れ〉丹沢山5・05—木動ノ峰5・50—蛭ヶ岳6・45～7・00—神ノ川乗越8・30—檜洞丸10・00～30—ゴーラ沢出合12・20—西丹沢自然教室13・20（車）中川温泉（入浴）14・30（車）上社駅18・20（車）近鉄長島駅19・00（解散）

天候にも恵まれ、2日間充実した山歩きができた。ハコネシロガネソウは初見だがたくさんあった。シロヤシオ・トウゴクミツバツツジが見事に咲き、2日間で数百人に出会った。西丹沢は山開きだった。

（参加者）朝倉松雄　長坂佐知子　高原芳彦　馬場桂子　佐古田文子　小林一世　安藤ユウ　生越恵美子　村田紀生　竹田勝英　茂合ひろ子　緒方由子　山田妙子　佐々木輝子　横山かず子　◎山田明男（計16名）

台高・北股川源流大黒北尾根から弥次平峰・馬ノ鞍峰縦走

5月28日(月)夜～29日(火)前夜発日帰り

〈28日〉（集合）近鉄榛原駅21・10（車）明神谷出合駐車場（泊）

〈29日　くもり〉明神出合6・40（車）北股川林道崩壊地手前置車7・25—北股川ホウキ谷（大黒北尾根取付）8・00—大黒尾根（主稜線）9・30—弥次平峰10・10—馬ノ鞍峰12・50—明神出合14・50（北股川置車回収）16・00（マイカー組解散・車）近鉄榛原駅17・20（解散）

北股川林道は、昨年同様、終点約2㌔手前の崩壊地まで車乗り入れ可。北股川本流へ下り、対岸の尾根に取り付く。稜線へ出ると、シロヤシオの花が残り一斉に歓声が上がる。弥次平峰付近はやぶが濃く、露で体がびしょ濡れ。不動谷の源流はブナの林が霧のなかにみごとであった。明神出合にくだってからの車の回収に時間がかかるのが、このコースの難点だろうか。車廻送にご協力いただいた皆さんに感謝。

（参加者）大村俊子　鮫田二郎　松村稚子　福本朝子　湯浅みや子　吉田峰子　上西久子　伊藤喜久男　森　瑞代　伊沢重正　○岡平くみ子　◎田中賢治　（計12名）

比叡・鷲立山

（北山ちょっと歩き89）

5月30日(水) ◎金谷　昭

＊雨天のため中止しました。

高畑山・那須ヶ原山・油日岳

（鈴鹿遊山32）

6月2日(土) ◎筒井克治

＊案内人の都合で中止しました。日を改めて実施します。

奥美濃・白尾山

（自然観察山行232）

6月2日(土) 晴れ

（集合）JR岐阜駅7・00（車）白尾スキー場駐車場8・20～25—リフト終点地9・45～55—白尾山11・20（昼食）12・20—リフト終点地13・40—スキー場駐車場15・00～10（車）やまと温泉15・20（入浴）16・00（車）岐阜駅17・30（解散）

スキー場の3㌔のダウンヒルコースを登って登山口へ。自然観察山行とすれば最適の人数。ブナ林の尾根を歩き、野鳥のさえずりを聴き、樹木の観察をした。ウスバシロチョウも舞っていた。ネマガリタケ（チシマザサ）・コゴミ（クサソテツ）・フキ・ウド・ワラビなどの山菜が豊富だった。

（参加者）堀田輝子　萩野美紀恵　伊藤　直　伊藤和代　武藤由美子　○山形　明　◎鷲見芳康（計7名）

飛騨・猪臥山と大雨見山

（展望の山32）

6月2日(土)～3日(日)　1泊2日

〈2日　晴れ〉（集合）JR西岐阜駅8・00（車）猪臥山登山口9・55—西ルート—猪臥山12・30（昼食）13・05—東ルート—登山口15・30（林道経由組は道の駅へ下山16・20・車）JR飛騨古川駅16・55（車）宇津江四十八温泉・しぶきの湯（入浴）17・55（車）上宝民宿18・40（泊）

〈3日　晴れ〉民宿7・45（車）京都大学飛騨天文台駐車場8・25—大雨見山9・00—駐車場9・30（車）国見山手前9・50—駒草峠登山口10・20—国見山10・45（昼食）11・30—登山口11・45（車）宇津江四十八滝野草園散策13・10（車）西岐阜駅15・30（解散）

猪臥山へは新たに開かれたルートで園まっていない。ネマガリダケが多く採れた。下山時、3名は鉄塔経由で車に向かうが他は林道を歩き、多くのワラビ・ヤマウド・フキ・イタドリを採取する。しかし、林道は車とは反対の道の駅に行き、距離も約二倍の10㌔を歩くことになった。2日目は車で大半登ったので、二つの山とも山頂は近かった。

（参加者）久米孝子　森　美香子　朝倉松雄　馬場桂子　横山かず子　佐藤文枝　緒方由子　中澤與司博　若林文夫　三井紘一　廣瀬恵美子　廣瀬重見　竹内正子　山田妙子　◎山田明男　（2日）北村つねみ　（計16名）

白鹿背山・明神山・高野山

（鈴鹿を歩く265）

6月3日(日)　晴れ

（集合）永源寺支所8・25（車）永源寺8・30—P662峠10・00—P852峠12・00（昼食）12・50—白鹿背山13・50—明神山15・00—鹿登山口15・50—永源寺支所16・40（解散）

永源寺の参道から左の尾根に取り付くと、アカマツを主に大きく茂る深い樹林が続き、P662からは爽やかな風と新緑。登り切るとブナの大木も続いた。P852で昼食。白鹿背山からは展望を楽しみながら明神山へ。高野山はカットして参道を麓に一気に下りた。

（参加者）友田　毅　友田美保子　稲津謙治　服部　堯　伊藤喜久男　西田俊治　永戸鉄治　奥野太一郎　萩野鴨子　伊東弘隆　石田眞由美　梁本敏夫　大西啓郎　網木美恵子　岩本彩子　武村千鈔　佐古田文子　西村文男　一芝義雄　一芝英知子　池田隆一　谷　守　○山田景三　◎岩野　明　（計24名）

三重・経ヶ峰から錫杖湖へ

6月3日(日)　くもり

（集合）近鉄大和八木駅8・00（バス）仲之郷菅原神社9・30～10・00—赤地蔵10・15—光明寺跡10・30—通称P峠11・10—山出道出合11・20～30—経ヶ峰12・15（昼食）13・00—休憩小屋13・10～25—嘉儀の頭14・00～10—北笹山14・50—笹子林道15・10～25—経ヶ峰林道登山口15・35～50（バス）錫杖湖畔ホテル16・00～10（バス）天理駅17・45（解散）

新ハイOBで地元の吉本さんが急きょ駆けつけてくださり、山出道出合まで長い林道を迂回する古い道を先導してもらった。山頂はあいにくのガスで展望が無いのは残念。吉本さんが管理されている清潔でりっぱな休憩小屋で経ヶ峰の自然のすばらしさを学んだ。小

屋で吉本さんと別れ、嘉儀の頭（△788・8㍍）、北笹山（767㍍）を踏んで急坂をくだり、笹子林道へ下山した。

（参加者）佐野信江　和田純子　村井寿和　仲谷礼司　村田はる江　狩野東彦　平田輝美　安田文美江　白畠忠子　渡部和美　伊東ナナ子　小栗大直　杉本英一　中嶋日出男　市岡晴美　小尾末吉　武部美美子　岡崎知子　岩村春子　野末あや子　下都正年　井上慈子　久保田玲子　長沢佑美　松尾一郎　大園加代子　高橋舜治　多賀周二　多賀久子　宮野哲郎　宮野栄子　岩鶴健司　小池一郎　堀内預智　永富律子　栗栖崇吉　栗栖君子　○呉比裕美　○安倉正勝　○吉本泰之

◎村田智俊　（計41名）

生駒・生駒山上（火曜ハイク33）

6月5日(火)　くもり

（集合）近鉄石切駅10・00～25―辻小谷コース―興法寺11・20～30―生駒山上12・10（昼食）13・10―振河泉コース―タタラ山14・10―枚岡神社14・55～15・00（解散）

鉄塔の多い生駒山、誰でも知っている山だけど歩いてみると新しい発見もある。水車とか道端のお地蔵さんとか、三角点は山上遊園地の中に埋もれて探すのにひと苦労するが、ゆっくり歩いて楽しめる山だった。

（参加者）本間　隆　本間黎子　市野博文　東村由美　南　ミヤ子　塚本忠次　青木一雄　永富律子　後藤純子　小林博子　小田潤子　渡部和美　園田喜幸　川上久堅　金谷　昭　兼田幸子　今村あやの　上田久子　中谷孝子　加納由紀子　山縣勝美　○村井寿和

◎仲谷礼司　（計23名）

京都北山

花背峠から滝谷山・大見西尾根（やぶ漕ぎ山行⑯）

6月9日(土)　◎村田智俊

＊雨天のため中止しました。

六甲・摩耶山（ファミリーハイク105）

6月10(日)　くもり一時雨

（集合）阪急王子公園駅9・30―五鬼城展望広場10・10～15―上野道四丁石碑11・00～05―天上寺跡11・20～30―摩耶山三角点11・45―剣屋台11・50（昼食）12・50―徳川道出合13・35～40―分水嶺越分岐14・25～30―桜茶屋15・00～10―見晴し展望台15・35～50―地下鉄新神戸駅16・00（解散）

晴れたり曇ったり通り雨に遭遇したり、この日の天候は気まぐれだった。摩耶自然観察園のアジサイは見頃に早かったが、水辺の花コウホネと出会えた。

（参加者）本間昭恵　伊東ナナ子　本間黎子　村上嘉子　中澤ちず子　河内正治　柳川常雄　岩鶴健司　多賀久子　長沢佑美　林　信男　藤村勝彦　妹尾一正　○松井明忠

◎木村太郎　（計15名）

鵜川左股から滝山・トビ岩（比良を歩く59）

6月10日(日)　くもり時々晴れ

（集合）JR北小松駅9・05―鵜川出合9・35～50―直角の流10・45―四つ辻からの尾根下11・20～30―滝山12・05（昼食）12・50―オトシ分岐13・02―扇ノ間13・25～35―トビ岩分岐13・38―トビ岩14・00～10―トビ岩分岐14・32―北小松ヒル15・07～20―北小松駅15・35（解散）

曇り空で鵜川出合までのアプローチでも汗をかかず、登りは随所に滝が現れる谷筋の水辺道。下りは木陰の多い尾根筋道。一日を涼しく過ごせた。下りに立ち寄った、びわ湖に突き出ずトビ岩の上からの眺めは迫力満点だった。

（参加者）稲津謙治　林　久美子　大川直澄　岩佐　修　市井ユリエ　小栗大直　金谷　昭　野里マツ代　小林　修　前田初雄　網木美恵子　吉野栄子　志水明美　二階堂雅人　妹尾公代　岩本彩子　武部美美子　加藤國計　谷　守　船本裕巳子　林　弘毅　三井紘一　○大東　哲

◎秦　康夫　（計24名）

京田辺・甘南備山（地図読み山行81）

6月10日(日)　晴れ一時雨

（集合）JR京田辺駅9・30～45―一休寺10・10～15―登山口駐車場10・40～50―展望台11・10～20―甘南備山11・30―三角点11・50（昼食）13・10―野外活動センター13・50～14・20―JR松井山手駅14・50（解散）

南山城平野の小さなコブような低山だが、森の緑と野鳥の鳴き声が楽しく展望も優れている。地形図とコンパスワークの勉強には最適だった。終了間際に激しい雷雨に遭遇したが、野外活動センターで雨宿りができて助かった。

（参加者）上田裕子　東村由美　川上久堅　天岡　進　岩本いすゞ　小川明美　三木京子　上田千枝子　前田幸子　中澤成嘉　中澤一恵　橋本広子　○中村　登

◎塚元一彦　（計14名）

台高・野江股の頭から白倉山、大熊谷頭縦走

6月11日(日)夜～12日(火)

前夜発日帰り

（11日）（集合）近鉄榛原駅21・10（車）蓮ダムサイト（泊）

（12日　晴れ）蓮ダムサイト（車）江馬小屋谷林道終点7・20―なんの木平9・00―野江股の頭9・40―白倉山11・40（昼食）12・30―大熊谷の頭13・40―庵の谷林道14・20―林道中間地点駐車地14・50（マイカー組解散・車）榛原駅16・30（解散）

林道終点から対岸の野江股と江馬小屋谷を分ける尾根を急登。植林用の仕事道なのでしっかりしている。1000㍍を過ぎるあたりから自然林になり、風が涼しい。P1226に荷物をデポし、野江股の頭を往復後、快適な尾根を東へ。白倉山付近は伐採から森が回復していないので、やぶがうるさい。大熊落とし を見晴らすテラスで昼食。大熊谷の頭から庵の谷へくだる。林道は3年前の災害からほぼ修復が完了していた。中間部に上げた車を使い、江馬小屋谷に置いた車を回収した。

（参加者）緒方由子　大村優子　鮫田二郎　山縣勝美　佐古田文子　上西信子　松村雅子　湯浅みやこ　井沢重正　高原芳彦　南　智恵子　大西敬郎　中井昭二　山口敏明　上西久子　森　瑞代

○岡平くみ子　◎田中賢治　（計18名）

大阪南部・岩湧山（花巡り山行41）

6月12日(火)　◎田中　明

＊係の都合で6月14日(木)に変更したが、雨天のため中止しました。

紀北・荷坂峠道とツヅラト峠越（三重の山97）

6月16日(土)　晴れ

（集合）JR紀伊長島駅9・00（車）公民館駐車場9・05～15―荷坂旧道（荷車道）登り口10・10―沖見平10・35～45―荷坂峠11・05―梅ヶ谷駅11・50（昼食）12・30―高野橋13・30―ツヅラト峠14・00～25―志子側登り口15・00～10―二郷神社16・25―公民館駐車場16・35（解散）

熊野古道の二つのコースをまとめて歩いた。日差しが強烈で距離も長かったが、シダの新緑が疲れを吸いとってくれた。またササユリの花が見頃で言うこと無しの一日だった。

（参加者）亀井悦子　岡本美千子　平　龍一　平　幸子　石田貞由美　汐崎　光　谷口嘉夫　谷口美津子　永吉戸鉄治　織田定朗　織田洋子　村上みつ　中森義信　稲垣恵美子

◎稲垣逸夫　（計15名）

越美・夜叉ヶ池（自然観察山行233）

6月16日(土)　◎鷲見守康

＊荒天予報のため中止しました。

伊勢路③

②三木里から三木峠・羽後峠越

③賀田から甫母峠・逢神坂峠越（紀伊山地の参詣道を歩く14）

6月16日(土)～17日(日)　1泊2日

（16日　晴れ）（集合）近鉄大和八木駅8・00（バス）三木峠口12・20―三木峠展望所12・40（昼食）13・30―羽後峠14・30―賀田飛鳥神社15・40～55―ホテル「尾鷲シーサイドビュー」16・00（泊）

（17日　くもり）ホテル6・00（船・賀田湾遊覧）ホテル7・00～45―甫母峠8・45―二木島駅10・00～20―二木島峠口10・35―二木島峠11・10―逢神坂峠11・40（昼食）12・20―新鹿駅付近13・15（バス）三浦温泉・望月ゆ～ゆ～館15・10（入浴）16・00（バス）天理駅18・40（解散）

三木里から新鹿までの低山を越える峠道、整備された古道を快適に歩いた。ホテル近くの飛鳥神社のクス巨木、ホテルの船で賀田湾を遊覧して見た楯ヶ崎の柱状節理の絶壁は圧巻であった。昔は海の古道といわれたらしいが、ここはすばらしい船旅だったろう。ホテルのサービスに感激した（「せせらぎ」P86参照）。

（参加者）小栗大直　村田はる江　白畠忠子　岡崎知子　河原美代子　佐野信江　高橋舜治　野末あや子　宮野哲郎　宮野栄子　伊東ナナ子　川田洋子　片山克博　片山喜代子　中川節子　上西信子　船本裕巳子　宮路ちへ子　宮路非希子

○安倉正勝　○呉比裕美

◎村田智俊　（計22名）

山人山・七人山

（鈴鹿を歩く266）

6月17日(日)　くもり

（集合）武平峠西登山口8・20—いっぷく峠9・00—沢谷峠9・10—イイナのコバ10・10—人寄りのコバ11・00（昼食）11・40（健脚の人雨乞岳往復）12・40—七人山13・00—武平峠15・05（解散）

急登40分のいっぷく峠で一服。沢谷峠に着いたが深いガスで何も見えない。部界尾根は新緑とガスのなか、緑風に吹かれ最高。イイナのコバに着くとガスも消え、薄日が差し新緑が一段と冴え、皆んなイイナ、イイナの声。人寄りのコバでのんびり昼食。健脚の人は雨乞岳を往復した。午後に七人山のブナ林を散策し、武平峠へくだった。

（参加者）服部　堯　稲津謙治　三上神夫　寺井博子　萩野暢子　原　光一　原　幸子　佐古田文子　辻　宣序　金谷　昭　石田眞由美　沖　伸　谷　守　友田美保子　大西修郎　栗本敏夫　綱木美恵子　礒部　純　一芝義雄　一芝美知子　樫田勝利　栗岡克子　○山田景三　◎金谷　明　（計24名）

大峰

クロモジ尾根から稲村ヶ岳

6月22日(金)　くもりのち雨

（集合）近鉄橿原神宮前駅8・05～10（バス）登山口9・30～45—クロモジ尾根取付10・30—大日岳キレット12・10—稲村ヶ岳12・30（昼食）13・00—大日岳キレット—クロモジ尾根—登山口15・30（バス）橿原神宮前駅17・30（解散）

稜線直下で雨となり、山頂はガスに包まれて展望無し。早々に食事を済ませ下山する。降りしきる雨のなか、支尾根に迷い込み、谷筋を悪戦苦闘しながらトラバースして正規のルートに戻った。

（参加者）和田純子　栗栖君子　塚本忠次　狩野東彦　平田輝美　堀内預智　松村雅子　久保田玲子　鮫田二郎　馬籠忠男　佐々木輝子　山西　治　川俣　勲　大園加代子　池田　茂　竹田勝英　中尾美智子　山根弘美　古山幸男　西原辰夫　○木村　豊　○前川和佳子　◎西上利和　（計23名）

湖西の山・大谷山から寒風山

6月23日(土)　晴れ

（集合）JRマキノ駅9・30（車）石庭登山口10・00—大谷山12・10（昼食）13・15—寒風山13・45～55—林道出合15・10—大谷山登山口15・45（車）マキノ駅16・15（解散）

梅雨時だが見事に晴れ渡り、晴れ男・晴れ女ばっかりで青春を謳歌した。

（参加者）下郡正年　君塚郁子　後藤康幸　山形　明　夏山春子　寺井博子　小奥大直　都築由美子　萩野暢子　志水明美　南　智恵子　奥田則夫　礒部　純　森　美香子　須藤浩子　神野孝允　加納由紀子　山本文雄　細野欽也　船本裕巳子　中島　隆　白木良弘　白木やす子　加藤園計　谷　守　光川二美子　石原君子　三井猛一　◎高島伸浩　（計29名）

菩提滝から沢ノ池・沢山・桃山

（北山ちょっと歩き90）

6月27日(水)　くもりのち晴れ

（集合）菩提道バス停9・10～25—菩提滝9・55～10・05—沢ノ池10・40～55—仏栗峠11・05—沢山11・20～25—沢山分岐11・35（昼食）12・30—吉兆山12・51～58—桃山13・20～30—原谷弁財天13・50～14・00—宇多天皇陵14・25—塔の下バス停14・50（解散）

幸い梅雨の中休みの好天に恵まれた。蒸し暑さは樹陰によってやわらぎ、快適に北山歩きを楽しんだ。コース路傍にはササユリが見られ、前夜までの降雨で菩提滝は名瀑ぶりを発揮していた。

（参加者）鮫田二郎　中嶋日出男　山岸勝雄　栗栖君子　夏山春子　岩佐　修　萩野暢子　塚本忠次　木内和文　大林　進　宮西和子　本間　隆　本間黎子　中谷堂子　澤田高治　横江　進　田中三恵子　柳川常雄　宮崎紀正　野村　潔　上野保美　渡部和美　川上久堅　松本忠雄　沖　伸　和田直樹　中島　隆　後藤純子　松上美代子　呉山繁三　今泉　勲　原　みとえ　平田輝美　仲谷礼司　今村あやの　青木一雄　中村英雄　岩本いすゞ　村井秀和　加藤園計　佐々木幸子　小川晴美　星野正弘　赤松しげみ　岡田里子　林　弘毅　清　紀嘉　森本幹雄　中川節子　湯浅次男　仲山節子　吉保孝次　○礒部　純　○谷　守　○石原君子　◎金谷　昭　（計56名）

（5・6月の参加　延673名）

新ハイキングクラブ関西入会の案内

当会は雑誌「新ハイキング関西の山」（隔月刊・年6号発行）の定期購読者を中心にしたハイキングの集いです。

この雑誌は紀行文やコースガイドなどで、関西のハイキングコースや山の情報を発信しています。山の知識を深め、健康な身体をつくり、自然のなかを歩く喜びをともに広めましょう。

「新ハイキングクラブ」は昭和25年発足以来、東京を中心に55年間余、好評のうちに活動しています。関西は平成3年秋発足で16年目に入りますが、すでに多数の会員で活動しています。

会員は当会の山行例会に優先して参加できます。この山行例会を通じて楽しい山歩きを、多くの仲間たちと味わいませんか。

リーダー（係）はすべて無償の奉仕で、各自で切符を買い茶代を払い、宿泊料もすべてワリカンです。

会員には「新ハイキング関西の山」を毎号お届けします。

四季の自然に触れながら山を歩き、若々しい心と健康をいつまでも持続するのはすばらしいことです。これから始めてみたい人、すでにベテランの人もみなさんご入会いただけます。

入会金　500円（ワッペン共）

年会費　3000円（送料共）

入会の申し込み（随時）はこの雑誌に挿入の振替用紙をご利用ください。氏名（ふりがな）及び第何号からの送本かを忘れずにご記入ください。

なお、定期購読をご希望される方も会員になっていただきますと、毎号確実にお手元に届きますので便利です。

切手530円分をお送りになれば、「新ハイキング関西の山」最新号を1冊送ります。

○山行リーダー募集

リーダーは2ヶ月に一～二回程度の山行例会を計画・実施していただきます。

無償の奉仕ですが、やりがいもあり、楽しいものです。経験のある方や、やってみたいと思われる方は、新ハイキング関西までご連絡ください。マニュアル「リーダー必携」をご参考に送ります。

○新入会員（定期購読者）紹介

新しいお仲間のみなさんです。会員番号5296番から5307番まで（敬称略）。

【三重】　小山　稔

【滋賀】　蓮田義博　山本よし枝　長谷川エミ子　中谷美代子

【京都】　中川隆雄　伊佐昭三

【奈良】　白崎俊一

【大阪】　南本典明　北川嘉宏　山木重司　福山茂樹

（12名）

訂正とお詫び

95号（盛夏）19ページ下段後ろから5行目「御前鉢」は「御前峰」が正しい。

95号（盛夏）39ページ下段3行目「951喜下」は「951直下」が正しい。

95号（盛夏）40ページ下段1行目「9年版」は「2年版」、また同段後ろから2行目「（1999年版）」は「（1992年版）」が正しい。

95号（盛夏）42ページ下段後ろから2行目「多勢」は「大勢」に訂正します。

95号（盛夏）47ページ付近略図中「竹田川」は「牧田川」が正しい。

95号（盛夏）72ページ中段後ろから3行目・2行目「雨宮芳州」は「雨森芳州」が正しい。

95号（盛夏）85ページ二段目最終行「トレモノ」は「トレモロ」が正しい。

95号（盛夏）104ページ二段目16行目と次行の間に「（参加者）塚本忠次　仲谷礼司」が脱落していました。

95号（盛夏）106ページ二段目3行目「群落していた」は「群生していた」に訂正します。

95号（盛夏）59ページの本文訂正は本誌47ページ下段の囲み記事を参照ください。尚参考として訂正ルートは49ページの付近略図上でご確認ください。

（編集室）

書店でお求めになりたい方へ

前もって毎号ほしいと「購読予約」をされますと、どこの書店でもお買い求めいただけます。「関西の山」は偶数月の20日頃（隔月刊）の発売。